

史跡・名勝 嵐山

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 二〇〇四 一

史跡・名勝 嵐山

2005年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

史跡・名勝 嵐山

2005年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生きています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来1200年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じ広く公開することで、市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用を図っていきたいと願っています。

研究所では、平成13年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ規模の違いはありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび旅亭新築工事に伴う史跡・名勝 嵐山の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げます。

平成17年1月

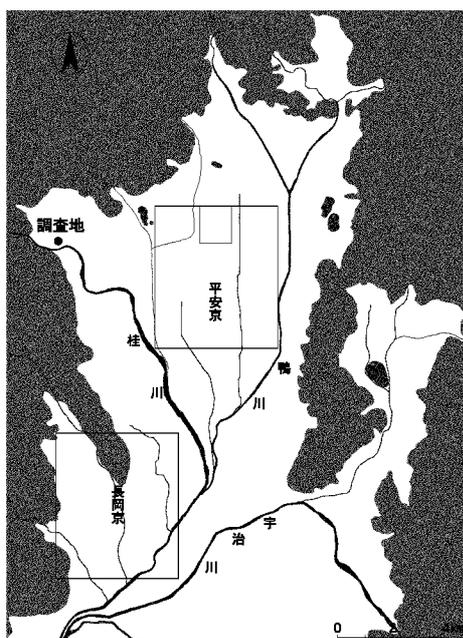
財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 史跡・名勝 嵐山
- 2 調査所在地 京都市右京区嵯峨天龍寺芒ノ馬場町7
- 3 委 託 者 大藤産業株式会社 代表取締役 佐藤行信
- 4 調査期間 試掘調査：2004年7月1日～2004年7月16日
発掘調査：2004年8月12日～2004年11月12日
- 5 調査面積 試掘調査：253㎡ 発掘調査：700㎡（1区約40㎡ 2区約660㎡）
- 6 調査担当者 試掘調査：本 弥八郎 発掘調査：布川豊治・本 弥八郎
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「大覚寺」、「嵐山」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 日本測地系（改正前）平面直角座標系（ただし、単位(m)を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用基準点 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点（一級基準点）を使用した。
- 11 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 12 遺構番号 通し番号を付し、遺構種類を前に付けた。また整理作業時に必要になった新たなものはアルファベットを付した。
- 13 遺物番号 掲載順に通し番号を付した。また新たに必要になったものは追加した。
- 14 掲載写真 村井伸也・幸明綾子・調査担当者
- 15 遺物復元 村上 勉・出水みゆき
- 16 基準点測量 宮原健吾
- 17 保存処理 竜子正彦
- 18 整理担当 布川豊治・本 弥八郎
- 19 本書作成 布川豊治・本 弥八郎
- 20 執筆分担 布川豊治：1・2・4・5
本 弥八郎：3
嵯峨井 建：6
- 21 編集・調整 長宗繁一・児玉光世
- 22 付章「旧天龍寺境内より発見の霊庇廟址について」は、賀茂御祖神社禰宜 嵯峨井 建氏の玉稿をいただいた。また出土瓦については、浅田製瓦工場の浅田晶久氏よりご教示を受けた。記して謝意を申し上げる。

(調査地点図)



目 次

1 . 調査経過	1
2 . 調査地の位置と環境	2
(1) 位置と環境	2
(2) これまでの調査	2
3 . 試掘調査	4
(1) 遺 構	4
(2) 遺 物	7
4 . 発掘調査	8
(1) 遺 構	8
1) 基本層序と遺構の概要	8
2) 1 区の遺構	9
3) 2 区の遺構	12
(2) 遺 物	25
1) 土器類	25
2) 瓦 類	29
3) 土製品	35
4) 金属製品	37
5) その他の遺物	38
5 . ま と め	40
6 . 付章 旧天龍寺境内より発見の霊庇廟址について	54
(1) はじめに	54
(2) 発掘調査による所見	54
(3) 霊庇廟創建とその周辺	55
(4) 後醍醐天皇・夢窓国師・足利尊氏と霊庇廟	58

図 版 目 次

図版 1	遺構 (2 区)	第 1 面遺構平面図 (江戸時代、 1 : 200)
図版 2	遺構 (2 区)	第 1 面遺構平面図 (室町時代後期、 1 : 200)
図版 3	遺構 (2 区)	第 2 面遺構平面図 (鎌倉時代後期から室町時代前期、 1 : 200)
図版 4	遺構 (2 区)	第 2 面遺構概要図 (室町時代前期、 1 : 200)

- 図版5 遺構(2区) 第2面遺構概要図(鎌倉時代後期、1:200)
- 図版6 遺構(2区) 北壁土層断面図(1:50)
- 図版7 遺構(2区) 掘込み地業土層模式図(1:50)
- 図版8 遺物 土壌76・77出土軒瓦拓影・実測図(1:4)
- 図版9 遺物 その他の遺構出土軒瓦拓影・実測図(1:4)
- 図版10 遺物 出土瓦拓影・実測図(叩きとヘラ記号、1:4)
- 図版11 遺物 金属製品実測図(1:2)
- 図版12 遺構(1区および試掘調査)
- 1 1区全景(東から)
 - 2 1区溝7(東から)
 - 3 試掘調査C地点の段差(南東から)
- 図版13 遺構(2区)
- 1 第1面中央部の礎石(江戸時代、南から)
 - 2 第1面礎石44・45(東から)
- 図版14 遺構(2区)
- 1 第1面全景(室町時代後期、東から)
 - 2 第1面溝33(北東から)
- 図版15 遺構(2区)
- 1 第2面全景(鎌倉時代後期から室町時代前期、南西から)
 - 2 第2面中央部遺構群(溝128・柱穴137・柵Dなど、北から)
- 図版16 遺構(2区)
- 1 柱穴92(北西から)
 - 2 土壌138(北から)
 - 3 土壌139(東から)
 - 4 柱穴137完掘状況(北から)
- 図版17 遺構(2区)
- 1 南拡張区の柵D検出状況(北から)
 - 2 土壇144A(南東から)
 - 3 西部の土壇と黄褐色礫敷整地層(北から)
- 図版18 遺構(2区)
- 1 土壌76・77完掘状況(北東から)
 - 2 土壌76断面(西から)
- 図版19 遺構(2区)
- 1 掘込み地業、石列A・B(西から)
 - 2 地業に伴う石列A(北東から)
 - 3 地業に伴う石列B(北東から)
- 図版20 遺構(2区)
- 1 石列A・B(空中から、写真上が北)
 - 2 石列B・C(空中から、写真上が北)
- 図版21 遺構(2区)
- 1 石列B断面(北東から)
 - 2 石列C(北東から)
 - 3 西部北壁断割(地業断面、南から)
 - 4 調査区東北端の地業(手前、東から)

図版22	遺構 (2 区)	1 溝33西壁にみえる地業 (南東から)
		2 手前の断面にみえる地業の土層 (石列C付近、東から)
図版23	遺物	土器 1
図版24	遺物	土器 2
図版25	遺物	土器 3
図版26	遺物	軒丸瓦 1
図版27	遺物	軒丸瓦 2
図版28	遺物	軒平瓦 1
図版29	遺物	軒平瓦 2
図版30	遺物	瓦の叩き・刻印・ヘラ記号
図版31	遺物	瓦のヘラ記号
図版32	遺物	1 土錘
		2 金属製品 (釘類)
図版33	遺物	金属製品
図版34	遺物	瓦の葺土 (200) ・壁土 (201 ~ 207)

挿 図 目 次

図 1	調査前全景 (北から)	1
図 2	調査風景 (南東から)	1
図 3	調査区配置図 (1 : 1,000)	2
図 4	調査位置図 (1 : 5,000)	3
図 5	試掘調査区平面図 (1 : 200)	5
図 6	試掘調査区断面図 (1 : 100)	6
図 7	試掘調査全景 (北から)	7
図 8	1 区基本層位図 (1 : 50)	8
図 9	2 区基本層位図 (1 : 50)	8
図10	1 区遺構実測図 (1 : 50)	10
図11	竈 2 (南東から)	11
図12	竈 2 断面図 (1 : 30)	11
図13	竈 5 (東から)	11
図14	竈 5 断面図 (1 : 30)	11
図15	溝33断面図 (1 : 50)	13

図16	柱穴92実測図(1:30)	13
図17	土壌138実測図(1:30)	14
図18	土壌139実測図(1:30)	14
図19	土壌140実測図(1:30)	15
図20	柱穴137実測図(1:50)	15
図21	柵D実測図(1:80)	16
図22	溝128断面図(1:50)	17
図23	土壇144A・144B平面図と等高線(1:100)	17
図24	黒褐色焼土層の範囲(1:200)	18
図25	土壌76実測図(1:50)	18
図26	石列B断面図(1:30)	20
図27	掘込み地業範囲図(1:150)	22
図28	掘込み地業・溝190断面図(1:50)	23
図29	縄文土器拓影・実測図(1:3)	26
図30	土器実測図(1:4)	28
図31	瓦葺きあげの痕跡模式図	31
図32	葺きあげの痕跡	31
図33	瓦葺きあげ状態	31
図34	瓦刻印とヘラ記号拓影(1:2)	33
図35	土馬	35
図36	土製品実測図(1:2)	35
図37	1区出土金属製品実測図(1:2)	37
図38	銭貨	37
図39	銭貨拓影(1:2)	37
図40	石錘実測図(1:2)	38
図41	砥石実測図(1:2)	38
図42	石製品	39
図43	壁土の断面	40
図44	嵐山道筋現況図	47
図45	「天龍寺境内絵図」	48
図46	「山城国臨川寺領大井郷界畔絵図」	49
図47	「山城国臨川寺領大井郷界畔絵図」(図46)の靈庇廟付近拡大図	50
図48	「山城国嵯峨龜山殿近辺屋敷地指図」	51
図49	「天龍寺参道付近指図」	52
図50	参道復元図(1:2,500)	53

図51	鳥居の柱穴と南へ続く6ヶ所の柵	54
図52	現在の霊庇廟	59

表 目 次

表1	遺構概要表	9
表2	遺物概要表	27
表3	土壙76出土瓦の隅数	30
表4	瓦ヘラ記号観察表	34
表5	土製品一覧表	36
表6	金属製品一覧表	36
表7	銭貨一覧表	38

史跡・名勝 嵐山

1. 調査経過

嵐山大堰川の北岸に旅亭嵐月（仮称）新築工事が計画された。対象地は、史跡・名勝 嵐山に位置することから、文化庁・京都府文化財保護課・京都市文化財保護課の指導により発掘調査を実施する運びとなった。調査に先立ち、平成16年6月24日には旧建物の基礎撤去工事に伴う府文化財保護課・市文化財保護課・原因者・施工業者の4者立会のもと立会調査を実施した。続いて、6月28日には地下浄化槽解体工事の立会調査を行い地下の状態を確認した。さらに、試掘調査を7月1日から16日まで実施し、縄文時代から江戸時代にいたる遺物包含層が重なっていること、遺構の残存状態も良好なことなどが確認できた。7月21日には、文化庁・京都府文化財保護課に調査成果を報告した。

発掘調査区は、建物計画範囲を南と北に分けて設定し、南半を1区、北半を2区とした。大堰川に面する南半部分は、北半に較べ約1.5m低くなっていた。8月17日から23日にかけて盛土の機械掘削を行い、1区より人力による調査を開始した。1区の遺構は1面のみで、8月末に全景写真撮影と遺構図面を作成後、9月中旬に埋戻しを行い終了した。2区は、第1面の調査の後、その下層の掘下げは中央部を人力で、調査区西部については9月下旬に厚さ0.3～0.4mの整地土を機械で掘り下げ、第2面を検出した。その結果、石敷の整地層や土壇、柱穴群や溝、南北石列と掘込み地業などの遺構を検出した。調査は随時、府・市保護課の指導を受け進めた。9月30日には文化庁の視察、10月19日には府・市保護課により文化庁の指導が施主に説明された。その結果、第2面より下層は保存されることとなり、調査は図面作成を中心に進めた。10月15日と18日に全景写真と写真測量を行い、10月22日に府・市保護課の指導により地山の下がりや南北柵の延長を調べるため、2区南側を28㎡拡張した。並行して調査区壁面断面図などの図面作成を行った。なお11月5日に記者発表、7日に現地説明会（約650名参加）を実施した。その後、遺構を保存するため砂と砂の土嚢で保護する作業と、機材の撤去を行い、12日に現場を撤収した。



図1 調査前全景（北から）



図2 調査風景（南東から）

2. 調査地の位置と環境

(1) 位置と環境

調査地は、京都盆地の北西、近隣一帯が史跡・名勝に指定されている景勝の地である嵐山にあたる。渡月橋から西に約200m、保津峡から流れ出た大堰川の北岸に位置する。周辺は、平安時代には貴族の遊獵地となり、多くの山荘・別業が営まれ、さらに寺院も建立された。平安時代前期には大堰寺（推定）、9世紀中葉の承和年間（834～848）には嵯峨天皇皇后橘嘉智子により檀林寺、鎌倉時代には後嵯峨上皇により亀山殿が建立された。また調査地の北には後醍醐天皇の菩提を弔うため、足利尊氏が夢窓国師を開山として室町時代の暦応2年（1339）から建立した天龍寺がある。西には天龍寺の後山にあたる亀山、その奥には小倉山、少し離れた東には後醍醐天皇が夢窓国師を開山として管領させた臨川寺がある。また大堰川対岸の南には、奈良時代の創建と伝えられる法輪寺がある。

(2) これまでの調査

調査地周辺で実施された発掘調査は以下のとおりである。1989年調査¹⁾（図4 - 調査1）では平安時代前期の洲浜を伴う園池遺構を検出した。また、縄文時代や古墳時代の遺物も出土した。1992年調査²⁾（調査2）では鎌倉時代から室町時代の濠と建物地業などを検出した。2004年調査³⁾（調査3）では亀山殿期の庭園跡を含む平安時代から江戸時代の遺構を検出した。立会調査⁴⁾では調査地に接する北側と西側の道路で地表から - 0.31m で平安時代後期、 - 1.0m で平安時代前期の遺物包含層を検出している。

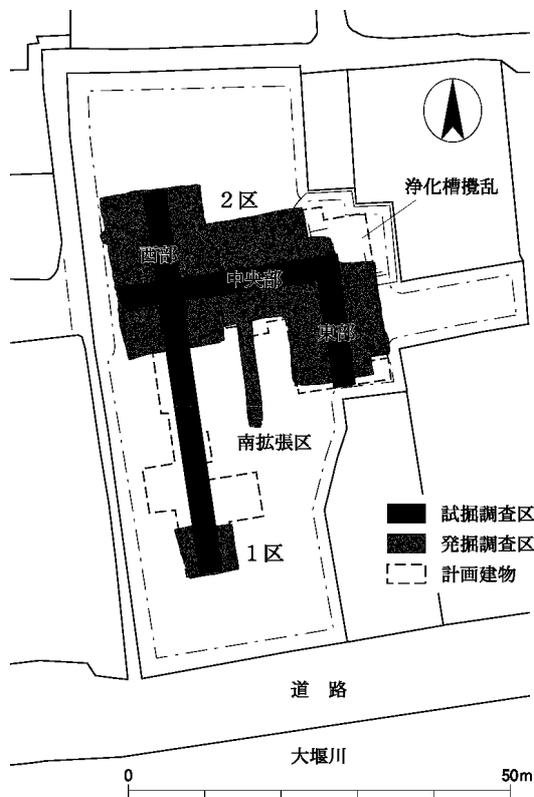


図3 調査区配置図（1：1,000）

臨川寺周辺では1969年調査⁵⁾（調査4）で庭園跡を検出し、鎌倉時代から江戸時代の遺物が出土した。1974年調査⁶⁾（調査5）では溝と柱穴を検出した。1975年調査⁷⁾（調査6）では臨川寺に関連するものと推定された石組溝を検出した。1976年調査⁸⁾（調査7）では焼け落ちた状態の建物を検出し、室町時代の遺物が多数出土した。1977年調査⁹⁾（調査8）では芹川（現瀬戸川）と思われる溝など平安時代から江戸時代の遺構を検出し、同時代の遺物が出土した。以上のうち、調査1～3・8と立会調査は当研究所が実施している。



図4 調査位置図 (1 : 5,000)

3 . 試掘調査

(1) 遺 構 (図 5 ~ 7)

試掘調査の結果、発掘調査を実施したが、ここでは試掘調査終了時点での成果を中心に述べる。

調査区は3ヶ所設定した。1区は、敷地西側に幅約3m、長さ約49mの南北トレンチを設定した。2区は、敷地東側に幅約3m、長さ約19mの南北トレンチを設定した。3区は、敷地北側に1区と2区を繋ぐ、幅約3m、長さ約28mの東西トレンチを設定した。

厚さ0.05~0.2mの盛土を取り除くと遺構が確認できた。これ以下の掘下げは止め、下層の状況については、2ヶ所の攪乱穴(A・B地点)の断面と、1区中央の段差のある部分(C地点)の法面観察で確認した。その結果、天龍寺創建期の遺物包含層、平安時代から鎌倉時代の遺物包含層を2層、縄文時代の遺物包含層などを確認した。2区南部の第1層上面と1区南半部の地山上面で検出した遺構は、江戸時代末期から近代にかけてのものである。それらの一部は、焼土層に覆われており、1区南半部では礎石とみられる径0.3m前後の川原石・花崗岩が据えられており、建物の火災跡と判断できた。南東部の石室からは、19世紀中頃の陶器が出土した。調査区北側全体の第1層上面では、室町時代の遺物は出土するものの顕著な遺構は認められなかった。

A地点(図6-3区北壁) 第2層の褐色砂泥層まで室町時代の遺物を包含する。第3層は堅く締まった厚さ0.35mの褐色砂泥層で、径0.5~0.25mの礫が多く詰まる。この層は、北側約8mの浄化槽解体時の立会調査でも確認しており、さらに西側に広がるとみられる。第4層は平安時代から鎌倉時代の遺物包含層である。第6層では遺物を確認できなかった。第7層以下は自然堆積層となる。

B地点(図6-1区西壁1) 遺物包含層の全体の厚さは、約1.3 となる。第1層は褐色砂泥層で厚さ0.3mあり、整地層と考えられる。第2層は厚さ0.1mで、径0.05~0.5mの礫が詰まり、その上部には厚さ数cmの堅く締まる黄褐色砂泥が認められた。第3層は炭・土師器片を含むにぶい黄褐色砂泥層であり、その下面から切り込む土壌状遺構が認められた。第4・5層は厚さ0.24m、0.14mの整地層。第6層は暗褐色砂泥層で、厚さ0.12mあり、その上部は堅く締まっている。以下、第7・8層は平安時代から鎌倉時代とみられる土師器小片を含む。第7層は厚さ0.06mの湿潤なにぶい黄褐色砂泥層で、上部は鉄分を含み極めて堅く締まり、水平に堆積する。第8層はやや粘質の強いにぶい黄褐色砂泥層で、厚さ0.05mである。なおこの2層は、出土遺物からA地点の第3層に対応すると考えられる。第9層以下は褐色系の地山に近似するが、厚さ0.22mの第9層からは縄文土器が出土する。第11層は無遺物層で、小礫を約20%含む褐色砂泥である。地山と考える。

C地点(図版12-3、図6-1区西壁2) 観察できる層序は基本的にB地点とほぼ対応する。またA・B・C地点の無遺物層上面の標高は、それぞれ36.94m・37.16m・37.14mとなり、東に下がっていることがわかる。

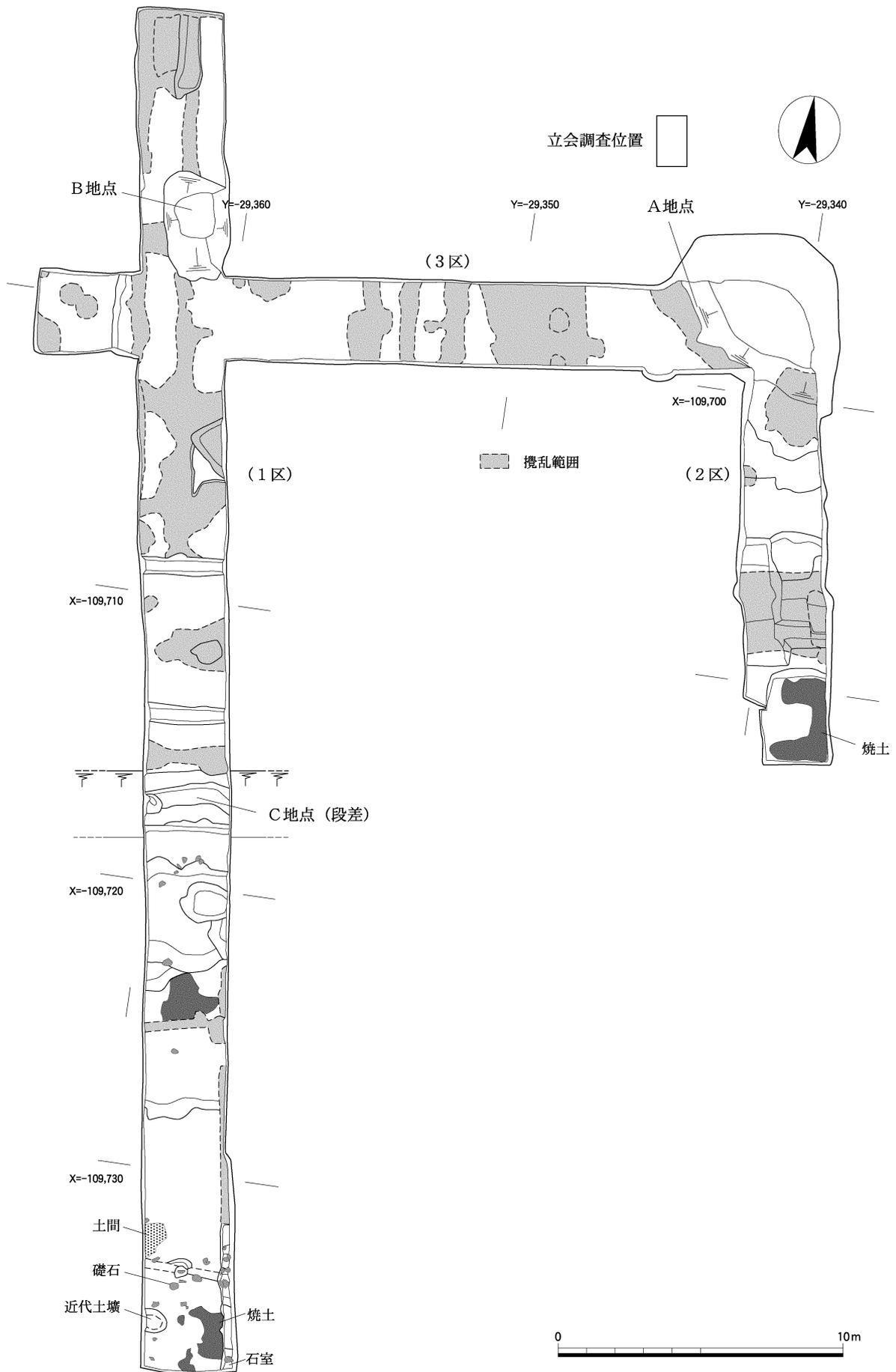


図5 試掘調査区平面図 (1 : 200)

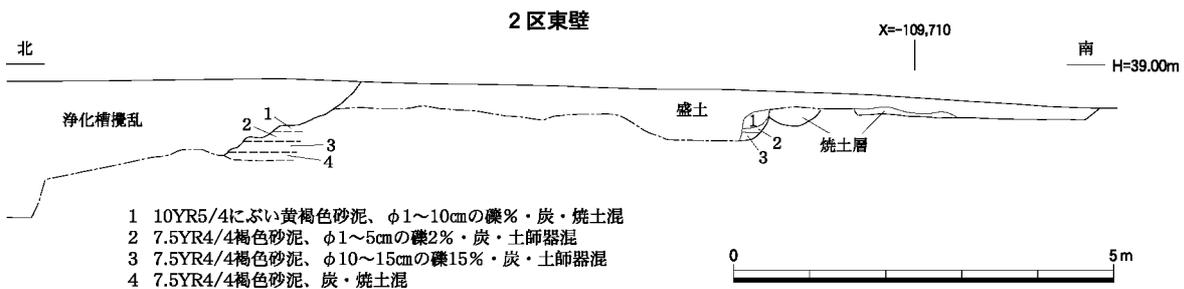
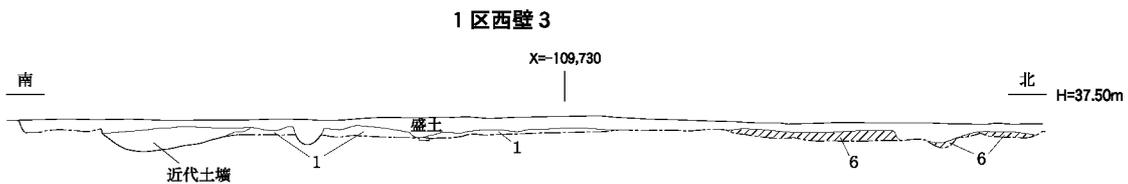
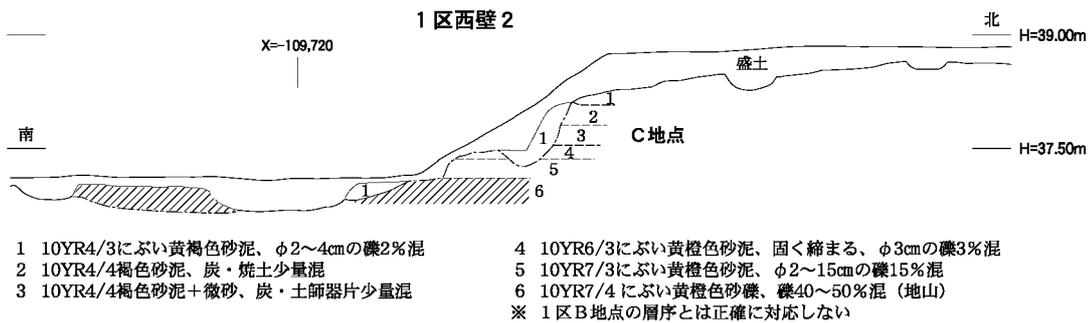
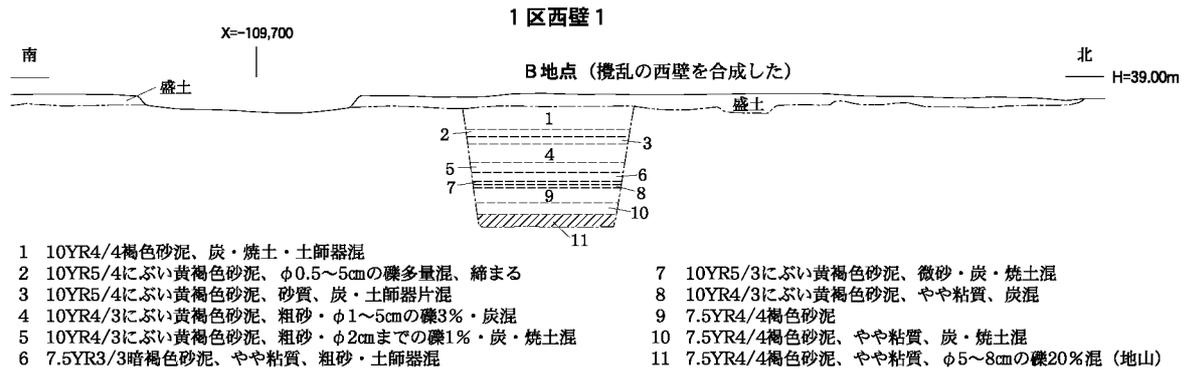
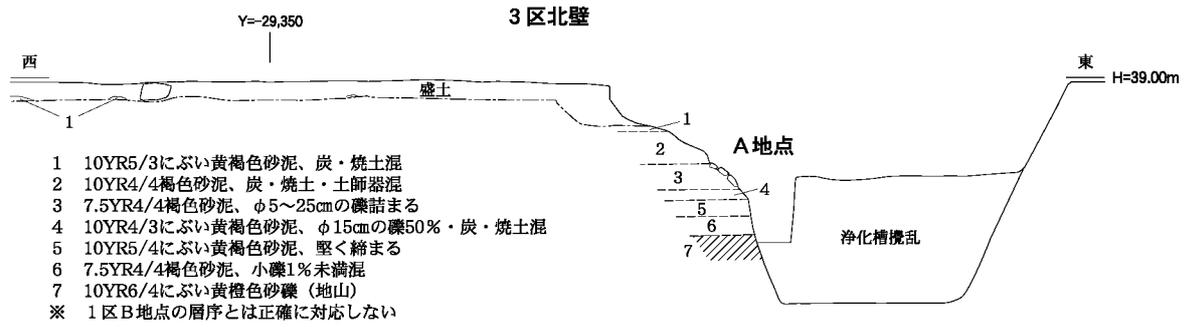


図6 試掘調査区断面図 (1 : 100)

なお発掘調査の成果を踏まえると、図6のAとB地点の第3層上面が発掘調査の第2面にあたる。そして試掘調査で確認した室町時代の遺物包含層は、天龍寺創建期の遺構を検出したものにあたる。縄文時代と平安時代から鎌倉時代の遺物包含層は、亀山殿の遺構を検出したものにあたる。その底はB地点の第8層下面にあたる。

(2) 遺物

整理用コンテナに1箱出土した。試掘調査であるため、大半が機械掘削中や遺構検出中に出土したものである。内容はほとんどが土器類で、他に瓦類や銅製品が少量出土している。いずれも小破片で、量的にも少ない。時代は、縄文・平安・鎌倉・室町・江戸・近代である。

縄文時代の土器は鉢の破片で、1区B地点の第9層から出土している。平安時代前期の遺物としては、須恵器甕、緑釉陶器椀、平瓦などがある。平安時代後期から鎌倉時代にかけての遺物には黒色土器椀、土師器皿が出土している他、1区B地点の第7層から輸入青磁椀の破片が出土している。室町時代の遺物には土師器の破片が多く出土し、他に瓦が12点あり、このなかには焼けた瓦が含まれている。1区B地点の第1層からは14～15世紀の特徴をもつ土師器皿が出土している。江戸時代後期から近代の遺物には染付が多く出土した他、棧瓦、陶器、金属製品、銭貨がある。銭貨は明治十年鑄造で、1区南端部に広がる焼土層上面から出土した。また、その焼土で埋まる石室からは19世紀中頃の土瓶の蓋が出土した。



図7 試掘調査全景（北から）

4. 発掘調査

試掘調査の結果を受けて発掘調査を実施した。調査区は、建物建設予定地の南側に1区、北側に2区を設定した(図3)。前述したように、敷地はほぼ中央あたりで南の大堰川に向かって約1.5mの段差があった。

(1) 遺構

1) 基本層序と遺構の概要

1区(図8)

約7m四方の調査区を設定した。現地表の標高は、37.2~37.3mを測る。盛土は、厚さ0.1~0.25m、その下は厚さ0.1~0.15mの江戸時代末期から近代の層となる。この層は、焼土や炭が混

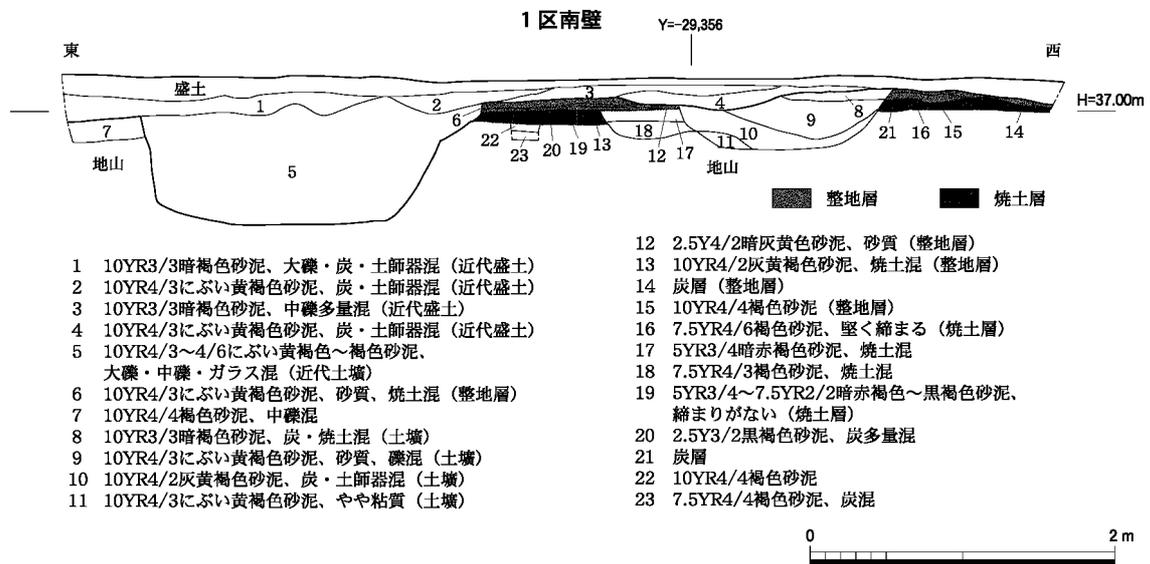


図8 1区基本層位図(1:50)

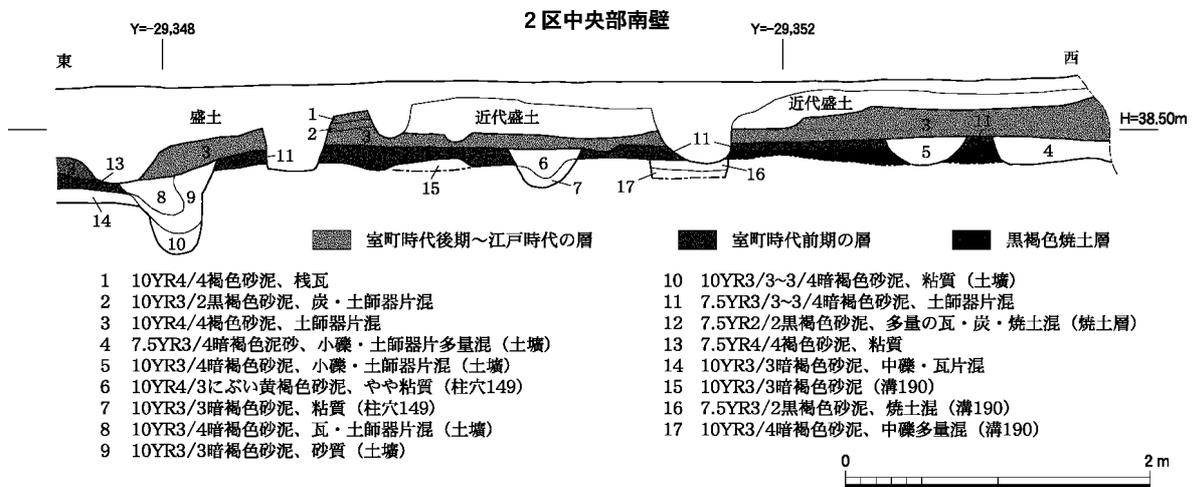


図9 2区基本層位図(1:50)

じる整地層（図8の第6・12～15層）と、竈・礎石・石列を伴う建物や焼土そして溝などを検出した層（第16・19～21層）に分かれる。その下は地山となり、標高37m前後を測る。

2区（図9）

敷地の北側、建物計画範囲の大部分を占める東西約34m、南北約28mの調査区を設定した。現地表の標高は、38.7～38.8mとなる。遺構が多く検出された調査区中央部の南壁では、現地表から0.2～0.3mまでが近現代の盛土となり、これを除去し第1面とした。第1面は、調査区東部に浄化槽などの大きな攪乱がみられ、中央部と西部では近現代の建物基礎などによる攪乱を受けていたが、江戸時代から室町時代後期の礎石・溝・柱穴群などを検出した。層序は、室町時代後期から江戸時代の整地層（図9の第3層）が厚さ0.1～0.2m、その下に厚さ約0.05mの焼土が混じる暗褐色砂泥（第11・13層）と、壁土・瓦・土器などが多く出土する黒褐色焼土層（第12層）が厚さ0.05～0.15mみられた。これらの層を掘り下げ第2面とした。南北溝・柱穴群・土壇・大型柱穴とそれに伴うと考えられる南北方向の柵などを検出した。さらに掘込み地業とそれに伴う石列や土壇を検出した。これら第2面で検出した遺構は、出土遺物から2時期に分けることができる。鎌倉時代後期のものを亀山殿にあたる時期、室町時代前期のものを天龍寺創建期から応仁の乱頃にあたる時期とした。なお、それ以降は、室町時代後期とした。

第2面より下層は保存されることとなり調査は実施していないが、一部の断割り調査によって東西溝を確認した。さらに2区南東部の地山直上から縄文土器が出土している。また南拡張区では、南北方向の柵の延長である柱穴列と、試掘調査でも確認した東西方向に延びる南下がりの段差（図版12-3、図6のC地点）の延長をX=-109,718付近（図版3の南端）で確認した。この段差は調査区外の東および西にも確認できる。

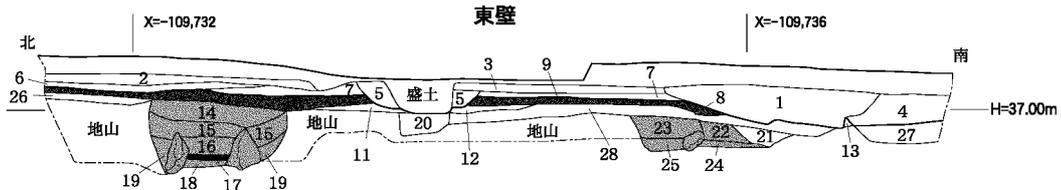
2) 1区の遺構（図版12、図10）

検出した遺構の方位は、正南北から10度前後西偏し、大堰川の流れに沿う。

礎石列E（図10）調査区北側で検出した。約0.4m四方大の礎石3基が東西約3.8mの間に並び、間隔は約1.5～2.0mと一定しない。

表1 遺構概要表

調査区	時代	遺構
1区	江戸時代末期～近代	土壇、竈2・5、溝1・7、礎石列、石列、焼土層
2区	江戸時代	礎石
	室町時代後期	土壇61・146、溝33、柱穴群
	室町時代前期	土壇138・139・140、溝128・184、大型柱穴137、土壇144A・144B、柱穴群、柵D、整地層
	鎌倉時代後期	土壇76、77、溝、石列A・B、掘込み地業、黒褐色焼土層



- | | | |
|-----------------------------|----------------------------|--------|
| 1 10YR6/4にぶい黄橙色砂礫、礫混 (攪乱) | 14 10YR4/4褐色砂泥、焼土・土師器混 |] (溝1) |
| 2 2.5Y4/2暗褐色砂泥 (近代盛土) | 15 10YR3/4暗褐色砂泥、小礫混 | |
| 3 10YR6/3にぶい黄橙色砂礫 (近代盛土) | 16 2.5Y5/3黄褐色微砂、中礫混 |] (溝7) |
| 4 10YR3/4暗褐色砂泥、漆喰混 (近代盛土) | 17 漆喰 | |
| 5 10YR6/4にぶい黄橙色砂泥 (近代土壌) | 18 10YR5/4にぶい黄橙色粗砂 |] (溝7) |
| 6 10YR5/6黄褐色砂泥、炭・焼土混 (近代盛土) | 19 10YR5/4にぶい黄褐色砂礫 | |
| 7 10YR6/4にぶい黄橙色砂泥、焼土 (近代盛土) | 20 10YR5/4にぶい黄褐色粗砂 |] (溝7) |
| 8 10YR6/3にぶい黄橙色粗砂、小礫混 | 21 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥、小礫・土師器混 | |
| 9 10YR6/4にぶい黄褐色砂礫 | 22 7.5YR4/4褐色砂泥、焼土混 |] (溝7) |
| 10 10YR4/4褐色砂泥、炭・土師器・小礫混 | 23 10YR6/4にぶい黄褐色粗砂、小礫混 | |
| 11 10YR7/6明褐色黄色泥砂、漆喰混 | 24 10YR3/4暗褐色砂泥、炭混 |] (溝7) |
| 12 2.5Y6/3にぶい黄色砂礫、小礫混、堅く締まる | 25 10YR5/2にぶい黄褐色砂泥、小礫混 | |
| 13 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 | 26 10YR6/4にぶい黄褐色砂泥、粗砂混 |] (溝7) |
| | 27 10YR4/6褐色泥砂、炭・土師器・小礫混 | |
| | 28 2.5Y7/4浅黄色砂泥、小礫混 | |

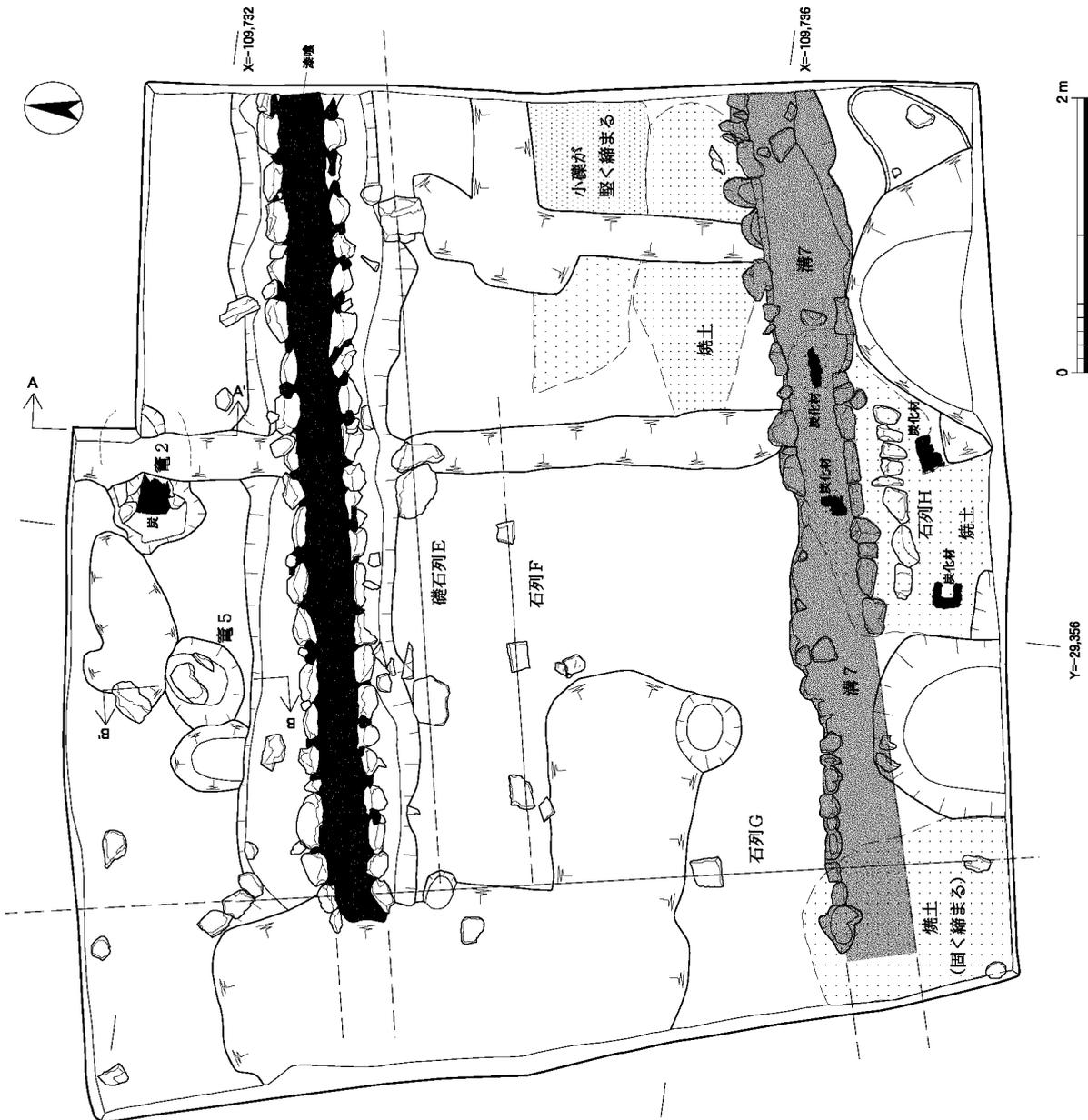


図10 1区遺構実測図 (1:50)

石列 F (図10) 調査区中央で検出した。約0.2m四方大の石が3基東西約2mの間に並び、間隔は約0.9mある。束石の可能性ある。

石列 G (図10) 調査区西側で検出した。約0.2m四方大の石3基と抜取穴と思われるもの1基が南北約5.5mの間に並び、間隔は一定ではない。石列 F とともに束石の可能性ある。

竈 2 (図10~12) 調査区北側で検出した。焼土や炭が混じる整地層(図12の第2層)の下で検出し、地山を掘り込む。大きさは東西約1.2m、南北約0.6m、深さ約0.2mある。形は楕円形であり、東側中程を攪乱に切られる。埋土は焼土であり、底部に薄い炭層がある。また径0.2~0.3m大の石が南と北の壁際にあり、底には約0.25m四方、厚さ約0.01mの炭化材が出土した。

竈 5 (図10・13・14) 調査区の北側で検出した。地山を掘り込む。大きさは径約0.6m、深さ約0.2mある。形は円形である。埋土は焼土である。中には長径約0.35m、短径約0.2m、厚さ約0.01mと、長径約0.2m、短径約0.1m、厚さ約0.05mの石が2基据わる。

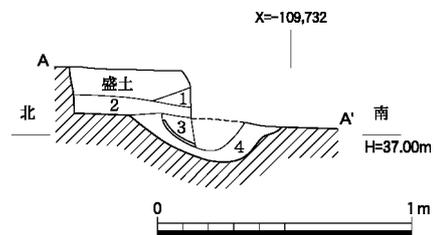
焼土層(図10) 調査区の南側に3ヶ所分布する。特に南西隅の広さ東西約1.5m、南北約1.7m、厚さ約0.1m(図8の第16層)の焼土は強く締まる。これは土間が強く火を受けた痕跡であろう。

溝 1 (図10) 調査区の北側で検出した東西石組溝である。地山を掘り込む。長さ約6m分を検出し、幅0.6~0.7m、深さ約0.4mある。使われている石は、長径約0.2m、短径約0.15m、厚さ約0.05mのものから、長径約0.4m、短径約0.2m、厚さ約0.1mのものまであり、それらが両側に並び漆喰で固められている。さらに溝の底も漆喰で固められている。埋土は上層に焼土を多量に含み、流水の跡と思われる砂層(図10の東壁第16層)がある。また試掘調査および断面観察から瓦で上を覆い暗渠状になっていた痕跡が認められた。

溝 7 (図版12-2、図10) 調査区南側で検出した東西石組溝である。地山を掘り込む。長さ約6m分を検出



図11 竈 2 (南東から)



- 1 10YR5/5 にぶい褐色砂泥(焼土・炭混、盛土)
- 2 10YR4/4 褐色砂泥(小礫・焼土混、整地層)
- 3 5YR4/6 赤褐色焼土層(底部に炭層、瓦混)
- 4 10YR4/6 褐色砂泥(小礫混)

図12 竈 2 断面図(1:30)



図13 竈 5 (東から)

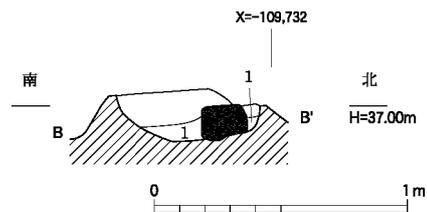


図14 竈 5 断面図(1:30)

し、幅0.6m前後、深さ約0.2mである。使われている石の大きさは、長径約0.15m、短径約0.1m、厚さ約0.05mのものから、長径約0.3m、短径約0.15m、厚さ約0.1mのものまであり、それらが両側に並ぶが、南側の両端では石や抜取穴を検出できなかった。埋土（図10の東壁第22～25層）は、焼土や炭の混じる砂泥層と礫が混じる掘形に分かれる。また溝の南側は土間状の土層が残っていることから、この溝は建物の南限あるいはなんらかの区画の可能性はある。

石列H（図10） 調査区南側の東西石組溝7の中央部南側に沿って検出した。溝7の中心から約0.5m南に位置し、使われている石の大きさは、長径約0.2m、短径約0.1m、厚さ約0.05mものから長径約0.3m、短径約0.2m、厚さ約0.1mのものまであり、それらが長さ約1.5mの間に1列並ぶ。溝7と石列Eの間は小礫、焼土の混じる褐色砂泥である。この石列は検出状況から溝7に伴うものと考えられる。

以上の遺構の時期は、焼土や炭の混じる整地層（図10の東壁第8～10層）を取り除いた面から検出し、出土遺物から江戸時代末期と考える。また遺構を覆う層には焼土や炭が多く混じること、出土遺物には火を受けたものがあることなどから、これらの遺構は火災にあったものと考えられる。さらに竈や礎石、石列などを検出した面（図10の東壁第11・12・26・28層）より下層で溝1・7を検出したことから、これらの遺構には時期差があることが分かる。つまり竈と礎石、石列、焼土層などの遺構は建物跡と考えられ、溝1・7、石列Hはそれらより先行する遺構と考えられる。

3) 2区の遺構

第1面

第1面では近現代の建物による攪乱と後述の遺構などを検出したが、江戸時代から近代の絵図によれば、調査地は「上地・上地藪」と表記され構築物等は見られない。このことから近現代の攪乱以外の遺構は、検出状況と出土遺物から焼失前の江戸時代の遺構と室町時代後期の遺構の2時期に分けることができる。

江戸時代（図版1・13）

調査区中央部で礎石29・116、西北部で礎石29・44を検出した。

礎石29（図版1・13 - 1） 調査区中央部東側で検出した。石の大きさは長径約0.6m、短径約0.3m、厚さ約0.1mある。石の平らな面は東へ傾き、その大きさは長径約0.4m、短径約0.3mある。掘形の大きさは長径約0.7m、短径約0.5m、深さ約0.1mあり、形は楕円形である。掘形の埋土は褐色砂泥である。

礎石44（図版1・13 - 2） 調査区西北部で検出した。石の大きさは長径約0.5m、短径約0.4m、厚さ約0.25mある。上面は平らになり、これは柱座であろう。石には漆喰の破片が付着している。掘形の大きさは径約1m、深さ約0.1mあり、形はほぼ円形である。掘形の埋土は暗褐色砂泥であり、周囲の土層より色調は暗めで砂が多い。

礎石45（図版1・13 - 2） 調査区西北部で検出した。礎石44から西へ約2mに位置する。石

の大きさは長径約0.5m、短径約0.3m、厚さ約0.25mある。上面は平らになり、これは柱座であろう。石には漆喰の破片が付着している。掘形の大きさは長径約0.9m、短径約0.8m、深さ約0.1mあり、形は楕円形である。掘形の埋土は暗褐色砂泥で周囲の土層より色調は暗めである。

礎石44の西2.4mの所にも抜き取り穴とみられる痕跡がある。これらは第2面で検出した土壇144Aの上面に据わる。

礎石116（図版1・13-1） 調査区中部西側で検出した。石の大きさは長径約0.35m、短径約0.15m、厚さ約0.1mある。石の平らな面は東へ傾き、その大きさは長径約0.3m、短径約0.15mある。掘形は認められなかった。

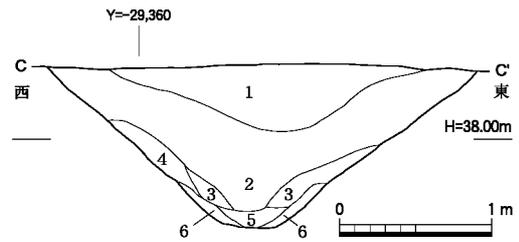
これらの礎石に伴う遺物はほとんど出土しなかったが、攪乱を検出した同一面に据えた状況で検出したこと、漆喰が付着していたものがあることなどから江戸時代と考える。これらの遺構は何らかの施設の礎石の可能性はある。

室町時代後期（図版2・14-1）

土壇61（図版2） 調査区西部の北側、溝33の北側で検出した。大きさは東西約2.5m、南北約5m、深さ約0.3mある。形は東半を溝33に、北部分を攪乱に切られ、半楕円形である。埋土はにぶい黄褐色砂泥である。時期は出土遺物から室町時代後期であるが、性格は不明である。遺物では平安時代の土器や瓦と共に縄文時代の石錘などが出土した。

土壇146（図版2） 調査区南西部で検出した。大きさは東西約6m、南北約8m、深さ約0.6mある。形は不定形であり、さらに調査区外の南西に広がる。埋土はにぶい黄褐色砂泥から褐色泥砂である。時期は出土遺物から室町時代後期であるが、性格は不明である。遺物では筭や釘などの金属製品が出土した。

溝33（図版2・14-2、図15） 調査区西部で検出した。検出した長さは南北約16m、幅2～3m、深さ1m前後あり、平面形が「くの字」状を呈する。形状は葉研堀状で中央部が1段深くなる。埋土は褐色砂泥から黄褐色砂泥で砂混じりである。また埋土の質が全体に類似していること、溝の掘下げ時に埋土の違いがあまりみられなかったことなどから、短期間で埋まったと思われる。ただし下層（図15の第5・6層）は粘性が強いこと、他の土層には遺物などの混じりが多いなどの多少の違いがみられることなどから、下層はこの溝が使用されていた時期の堆積層の可能性はある。時期は出土遺物から室町時代後期である。性格はその形状から防御の溝とも考えられるが、詳細は不明である。



- 1 10YR4/4褐色砂泥（砂多量・炭・土師器片混）
- 2 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥（砂多量・炭・土師器片混）
- 3 7.5YR4/4暗褐色～10YR4/4にぶい黄褐色砂泥（粗砂混）
- 4 10YR3/4-4/3暗褐色～にぶい黄褐色砂泥（砂多量混）
- 5 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥（粘質、粗砂混）
- 6 7.5YR4/4暗褐色～10YR4/4にぶい黄褐色砂泥（粘質、粗砂混）

図15 溝33断面図（1：50）

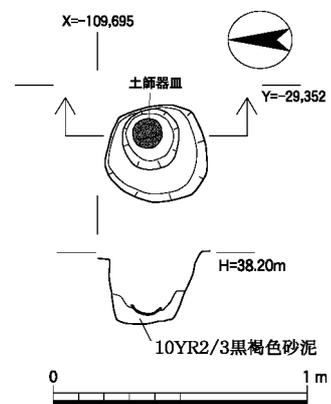


図16 柱穴92実測図（1：30）

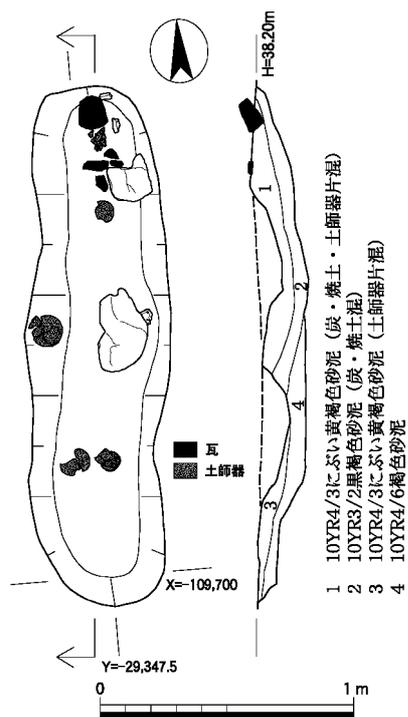


図17 土壌138実測図(1:30)

柱穴群(図版2) 調査区中央部で検出した。その範囲は南北約12m、東西約6mに及ぶ。柱穴の大きさは、大きなもので径約0.6m、小さいもので径約0.3mある。それらの深さは0.1~0.2mである。埋土は多くがにぶい黄褐色砂泥や褐色砂泥である。時期は、室町時代後期の遺構を検出した同じ面で検出したことと、小片あるいは少数であるため不明瞭であるがその出土遺物から室町時代後期と考えた。

第2面

第2面は検出状況と出土遺物から室町時代前期(新期)と鎌倉時代後期(古期)の2時期に分けることができる。

室町時代前期(新期)(図版3・4)

柱穴群(図版3・4・15-2) 調査区中央部で検出した。その範囲は南北約15m、東西約6mである。柱穴の大きさは、大きなもので径約0.6m、小さいもので径約0.1mある。それ

らの深さは0.1~0.3mである。埋土は褐色、暗褐色、にぶい黄褐色の砂泥である。大半の埋土に焼土や炭が混じる。時期は出土遺物と後述する第2面の地業を掘り込むことから室町時代前期と考えた。これらは、この一帯になんらかの施設があったことを示す。

柱穴92(図版16-1、図16) 調査区中央部の柱穴群北側で検出した。大きさは径約0.4m、深さ約0.3mあり、形はほぼ円形である。埋土は黒褐色砂泥であり、完形および完形に近い土師器皿が4点前後出土した。時期は出土遺物から室町時代前期である。この遺構は完形土師器皿が出土

したことから地鎮などの祭祀に関連する遺構であると考える。

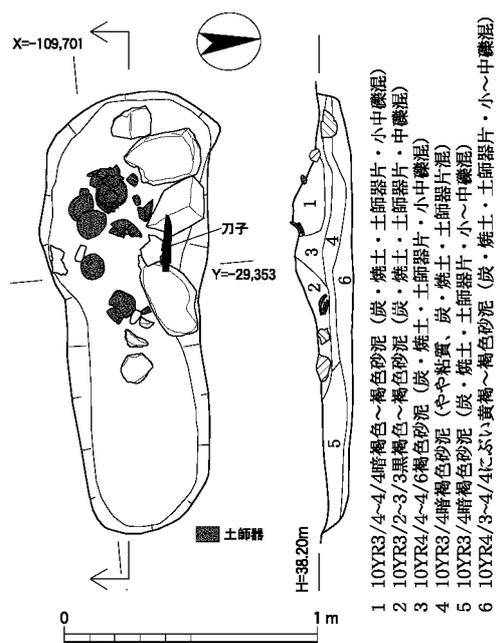


図18 土壌139実測図(1:30)

土壌138(図版16-2、図17) 調査区中央部の柱穴群東側で検出した。大きさは長径約2m、短径約0.6m、深さ約0.2mあり、形は隅丸の長方形である。埋土は炭と焼土の混じる黒褐色砂泥や焼土の混じらない褐色砂泥などである。完形および完形に近い土師器皿が5点前後出土した。時期は出土遺物から室町時代前期である。この遺構は完形土師器皿が多く出土したことから祭祀に関連する埋納遺構であると考える。

土壌139(図版16-3、図18) 調査区中央部の柱穴群南側で検出した。既述の土壌138・140と違い東西方向に細長い。大きさは長径1.8m、短径約0.7m、

深さ約0.3mある。形は隅丸の長い楕円形である。埋土は炭と焼土の混じる黒褐色や褐色などの砂泥である。完形および完形に近い土師器皿が7点前後と刀子が出土した。また約0.3m×0.2m大の石が数個、出土した。これら石や遺物などは西側に偏って出土したが、この部分(図18の断面図第1～4層)はひとつの遺構の可能性があり、土壌139は2基の遺構が重複しているとも考えられる。時期は出土遺物から室町時代前期である。この遺構は刀子と完形土師器皿が多く出土したことから祭祀に関連する埋納遺構と考える。

土壌140(図19) 調査区中央部の柱穴群西側で検出した。大きさは長径1.5m、短径約0.7m、深さ約0.1mある。形は隅丸の長い楕円形で東半を溝33に切られる。埋土は炭が混じるにぶい黄褐色や褐色などの砂泥である。完形およびそれに

近い土師器皿が3点前後出土した。時期は出土遺物から室町時代前期である。この遺構は、完形やほぼ完形の土師器皿が出土したことから祭祀に関連する埋納遺構であると考え。また埋土の厚さが薄く石の大部分が露出していることから後世に削平された可能性がある。

柱穴137(図版15-2・16-4、図20) 調査区中央部の北東で検出した大型の柱穴である。大きさは、長径約2.4m、短径約1.8m、深さ約1.2mである。形は南北に長い楕円形であり、底には直径約0.7m、深さ約0.3mの柱あたりと思われる痕跡が残る。埋土の堆積状況からみて、柱は抜き取られたものとみられる。この遺構は、後述する第2面の地業埋土を掘り込み、さらに下層の地山もしくは縄文土器が出土する包含層を掘り込む。時期は出土遺物から室町時代前期である。

この柱穴は、柱あたりの規模からみて、かなり大きな構築物であったことが予想できる。また、これと対になるような柱穴跡は、調査区内では検出できなかった。

柵D(図版15-2・17-1、図21) 調査区中央部、柱穴137の南側で検出した南北に並ぶ柱穴列で

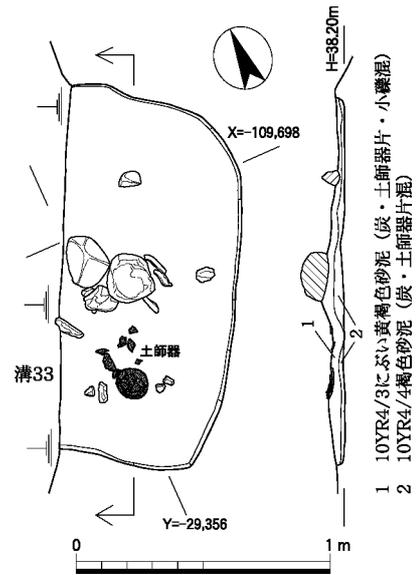
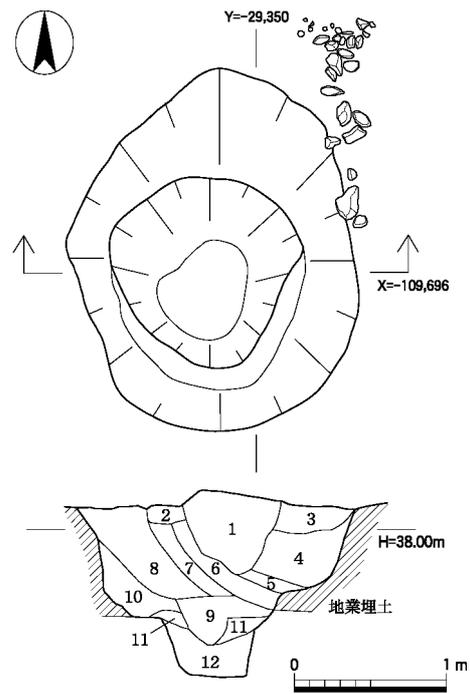


図19 土壌140実測図(1:30)



- 1 10YR3/4~4/6暗褐~褐色砂泥(焼土・土器片・礫混)
- 2 10YR4/3~4/4にぶい黄褐色砂泥(土器片・小礫多量混)
- 3 10YR3/3~4/4暗褐~褐色砂泥(焼土・土器片・小礫混)
- 4 7.5YR3/2~3/3黒褐~暗褐色砂泥(小礫多量混)
- 5 10YR3/4暗褐色泥砂
- 6 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥(小礫混)
- 7 7.5YR5/4にぶい褐色泥砂(小礫多量混)
- 8 10YR3/3暗褐色砂泥 ブロック10YR4/2灰黄褐色泥砂(焼土・土器片・中礫混)
- 9 7.5YR4/3褐色泥砂(中礫混)
- 10 10YR2/3~3/4黒褐~暗褐色砂泥(小礫多量混)
- 11 10YR5/3にぶい黄褐色粘質土(均質)
- 12 10YR4/4褐色粘質土

図20 柱穴137実測図(1:50)

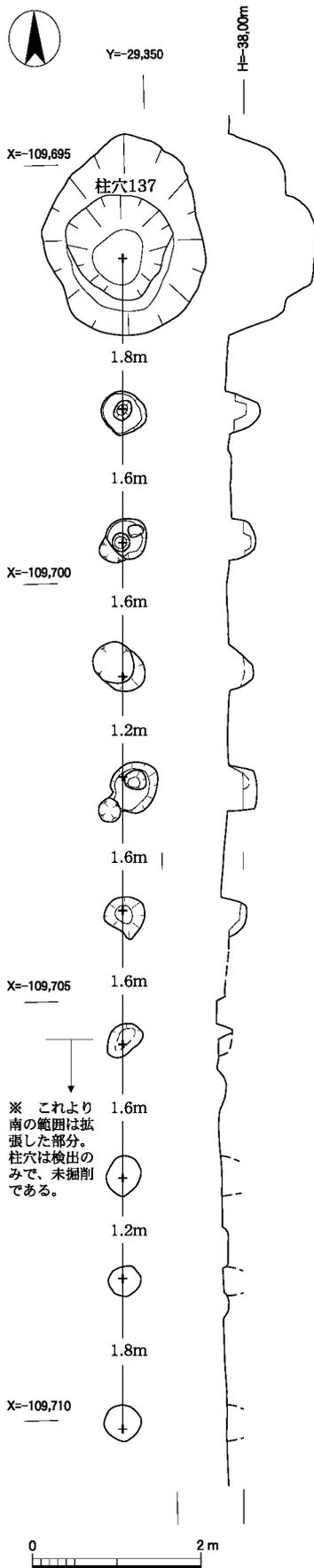


図21 柵D実測図(1:80)

ある。9基の柱穴が並び、検出した長さは南北約12.5m、間隔は1.2~1.8mある。個々の柱穴の大きさは径約0.5m前後、深さ約0.3mある。埋土は褐色から暗褐色砂泥であり、北側の2基はわずかに焼土や炭が混じる。時期は出土遺物と第2面の地業埋土を掘り込むことから室町時代前期と考えた。それらの柱間寸法には、約1.8m、1.6m、1.2mがある。柱穴137から1.8mと1.6m・1.6m・1.2m、間に1.6mをはさみ、1.6m・1.6m・1.2mと1.8mが再び並び規則性がある。このように柱穴列はほぼ直線に並びその柱間も規則的であること、深さもほぼ同じであることから南北方向の柵と考える。また大型の柱穴137とほぼ直線に並ぶことから両者は一連のものであろう。

溝128(図版3・4・15-2、図22) 調査区中央部、柱穴群より東側で検出した南北溝である。検出した長さは南北約14m、幅は1.2~2.0mあり北側が幅広(図版6の中央部北壁第17・18層)になる。深さは0.4~0.5mある。埋土は暗褐色砂泥であり、土師器片や炭が混じる埋土(図21の第1・2層)と土師器片が混じらない埋土(第3・4層)、粘質土が混じる埋土(第5層)がある。第5層は最下層であること、粘質土が混じることからこの溝が使用されていた時期の堆積層である可能性がある。時期は出土遺物から室町時代前期である。この溝は、これより東側に柱穴や土壌などの遺構がほとんど検出できなかったことから西側の柱穴群や土壌などの東を限る溝と考えられる。

溝184(図版3・4) 調査区中央部の柱穴群東側で検出した南北溝である。長さは南北約8mあり南端を検出した。幅は0.6m前後ある。保存することとなったため掘り下げていないため深さは不明である。埋土は中礫が多く混じる暗褐色砂泥である。時期は、出土遺物はないが、柱穴137に切られること、地業埋土を掘り込むこと、溝128と並行することなどの検出状況から室町時代前期と考える。

土壇144A(図版17-2・3、図23) 調査区西部で検出した。大きさは長径約8m、短径約6m、高さ約0.3m(図版4のE-E'断面)ある。形状は不定形であり、高い部分に径0.1~0.4mの礫が密に分布する。土層は暗褐色砂泥の砂混

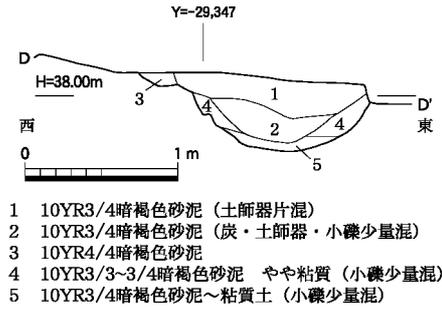
じりであり、この遺構の下には後述する黄褐色砂泥礫敷整地層（図版6の西部北壁断面図）がある。時期は出土遺物と検出状況から室町時代前期である。

土壇144B（図版17-3、図23） 調査区西部、土壇144Aの南側で検出した。大きさは長径約3m、短径約1.5m、高さ約0.25m（図版4のE-E'断面）ある。土壇144A同様に土層は暗褐色砂泥の砂混じりであり、下

には黄褐色砂泥礫敷整地層がある。時期は、出土遺物はないが、土壇144Aと同様の検出状況から室町時代前期と考える。この土壇144Bは144Aと一連の遺構であり、南北約13m、東西約8mにわたる。何らかの施設の土台と思われる。また調査区西部北壁断面の黄褐色砂泥礫敷整地層の上に厚さ0.4m前後の土壇と質の類似する層（図版6の西部北壁第5～11層）がみられた。これらが同一の遺構とすれば、その広がりからこれらは何らかの施設の基壇の可能性も考えられる。

整地層（図版4・17-3） 調査区西部のほぼ溝33から西で検出した。広さは南北約13m、東西約9m、厚さ0.05m前後（図版7のG-G'土層模式図第5・7層）あり、さらに調査区壁断面観察から調査区外の北と西に広がる。この層は黄色砂泥に小礫が混じる整地層（図版6の西部北壁-黄褐色砂泥礫敷整地層）である。また白い砂層を調査区中央部北西、溝33の東側北端近辺で検出した。明瞭に検出した広さは南北約0.7m、東西約0.5mあり、厚さは3mm前後で薄い。この砂層は壁断面（図版6の中央部北壁第16層）から調査区外の北と東に広がり、さらに不明瞭ながら南の柱穴群検出面で砂層の痕跡が認められ、この部分にも砂層が広がっていたと考えられる。

これら新期の遺構の方位は多くがほぼ正南北方向であり、後述する下層の地業を削平して造られており、かなり大規模な工事を伴ったと考えられる。



- 1 10YR3/4暗褐色砂泥（土師器片混）
- 2 10YR3/4暗褐色砂泥（炭・土師器・小礫少量混）
- 3 10YR4/4暗褐色砂泥
- 4 10YR3/3-3/4暗褐色砂泥 やや粘質（小礫少量混）
- 5 10YR3/4暗褐色砂泥～粘質土（小礫少量混）

図22 溝128断面図（1：50）

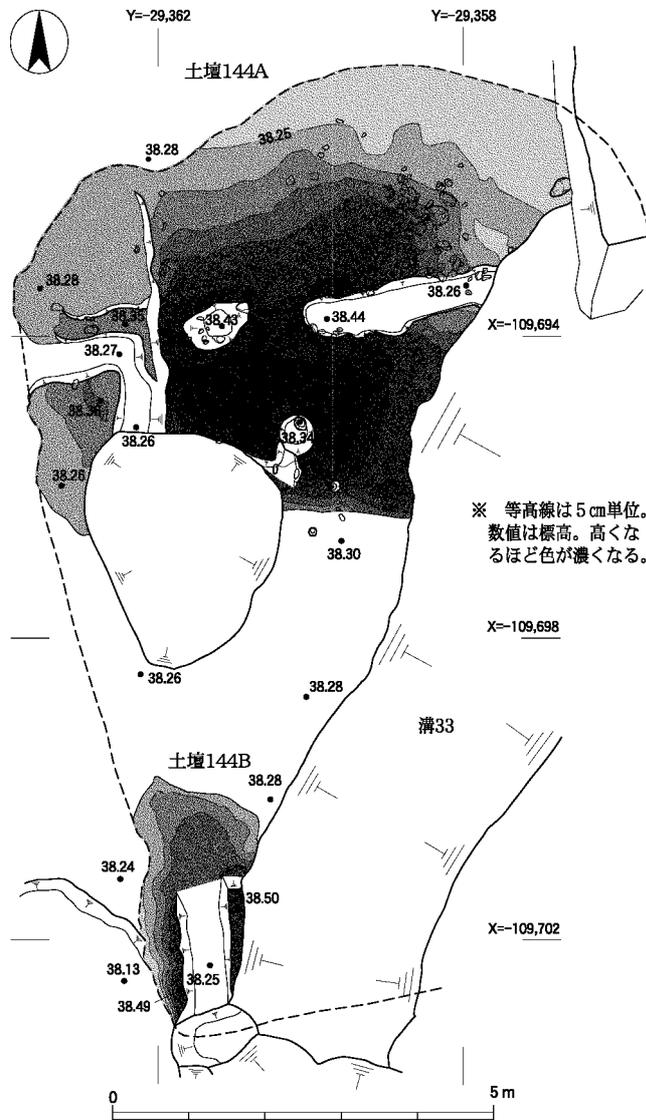


図23 土壇144A・144B平面図と等高線（1：100）

前後関係は、検出状況と壁断面などから以下のように考える。まず、地業の上を整地した黄褐色砂泥礫敷整地層と東側の南北溝128、および礫混じりの南北溝148が一番古い時期となる。次に土壇144、柱穴137、南北柵Dとなる。白い砂はこの時に敷いた可能性がある。最後の時期は、柱穴群と土壇などであろう。なお、各々の時期でも前後関係があると考えられる。

鎌倉時代後期（古期）(図版3・5)

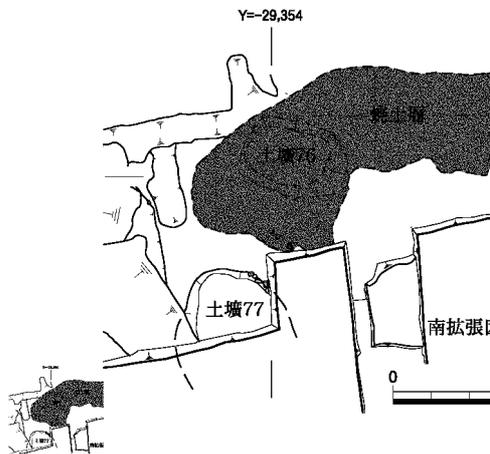
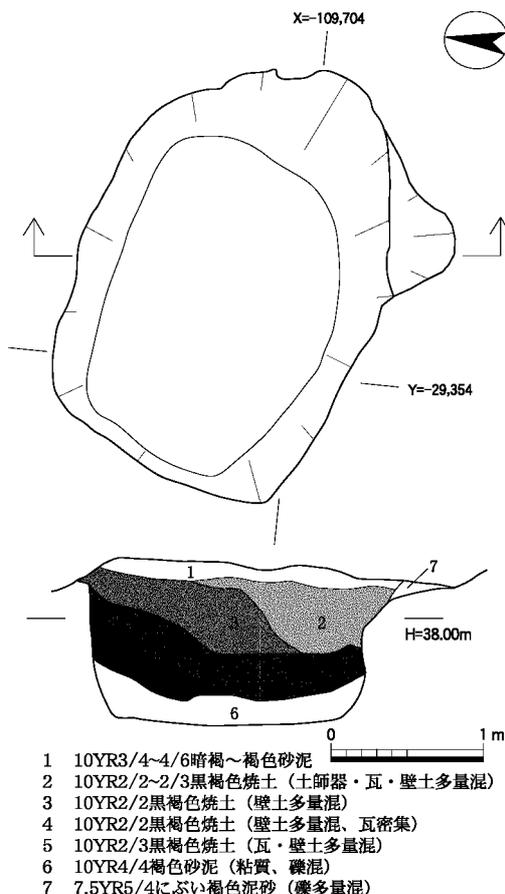


図24 黒褐色焼土層の範囲(1:200)

黒褐色焼土層(図24) 調査区中央部南側で検出した。広さは東西約8m、南北約5m、厚さ約0.2mある。埋土は、焼土や瓦を多量に含む黒褐色焼土層(図9の第12層)である。出土遺物は鎌倉時代後期である。

土壇76(図版18-1・2、図25) 調査区中央部南側の焼土層下で検出した。長径約3m、短径約2m、深さ約1mの楕円形である。埋土の第1層は遺物をあまり含まず礫の混じるやや堅めの砂泥であり、これより下層の埋土とはかなり様相が違う。この遺構を整地した埋土であろう。第2~5層は、炭や焼土が多量に混じる黒褐色砂泥で、火を受けた痕跡がある壁土や土器および瓦が多量に出土した。上層の黒褐色焼土層整地層とよく類似する。さらに詳述すれば、第2層は瓦や土器が多量に混じり、第3層は壁土が多量に混じる。第4層は瓦が密集して混じり、第5層は第4層より密ではないが瓦などが多量に混じる。そして層の重なりが北から南に傾き、短期間に埋った考えられる。第6層には礫が多く混じり上層とはかなり様相が違う。この埋土は、上層とは時期差があると思われる。第7層は肩部にあたる埋土と考えるが、強く締まり第1層に切られることから別遺構の可能性もある。土壇から出土した遺物の時期は鎌倉時代後期である。



- 1 10YR3/4~4/6暗褐~褐色砂泥
- 2 10YR2/2~2/3黒褐色焼土(土師器・瓦・壁土多量混)
- 3 10YR2/2黒褐色焼土(壁土多量混)
- 4 10YR2/2黒褐色焼土(壁土多量混、瓦密集)
- 5 10YR2/3黒褐色焼土(瓦・壁土多量混)
- 6 10YR4/4褐色砂泥(粘質、礫混)
- 7 7.5YR5/4にぶい褐色泥砂(礫多量混)

図25 土壇76実測図(1:50)

土壇77(図版3・18-1) 調査区中央部南西寄り、焼土層下で検出した。大きさは長径約2.5m、短径約2m、深さ約0.4mある。円形を呈するが、調査区外の東と南に続く。埋土は瓦および焼土を含む黒褐色焼土層である。土壇76に比べると出土量は少ないが、時期は鎌倉時代後期である。

以上の焼土層および土壌76・77は、埋土が類似しており、出土遺物からほぼ同時期の遺構であり、その性格はこの近辺の火災に遭った建物の瓦礫を埋めた穴とそれらを整地した層と考えられる。また、出土遺物は鎌倉時代後期であるが、整地された年代によっては遺構時期が新しくなる可能性がある。

掘込み地業（図版7・19～22、図26～28）試掘調査において、B地点（図5・6）で0.1m前後の層が何層も水平に重なる層序がみられた。また南北溝33を完掘した際、溝壁面の北半において、砂泥層が何層も重なる層序（図版7のG - G' 土層模式図。以下、G - G'）の遺構を確認した。さらに調査区西部（以下、調査区は省略）を掘り下げ、前述した室町時代前期の黄褐色砂泥礫敷整地層（図版6の西部北壁）を検出した際、点々と玉石がみられた。そのため石上面の土を取り除いたところ、B地点西側で南北方向の石列A（図版19 - 2、図27）を検出した。中央部においても整地層（図版6の中央部北壁第11・12層）を掘り下げ、室町時代前期の遺構を検出した際、所々に玉石がみられたため石上面の土（図版6の中央部北壁第20層）を取り除いたところ、南北方向の石列B（図版19 - 3、図27）を検出した。

鳥羽離宮跡でみられる平安時代後期の掘込み地業の検出例¹⁰⁾では石列を伴うことが多い。これらには、砂と粘土を互層に重ねて叩き締め、さらに玉石層を敷く方法や、掘り込んだ範囲の土を入れ替えて土層を締める方法など、様々な工法がみられる。

今回検出した石列や各断面で確認した土層を観察したところ、B地点の層序は質の類似する土層が何層も締まって重なることから版築であると考えた。また溝33壁面にみられる土層は、堅く締まる土層（G - G' 第31層）が南で立ち上がることで、そして類似する層が交互に何層にも重なることから地業であると考えた。

東部では、攪乱壁面に礫が多く混じる土層の重なりが調査当初からみられた。地業である可能性を踏まえて壁面観察（図版7のH - H' 土層模式図。以下、H - H'）を行ったところ、最下層には堅く締まる第19層があり、その上部に礫が大量に混じる層と質の類似する層が締まって重なることから、版築と判断した。また、明瞭ではないが石の並びが認められたため、これを石列C（図版21 - 2、図27）とした。また、調査区東壁北端にも地業の下層部（図版21 - 4、図28の第1～3層）がみられることから、地業は調査区外の北および東にも広がることが分かる。

以上の検出状況から、調査区北側一帯に掘込み地業があると判断した。その大きさは東西34m以上、南北15m以上、深さは検出上面より0.7m前後であり、調査区外の北と東および西に広がる。検出した地業上面では礎石や亀腹などは認められなかった。

第2面で検出した室町時代前期の遺構や掘込み地業は、全面保存されることとなった。そのため遺構を壊さぬように部分調査を行い、地業の土層観察と図面作成を行った。調査部分（図版7、図27）は、西部北壁の断割り、F - F'、G - G'、H - H'、調査区東壁である。

次に、各地業の土層観察を順に述べる。

石列Aより西側の土層については、北壁で断割り（図版21 - 3、図27断割り位置）を行った。検出面より約0.5mほど掘り下げ、土層（図版6の西部北壁第12～20層）の観察を行った。第12

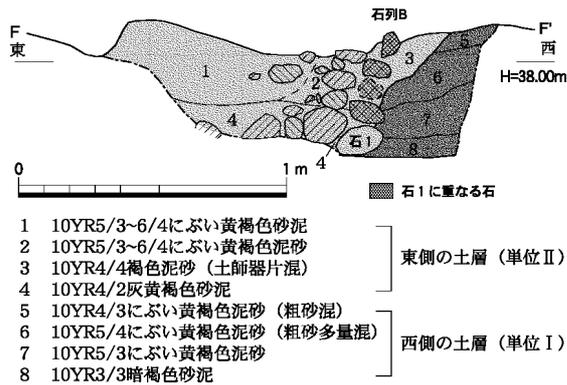


図26 石列B断面図(1:30)

調査区外へ続くものと推定できた。なお設定した断割り断面の範囲では、地業の底面を確認できていない。

石列Bの東西断面(F-F')では、底面(標高37.6m前後)から石が約0.5m重なってみえる。この断面に見える土層(図版21-1、図26)は、石列Bを境に東西に大別できる。石列Bの位置には0.1~0.2m前後の礫を積み重ねた状況のみとれる。東側の第1~4層は、下層に礫を入れ叩き締めていることから版築とみられる。東側の土層が西側に傾斜するのは、土層が叩き締められた時の加圧によるものと考えられる。西側の土層は、第5~7層は同質の層が重なり、第8層を含めて5層重なる。これらの土層は、土質の類似する層が整然と締まって重なることから版築であると考えられる。以上のことから、石列Bは、東西の版築を区画する石の重なりが検出面に現れたものであることが分かる。

石列Aから石列Bの間の土層(G-G')は、溝33の西側壁面の南北約11mで確認できた。第1・2層と第5・7層は前述した室町時代前期の土壇144A・Bと黄褐色礫敷整地層であり、地業と考えられる土層の重なりはその下層となる。土層の重なりは深さは約0.7mあり、底面の標高は37.5m前後である。底面は南側から北側へ約0.2m深くなる。最下層の第31層は、強く締まり南北全体にみられる。層の厚さは約0.1m、薄い部分では厚さ約0.05mある。下層部南側は第31層と厚さ約0.15mの第28層が重なり、なだらかに立ち上がる。下層中央部は強く締まる厚さ0.02~0.1mの第24・26・30層がブロック状に重なり、強く締まる層が最大4層重なる。その北側の強く締まる第27層は長さ約3.5m、最大で厚さ約0.1mあり焼土の混入が目立つ。第27層は第32層を挟み第30・31層と重なる。土層の重なりは壁面北側では深さ約0.7mあり、砂泥層が比較的整然と締まって重なり、強く締まる第31層を含めて7層ある。壁面中央では土層の重なりは深さ約0.6mある。中央中層部では褐色砂泥層で底部が弓状に下がる第15~20層が交互に締まって重なり、強く締まる4層を含めて最大9層ある。壁面南側では土層の重なりは深さ約0.5mあり、弓状の層が順次交互に締まって重なり、強く締まる2層を含めて最大7層ある。つまりA~B間の土層は最下層部に強く締まる層が全体にあり、北側が整然とした層序であり、中央から南側の中層部の土層は弓状の層が順次交互に締まって重なると考えられる。また土層の上層部はいくつかの単位に分ける

~14層は検出上面より東へなだらかに下がり、第13層は強く締まっている。このことは、後述する他の土層にも強く締まる層があることと共通する。第15~20層は、やや粘質で厚さ約0.15m、礫の少ない層が重なる。第15・18層は炭や焼土が混じる。全体の層序は、締まった砂泥層と泥土が整然と重なり、最大5層を確認した。このことから、石列A西側の範囲にも地業がおよんでいることが分かった。その結果、地業の範囲は西に広がり

ことができると考えられる。さらにこの層序の遺構は、堅く締まる最下層が南側で立ち上がり土層が重なることから版築であり、人為的に深さ約0.7m掘り下げた掘込み地業と考えられる。なお掘込み地業の南端は、最下層第31層が立ち上がり、その上に重なる第6層の南端 $X=-109,703.2$ 付近(図版7H-H')である。

石列C西側の土層(H-H')は、攪乱壁面で確認した。検出上面からの土層の重なり¹¹⁾の深さとその底面の標高は、攪乱壁面では深さ約0.65mと標高37.45m前後、石列Bと石列Cの間にある柱穴137壁面では深さ約0.7mと標高37.45m前後であり、その深さはほぼ水平である。土層の観察は次のとおりである。最下層第19層は厚さ約0.05mあり、堅く締まる。この層は南から全体のほぼ2/3、北側端から約3m手前まで延び、そこから北側は砂泥層の第18層が続く。その上面の第16層は、礫が混じる厚さ約0.25mの黒褐色土であり、この層の南端で土層の重なりが変わる。 $X=-109,696$ 付近には長径約0.65m、短径約0.4mの大石がある。その上面の第1層は砂泥層で厚さ0.3m前後あり、径0.2m前後の礫が多く混じる。大石から南側は、径0.2 0.3mの礫が大量に混じる第2・6・12層がある。層の厚さは0.2m前後あり、これらの層は礫の混じりが南になるほど少量になる。南側の第4層は砂泥層で厚さ約0.3mあり、礫は少ない。土層の重なりは、壁面北側では深さ約0.7mあり3層重なる。壁面中央部では土層の重なりは深さ約0.65mあり、堅く締まる層と礫が大量に混じる層を含めて5層重なる。壁面南側では土層の重なりは約0.7mの深さに層が比較的整然と重なり、堅く締まる第19層を含めて最大6層重なる。つまり石列C西側の土層は最下層部に堅く締まる層が全体にみられ、その上面は大量に礫が混じる層が重なる。そして全体が比較的整然と締まった層が重なることから地業と考えられる。さらに土層の重なりが壁面南側では段状に浅くなることから、この遺構は人為的に掘り下げたと考えられる。なお東側土層図を作成した地点は、遺構を保存するため断割り¹¹⁾は行わなかったため、地業の南端は確認できなかった。

調査区東壁の北端で、東西約3m、南北約1mの範囲で地業の土層(図28の第1~3層)を検出した。壁際の土層底面の標高は37.45mである。土層は、厚さが約0.05~0.15mの砂泥層が最大3層重なり、径0.1m前後の礫が少量混じる。これらの土層は、締まって重なっており、他の地業と類似する。

地業は、南北の石列A・B・Cを伴う。石列Aから石列Bの間隔は約10、石列Bから石列Cの間隔は約11である。それらの方位は、北に向かって8~10度西偏する。掘込み地業は、石列を伴う例が多く、その石列は地業を区画し、さらにその石並びの違いのまともりは地業を区画し単位を示す場合が多い¹¹⁾。そのことを踏まえて石列を地業の区画として単位に分け、石列Aから石列B間を「単位」、石列Bから石列C間を「単位」、石列Cより東側を「単位」、石列Aより西側を「単位」とした(図27)。

地業の単位の区画と考えられる石列A・B・C(図版20)について述べる。

石列Aは、調査区西部南側の $X=-109,703$ 付近から北へ約15m延びる。方位は北に向かって約8度西偏する。石は河原石が多く、長径0.15m前後、短径0.1m前後あり、多くの石が長径部を東西方向に置き、西面を揃えて横長に並べる。この石列を観察すると、揃う石面がズレる地点、大き

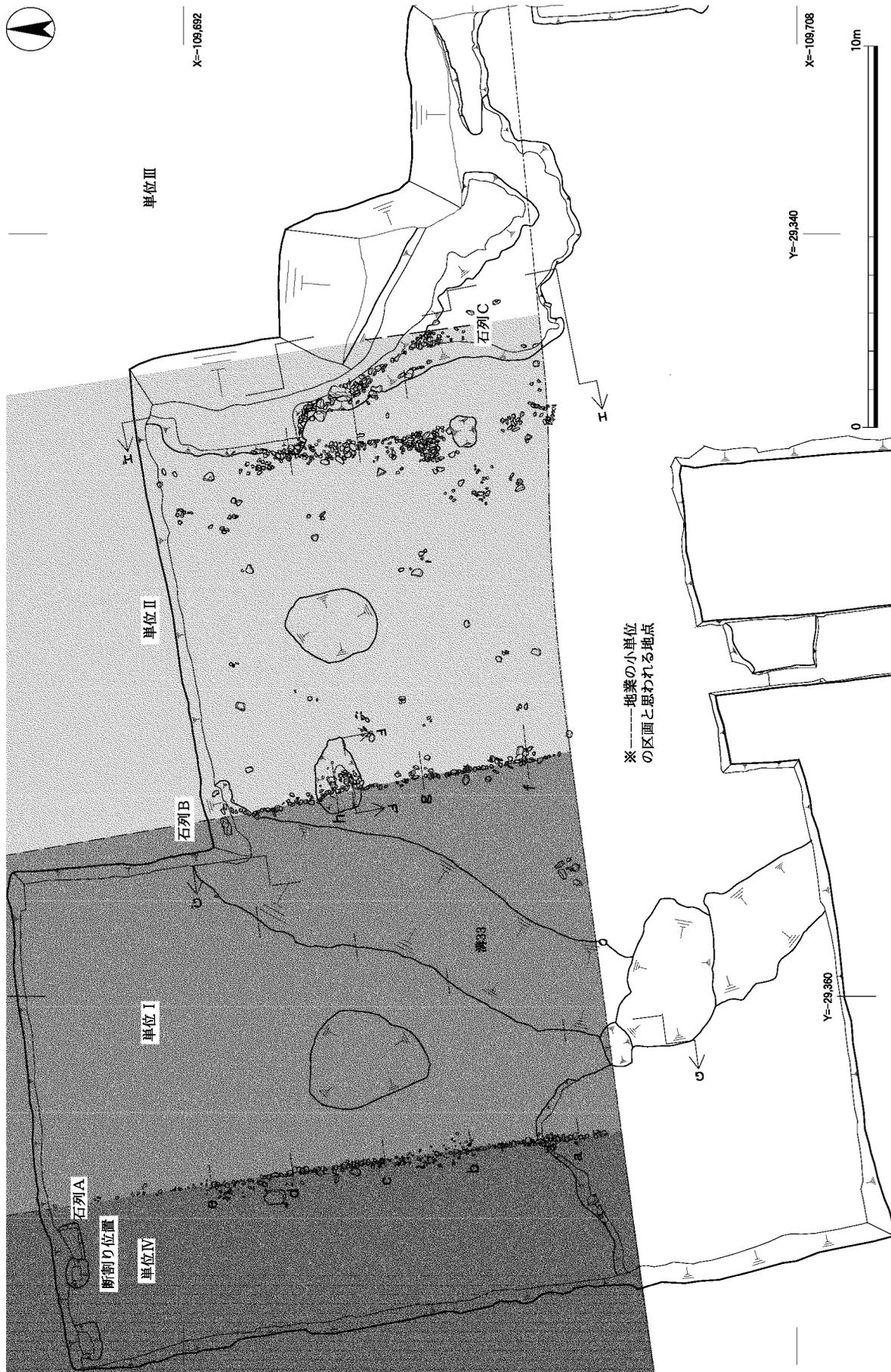


図27 掘込み地業範囲図 (1 : 150)

さの違う石が据わる部分、石が縦長に据わるところ、石が疎らになる部分がある。その石並びの違うまとまりがみられた境に石列の南から a ~ e を付した (図27)。石列南端から a 地点間は、長さ約0.7mある。石が長径部を東西方向にして据わる。地点 a ~ b 間は長さ約2.8mある。a 地点から石が大きくなり、ほとんどの石が東西横長に据わり、面の西が揃う。地点 b ~ c 間は長さ約2.3mある。石列は不明瞭であり、わずかに西面が揃う石が数個ある。地点 c ~ d 間は長さ約2.4mある。大きさの類似する石が東西横長に西面が揃って据わる。地点 d ~ e 間は長さ約2.2mある。石は縦横が混在し、西面が揃うが不明瞭である。e 地点から調査区北壁間は長さ約4.2mある。径0.05m前後の石が疎らになり、不明瞭ながら石列の延長線上にある。また石が疎らになることから、地業範囲の北端が近いという可能性も考えられる。

石列 B は、調査区中央部南側の X=-109,702 付近から北へ約 9 m 延び、方位は北に向かって約 10 度西偏する。石は河原石が多く、径 0.15m 前後あり、南北に並ぶ。石は不明瞭であるが石面が揃う。また石列 A と同様に石並びに違いがあるが不明瞭である。そのなかで比較的明瞭な石並びの境に f ~ h を付した (図27)。f 地点北側の石は横長に据わり、石列は西面が揃う。g 地点北側の石は疎らである。h 地点北側の石は密になり、東面が揃っているように見える。

石列 C は前述したように、土層に礫が混じる疎密の違い (図版 21 - 2) であり、東側は礫がほとんど混じらず、西側は河原石などの径約 0.15 ~ 0.3m 礫が多く混じる。その礫の積み上げは明瞭ではないが東から西へ下がる。

地業の単位と考えられる単位 ~ について述べる。

単位 の地業に伴う石列はその石並びの違うまとまりが地業の小単位を示す場合が多いことを踏まえて、地点 a ~ e と単位 の層序を示す G - G' (図版 7・22 - 1) とを対比した。

G - G' 土層の層序の変わり目、あるいは境に a' ~ d' を付した。a' 点は底部が弓状に下がる層の重なり (第 15 ~ 20 層) が立ち上がる第 20 層の南端である。b' 点は第 6 層と第 9 層の北端にあたる。c' は第 12 層と第 13 層の境である。d' 点は第 12 層の北端にあたる。これらの点と a ~ d 地点とを対比してみた (a 地点の検出標高と a' 点の標高は近い)。すると、a - a'、b - b'、

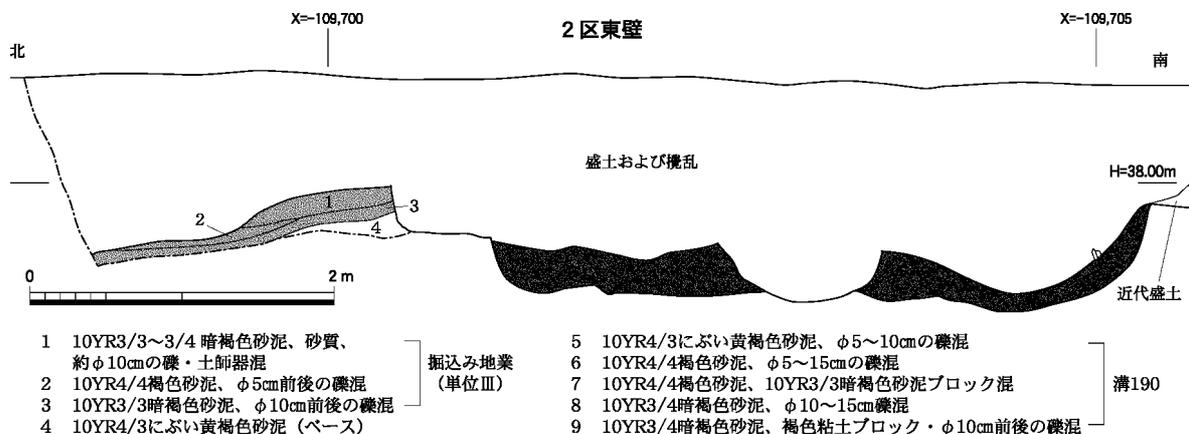


図28 掘込み地業・溝190断面図 (1 : 50)

c - c'、d - d' を結ぶ線は南北石列 A から90度振った線に近い。つまりそれらの線を区画とする地業の小単位に分かれる可能性がある。いずれにしても単位 は、石列 A と G - G' に地業の小単位に分かれる区画地点が認められることから東西に細長い小単位に分かれる部分があると考えられる。

単位 についても単位 と同様に石列の f ~ h 地点と単位 の土層を示す H - H' (図版 7・22 - 2) とを対比した。

f 地点は a と a' 地点のほぼ延長線上にある。g 延長点は b と b' 地点のほぼ延長線上にある。h 地点は c と c' 地点のほぼ延長線上にあり、さらに第 1・2・6 層が立ち上がる地点 (h') が延長線上にあり、ここを境に層序が変わる。また X=-109,696 付近の大石を境に南側は下層部、北側は上層部で礫が密集し礫の混入に違いが認められる。さらに h' 地点と大石の間は他の部分より大きい礫が多く分布する。つまり単位 は東西に細長い地業の小単位に分かれる部分があると考えられる。

なお石列 B の方位は石列 A より西偏するが、これは掘込み地業の出土例¹²⁾でも石列の方位は多少のばらつきがあることから、それらと同様のことと考えられる。あるいは短い長さで測った方位であるため、誤差があるとも考えられる。

単位 は前述したように石列 C から攪乱を挟んで東西 8 m 以上あり、調査区東壁壁際の土層 (図28の第 1 ~ 3 層) は地業の埋土と考えられる。なお土層を観察したが地業の小単位に分かれるかは不明である。

単位 は東西 4 m 以上ある。前述したように西部北壁を断割り、単位 の土層 (図27) を観察した結果、地業の遺構であると考えられた。また石列 A の中央部西側約 0.1 m の位置 (図27 d 地点付近) に長径約 0.6 m、短径約 0.4 m の石がある。石は隅丸方形で上面は平らであり掘形が認められない。また石列 A より西側は礫が疎らに散在する。これらの礫や石は単位 の土層に据わることから単位 と同時期であると考えられ、単位 の南側は地業を施されていたと考えるのが妥当である。なお土層を観察したが地業の小単位に分かれるかは不明である。

各単位の地業は土層の観察から異なる工法である。単位 は最も版築が厚く施されている。単位 は下層部に多くの礫が混ざり、層を重ね版築を施している。単位 ・ は単位 ・ と比べると、礫の混じりは少なく単純な層の重なりである。また単位 ・ では石列が区画となる地業の単位であり、さらに各単位の上層部は東西に細長い地業の小単位に分かれる部分があり、下層部は大きな単位で版築を施すと考えられる。

このような単位毎に地業の工法が違うことは、上面の遺構を検出していないため建物との関係は不明である。また検出した地業の規模は東西 34 m 以上、南北 15 m 以上あるが、この上に東西 20 間、南北 9 間近い建物があったとは考えにくく、地業の規模と上の建物は関連性がないと考える方が妥当である。これまでの発掘調査で検出した掘込み地業の例に鳥羽離宮田中殿¹³⁾がある。この掘込み地業は検出された建物遺構よりかなり離れた位置で検出されている。今回検出した掘込み地業は、鳥羽離宮田中殿の地業と同様に敷地全体に広く掘込み地業を施したと考えられる。

最後に、今回検出した地業の時期については、室町時代前期の遺構が地業を掘り込んで成立していること、地業から出土した少数の小片遺物と、地業の上の施設のものとする土壌76の出土遺物などから鎌倉時代後期と考えている。

溝190（図版5、図28） 調査区南部で検出した。遺構保存されることとなり掘り下げていないため、溝の範囲は不明瞭ではあるが、長さ東西約28m、幅5m前後を検出した。この溝の土層は調査区東壁、土壌76・77の壁面、溝33の壁面などで確認した。東壁断面の溝の土層（図28の第5～9層）観察では粘土質や泥土あるいは砂層などの水を伴った痕跡はみられない。したがって自然堆積層はなく、すべての土層は人為的に埋めたものであろう。また一方、この土層は締まっており下層部には礫混じりの層が目立ち、単位 の地業の土層（図28）に類似する。これらのことから溝190は、細長い地業である可能性が考えられる。時期は一部断割りでの出土遺物やその検出状況、断面観察などから鎌倉時代後期であり掘込み地業と同時期であると考えられる。

なお室町時代前期の遺構の方位は多くがほぼ南北方向であったが、鎌倉時代後期の石列遺構は方位が北に向かって8～10度西偏する。この方位の違いは遺構年代の時期差を示すものと考えている。

（2）遺物

出土遺物には、縄文時代後期から江戸時代、一部近代のものが出土した。

平安時代の遺物は、後世の遺構から土師器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、須恵器、輸入青磁、白磁などが少量出土した。いずれも小片である。鎌倉時代から室町時代の出土遺物は、黒褐色焼土層や土壌76からの出土が多く、多量の瓦類、土器類、金属製品釘類、さらに焼けた壁土などが出土した。その他に土師器、瓦器、須恵器、焼締陶器、輸入青磁、白磁などが出土した。江戸時代から近代の遺物は主に1区から出土した。また土錘などの土製品が出土した。なお遺物については古い順に記述し、土師器の年代は、平安京・京都¹⁴⁾～戡期編年に準拠する。また、遺物の出土地点の調査区については、1区は記述し、2区は省略した。

1) 土器類（図版23～25、図29・30）

縄文土器（図29-1～17）

縄文時代の土器は、後世の遺構から130点近く出土した。そのうち遺存状態の良好なものが17点ある。時期はすべて縄文時代後期の範疇におさまる。出土地点は遺物番号（以下省略）1・4・7・9・11・12・17が溝33からである。これは溝33が地業の埋土や縄文土器包含層を掘り抜いているためであろう。2は土壌146、3・6・14は土壇144A、5・8・10・13・15・16は遺構検出中や掘下げなどの混入である。1～7は口縁部である。特徴的な土器は、1が径8～4mmの円形状穴があり沈線で装飾している。3は口縁に1cm前後の間隔で浅いU字の刻みが入る。10は口縁部の装飾部であろう。

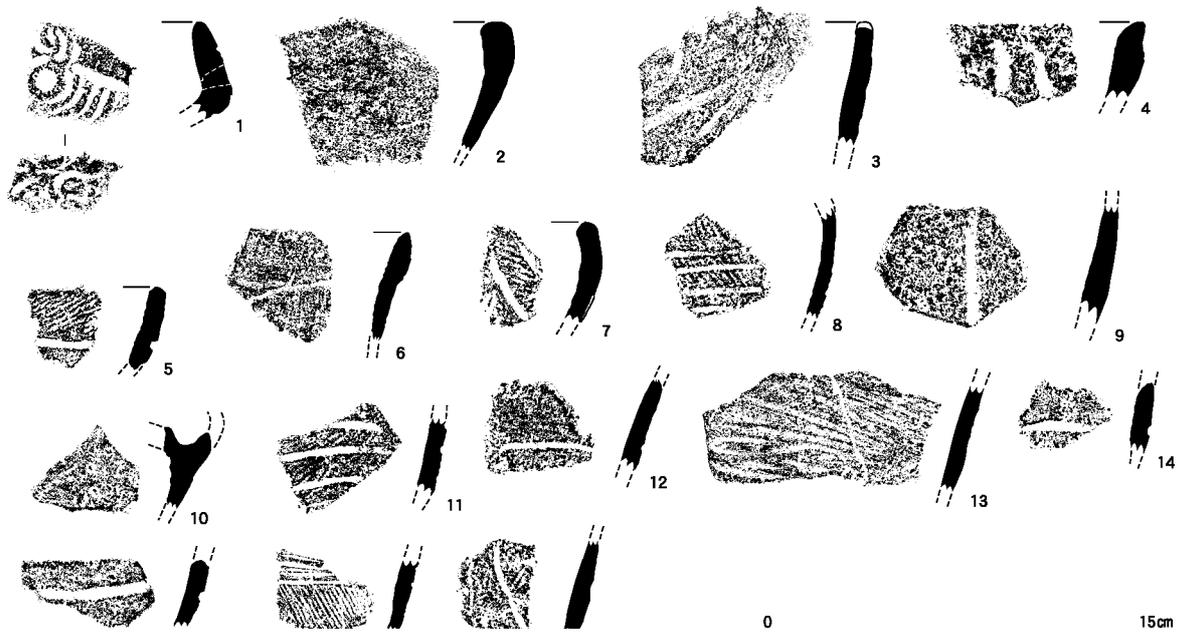


図29 縄文土器拓影・実測図(1:3)

土壙76出土土器(図30-18~42)

整理用コンテナで2箱出土した。18~38は土師器皿である。18~21は径7~8cm前後の小型の皿である。22は器高がやや浅く底部中央部にオサエの凸部いわゆる「ヘソ」がある。23~25は大型の皿である。19・25は底部外面が黒色を呈し、18~25は白色系の土師器皿である。26~30は径8cm前後の小型の皿である。器高は浅く1.5cm前後であり、口縁部をナデで底部より薄く仕上げる。同系の大型の皿として31・32があり、31は内面が黒色を呈する。33~38は底部からの立ち上がりは厚めで強いナデで口縁部は外反し、口縁の先端は内弯気味になる。33は径8cm前後の小型の皿、34~38は径11~13cmの大型の皿であり、38は胎土が黒色を呈する。以上の土師器皿は¹⁵⁾期(新)~期(古)に属する。39は瓦器皿、40は瓦器椀である。41は輸入白磁椀であり、口縁部に釉がない。42は瓦器の盤である。

土壙77出土土器(図30-43~46)

少量出土した。43~46は白色系の土師器皿である。期(古~中)に属する。

黒褐色焼土層出土土器(図30-47~56)

整理用コンテナで1箱出土した。47~50は、器高が低く、口縁部を強いナデで整形する。51~53は口縁の先端が内弯気味になる。54はいわゆるヘソ皿である。55・56は大型の皿で口縁部が厚く、55は外反気味、56は内弯気味である。以上の土師器皿は期(中)に属する。

溝128出土土器(図30-57~59)

整理用コンテナで半箱出土した。57~59は小片の土師器皿である。小型のもので口縁をナデで内弯気味に整形する。期(新)~期(中)に属する。

柱穴137出土土器(図30-60~62)

整理用コンテナで半箱出土した。60~62は土師器皿の破片である。60は口縁に黒色の部分が4

ヶ所ある。灯明皿であろう。61は口縁が外反気味の土師器皿である。62は白色系の土師器皿である。これらは 期(中～新)に属する。

土壙138出土土器(図30-63～66)

土壙138～土壙140をまとめて整理用コンテナで1箱分出土した。完形の土師器皿が十数点ある。63は器高が低く口縁部をナデて整型する小型の皿である。64は口縁が外反気味である。65～66は体部は薄く、口縁は内弯気味であり、白色系の土師器皿である。以上の土師器皿は 期(中)～(新)に属する。

土壙139出土土器(図30-67～73)

土師器皿である。67～70は体部は薄く、口縁は内弯気味であり、白色系の土師器皿である。71は底部にオサエの凸部がある。72は口縁が大きく開き平たくなる。73は体部から口縁部にかけて外反し、底部から体部が変わる部分がオサエで窪む。また外面もへこむ。以上の土師器皿は 期(中)～(新)に属する。

土壙140出土土器(図30-74・75)

土師器皿である。74・75は体部が少し厚めであり、白色系の土師器皿である。以上の土師器皿は 期(中)～(新)に属する。

柱穴92出土土器(図30-76～78)

少量出土した。完形とほぼ完形の土師器皿を数点含む。76は白色系の「へソ」のある小型の土師器皿である。77は大型の土師器皿、78は白色系の体部が薄い大型土師器皿である。以上の土師器皿は 期(新)～(中)に属する。

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
縄文時代	縄文土器、石錘	2箱	縄文土器17点、石錘1点	1箱	0箱
平安時代	緑釉陶器、灰釉陶器、須恵器、黒色土器	少量	土馬1点、軒平瓦1点	0箱	0箱
鎌倉時代～室町時代	土師器、瓦器、施釉陶器、焼締陶器、輸入磁器、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、土製品、金属製品、石製品、銭貨	105箱	土師器62点、瓦器3点、輸入白磁1点、輸入青磁1点、軒丸瓦16点、軒平瓦13点、平瓦6点、刻印瓦3点、へら記号瓦13点、土錘12点、金属製品32点、銭貨7点、砥石2点、壁土11点	89箱	4箱
江戸時代	土師器、施釉陶器、染付磁器、磁器、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、棧瓦、土製品、金属製品	10箱	土師器4点、染付磁器1点、軒平瓦2点、土錘2点、金属製品4点	3箱	6箱
合計		117箱	215点(14箱)	93箱	10箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物を抽出したため、出土時より16箱多くなっている。

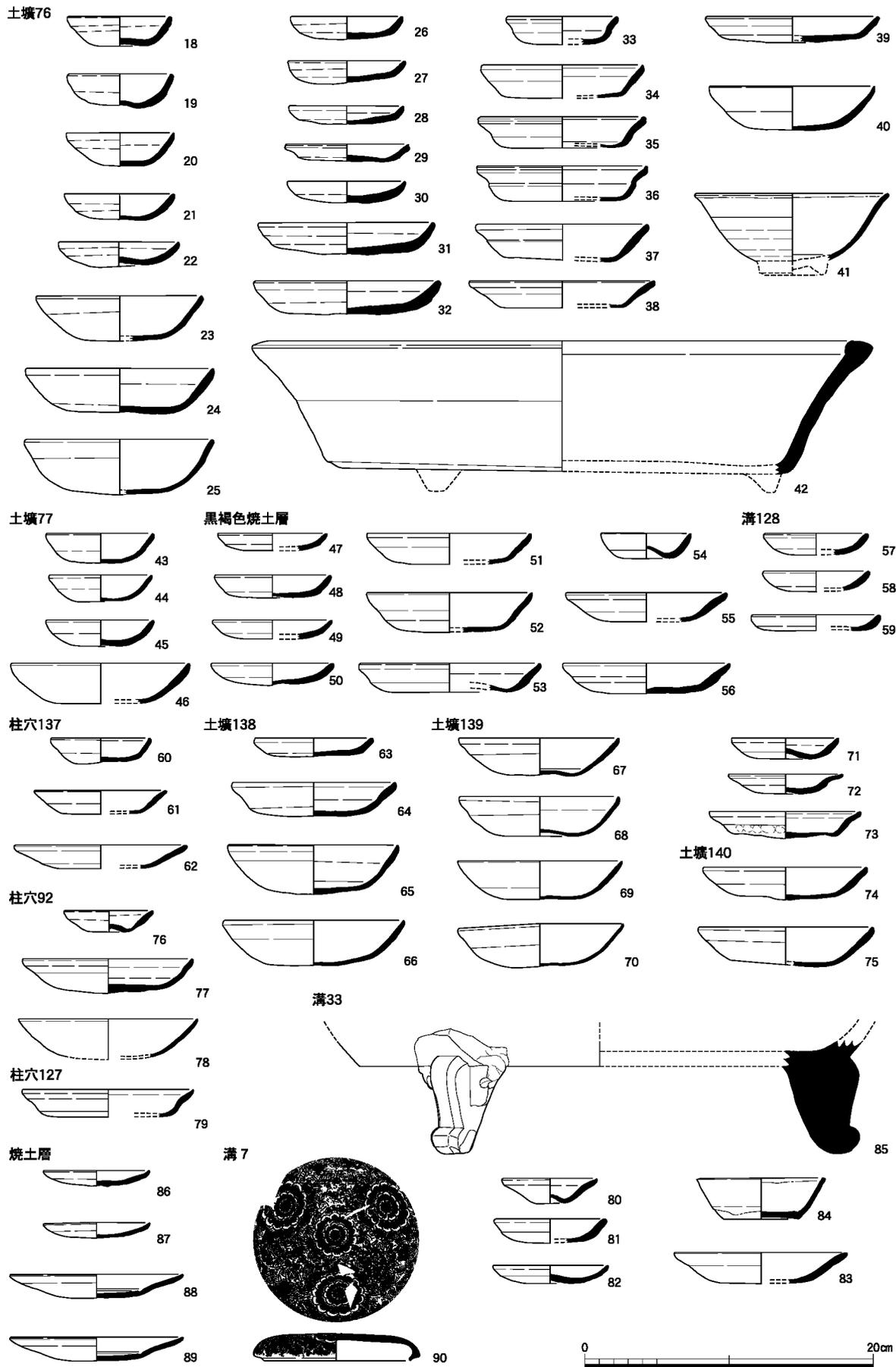


图30 土器实测图(1:4)

柱穴127出土土器（図30 - 79）

少量出土した。完形とほぼ完形の土師器皿を数点含む。79は口縁が外反気味の土師器皿である。期（新）～（中）に属する。

溝33出土土器（図30 - 80～85）

整理用コンテナで1箱出土した。80は白色系の土師器、いわゆる「ヘソ」皿である。81は体部が厚く口縁が外反気味である。82は底部が少し盛り上り口縁は内弯気味である。83は口縁が外反気味の白色系の大型土師器皿である。以上の土師器皿は 期に属する。84は輸入青磁である。口縁は釉がなく、外側の底部から体部下半にかけても釉がない。85は瓦器であり、風炉脚か。

焼土層出土土器（図30 - 86～89）

1区石列H周辺の焼土層からの出土土器である。86・87は器全体が薄く、口縁部をナデで磨いた小型の土師器皿である。87は外面内面とも黒ずんでいる。88・89は底部と口縁部の境に凹状圈線があり内面外面ともに黒色を呈する。江戸時代末期から近代（戦期新）のものである。

溝7出土土器（図30 - 90）

1区溝7から出土した染付磁器である。近代、合子の蓋か。

2) 瓦 類（図版8～10・26～31、表3・4）

瓦類は土壌76・77、黒褐色焼土層から大量に出土した。特に土壌76から多量に出土した。

土壌76出土瓦（図版8 - 91～98）

整理用コンテナで36箱出土した。内訳は三巴珠文軒丸瓦が2箱・122点、複弁8葉蓮華文軒丸瓦が2箱・25点、文不明軒丸瓦が1箱・27点、連珠文軒平瓦が2箱・66点、剣頭文軒平瓦が1箱・52点、丸瓦が9箱・約101kg、平瓦が19箱・約277kgである。なお瓦当面がない接合部は軒瓦に入れず、丸瓦に分類した。

軒丸瓦（91～94） 91は全長約31cm、直径約12.5cmの右巻き三巴珠文軒丸瓦である。92は範キズと珠文の位置、形状から91と同範と考えられる三巴珠文軒丸瓦である。外区に珠文が20個ある。胎土は礫の混入が少なく、焼成は堅く締まる。上記2点以外にこれらと同範が50点、小片であるため断定はできないが、その胎土と焼成などから同範、少なくとも同文である三巴珠文軒丸瓦が60点出土している。またこの三巴珠文軒丸瓦の破片と思われる文不明軒丸瓦片も15点出土している。

93は全長約23.5cm、直径約10.5cmの複弁8葉蓮華文軒丸瓦の完形品である。外区に圈線と16個の珠文がある。玉縁には釘穴があり、隣接する丸瓦部凸面にヘラ記号がある。94は複弁8葉蓮華文軒丸瓦で直径約2cmの凸状中房に「ㄥ」がある。また93と94は範キズ、文様の位置や形などが一致し同範の可能性が高いこと、他の出土同文軒丸瓦には「ㄥ」がかすれたものや一部残るものがあることや同じ土壌から出土したことから、中房の「ㄥ」の有無の違いは制作年代の時期差と考えるよりは、範の磨滅や制作時の範を押さえる深さの違いと考えられる。胎土は5mm前後の礫の混入が目立つ。焼成は堅いが脆い。上記2点以外に複弁8葉蓮華文軒丸瓦点数で中房の「ㄥ」が

明瞭なものが9点、不明瞭なものが14点、またその胎土などから、この軒丸瓦の破片と思われる文不明軒丸瓦片も12点出土している。

軒平瓦（95～98）95・96は連珠文軒平瓦である。連珠の上下に界線があり、珠文は19個ある。右端の珠文は半分である。他の出土同文軒平瓦の範キズと文様の位置、形などから95・96は同範であろう。大きさは全長約26cm、瓦当面の横幅約20cm、厚さ約4cmある。胎土・焼成は、三巴珠文軒丸瓦（珠文20）と類似する。上記2点以外にも同範と考えられるほぼ完形瓦当面のものが12点、一部残るものが52点出土している。

¹⁶⁾97は剣頭文軒平瓦である。剣頭文は6個あり、全長約19.5cm、瓦当面の横幅約19cm、厚さ約3cmある。また瓦当面に布目が残ること、瓦当裏面に残るシワを調整で取り除いていることなどから完全折り曲げ式の軒平瓦である。また平瓦部凹面の瓦当面に接する中央部に複弁8葉蓮華文軒丸瓦（93）にみられた同系統のヘラ記号がある。胎土・焼成は、複弁8葉蓮華文軒丸瓦（珠文16）と類似する。剣頭文の形や位置、胎土・焼成などから同範の可能性が高い軒平瓦が97以外に49点あり、ほとんどの平瓦部凹面に同様のヘラ記号がある。98は同範の瓦であるが、平瓦部を人為的に斜めに割ったと考えると、隅軒平瓦の可能性もある。

以上の土壌76出土軒瓦は、軒丸瓦は大小2種類、軒平瓦も大小2種類に限られる。また軒瓦の制作年代は、共伴出土土器の年代が13世紀末から14世紀初め頃であることから鎌倉時代後期、使用年数を加味しても鎌倉時代の中頃と考える。

丸瓦 軒丸瓦に対応するように、大振り和小振りの丸瓦がある。大振りの丸瓦は玉縁が整理用コンテナで1箱・53点、瓦当接合部が1箱・107点、その他4箱・約41kg、計6箱・約67.5kg出土した。大振りの丸瓦は前端面を確認できなかった。小振りの丸瓦は、玉縁1箱・75点、端面1箱・54点、その他1箱・17.5kg、計3箱・約33.5kg出土した。玉縁と確認できたものすべての丸瓦凸面玉縁側に複弁8葉蓮華文軒丸瓦（93）にみられたものと同系統のヘラ記号があり、26点には釘穴がある。

平瓦 同じく軒平瓦に対応するように、大振り和小振りの平瓦がある。大振りの平瓦が整理用コンテナで8箱・約116.5kg、小振りの平瓦が7箱・約101.5kg、不明瞭なものが4箱・59kg出土した。大振りの平瓦は復元できたもので全長約26.5cm、広端面幅20cm前後、狭端面幅約18cmあり、凸面に格子や文字の叩きのあるものがある。小振りの平瓦は復元できたもので全長約25cm、

表3 土壌76出土瓦の偶数

	大振り	小振り	不明	計
丸瓦	53	129	—	182
軒丸瓦	123	38	—	161
計	176	167	—	343
平瓦	133	85	428	646
軒平瓦	65	51	—	116
計	198	136	428	762

広端面幅約16cm、狭端面幅約14.5cmあり、凸面には斜格子叩きが薄く残り、両面には離れ砂が顕著にみられる。また広端面に刻印を押すものがある。平瓦の破片は、長さ10～13cmで横に割れたもの、あるいはそれらが縦に割れたほぼ1/4の大きさの破片がみられる。

瓦の使用形態（図31～33、表3）6 剣頭文軒平瓦の凹面にはおよそ1/3を境に前端が濃

く後端が淡いといった色の違いが認められ、さらに前端の濃い部分の側面側にも不明瞭ながら色の違い認められる。また小振り横割れ平瓦凹面の側面際にも同様な濃淡の色違いが認められる（図31・32）。これらは、瓦を葺きあげていた際に瓦の重なりによって生じた痕跡ではないかと考え、軒平瓦の色の淡い部分に横に割れた平瓦を重ねたところ、瓦の重なりは軒平瓦の全長とほぼ一致した。さらにこの瓦の組合せを横に並べ、凹面側面際の色それぞれの淡い部分に複弁8葉蓮華文軒丸瓦を上重ねてみたところ、瓦の重なる組合せの全長と軒丸瓦の全長がほぼ一致し

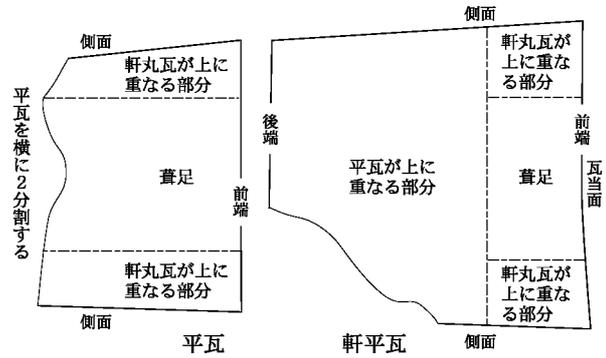


図31 葺きあげの痕跡模式図



図32 葺きあげの痕跡



図33 瓦葺きあげ状態

た。以上のことなどを踏まえ、瓦の葺きあげ状態を復元¹⁷⁾してみた(図33)。これらは軒先から奥へ約20cmまで測れる。横割れした平瓦については、長さ10~13cmのものが12点・3kg、長さを6~13cmとしても25点・4.5kg程度と、小振りの平瓦総量101.5kgに占める割合は少ない。また、後述する瓦の隅数より復元できる瓦数から、瓦の葺上げは、軒先から奥に延びる可能性は低い。仮に、軒平瓦に平瓦1枚が重なる葺上げとすれば、軒先から約33cm測れる。

瓦の隅部位を数えた(表3)。丸瓦・軒丸瓦は瓦当部・玉縁・端面のどの破片でも1として数え、平瓦・軒平瓦は瓦当部を含めて各々の隅を数えた。丸瓦と軒丸瓦の隅数合計343を2で割ると171.5、約172の個体数となる。平瓦と軒平瓦の隅数合計762を4で割ると190.5、約191の個体数となる。両者の割合は9:10である。

土壙77出土瓦(図版8-99~104)

土壙77は南半が調査区外のため完掘してないが整理用コンテナで軒丸瓦32点、軒平瓦23点、丸瓦約8.5kg、平瓦約18kg、各々1箱、計4箱出土した。土壙76出土軒瓦と同範のものは、三巴珠文軒丸瓦10点、複弁8葉蓮華文軒丸瓦が4点、連珠文軒平瓦2点、剣頭文軒平瓦6点がある。ここではこれら以外の出土軒瓦について述べる。

軒丸瓦(99~102) 99は中房に「卍」があるほぼ完形の複弁8葉蓮華文軒丸瓦(珠文16個)である。土壙76で中房「卍」の同範が出土しているが、完形であるため取り上げた。全長が約22cm、径約10cmあり、玉縁に釘穴がなく、玉縁側の丸瓦部凸面に複弁8葉蓮華文軒丸瓦(93)と同様のヘラ記号がある。100は複弁8葉蓮華文軒丸瓦¹⁸⁾である。外区に圏線と12個の珠文があり、径約2cmの凸状中房に「米」がある。弁やその輪郭線は直線的である。同範と思われるものが100を含めて6点ある。そのなかに完形に近いものがある。その全長は約22cm、直径は約10cmあり、玉縁には釘穴なく、ヘラ記号もない。101は右巻き三巴文軒丸瓦である。珠文はない。同文軒丸瓦が101を含めて4点ある。102は左巻き三巴文軒丸瓦である。珠文はない。これ1点のみの出土である。

軒平瓦(103・104) 103は完形の8剣頭文軒平瓦である。左右の端の剣頭文が切れている。全長約15cm、瓦当面の横幅約15cm、厚さ約2cmあり、やや小振りである。瓦当面に布目が残り瓦当裏面にシワを調整で消した痕があることから完全折り曲げ式である。同文の剣頭文軒平瓦が103を含めて4点ある。これら以外に同様の小振りの剣頭文軒平瓦6点、その他の剣頭文軒平瓦が2点出土している。104は「米」の中心飾りがある唐草文軒平瓦である。瓦当面の横幅約15.5cm、厚さ約3cmあり、完全折り曲げ式である。平瓦部凹面の瓦当面に接する中央部に、幅は狭いが剣頭文軒平瓦(97)にみられた同系統のヘラ記号がある。同文の唐草文軒平瓦が104を含めて3点ある。

その他の遺構出土軒瓦(図版9-105~119)

土壙76・77以外の遺構からも瓦が出土している。特に黒褐色焼土層では整理用コンテナで13箱出土した。その内訳は軒丸瓦1箱35点、軒平瓦2箱80点、丸瓦4箱約47.5kg、平瓦6箱約85kgである。土壙76・77出土軒瓦と同範のものが多くある。ほかの遺構からの出土軒瓦を含めて土壙

76・77からの同范以外の出土軒瓦についてここでは述べる。

軒丸瓦（105～111） 105は黒褐色焼土層から出土した完形の右巻き三巴文軒丸瓦である。外区に21個の珠文があり、その外側に圏線がある。玉縁には釘穴があり、全長約43cm、直径約17cmのかなり大振りの軒丸瓦である。その大きさや形から鳥衾瓦の可能性もある。106は重機掘削中に出土した左巻き三巴文軒丸瓦である。外区に16個の珠文がある。107は黒褐色焼土層から出土した右巻き推定（三）巴文軒丸瓦である。108は土壙146から出土した右巻き三巴文軒丸瓦である。巴は細目である。109も土壙¹⁹⁾146から出土した複弁8葉蓮華文軒丸瓦である。外区に厚めの珠文を12個配し、その外側に圏線がある。径約2.5cmの凸状中房に「卍」がある。110は黒褐色焼土層から出土した複弁推定（8）葉蓮華文軒丸瓦である。花卉の長さは短めで外区に珠文を推定（12）個配し、その外側に圏線がある。111は溝128から出土した複弁6葉蓮華文軒丸瓦である。外区に珠文はなく外側に圏線がある。

軒平瓦（112～119） 112は2区東部掘下げ中に出土した外区脇区に珠文を配する唐草文軒平瓦である。今回の調査では唯一出土した平安時代前期の軒瓦である。113は土壙67から出土したほぼ完形の剣頭文軒平瓦である。小振りであり、全長約13.5cm、瓦当幅約15cm、瓦当の厚さ約3cmあり、完全折り曲げ式である。「大」の中心飾りがあり剣頭文は6個ある。114は2区遺構検出中に出土した「✱」の中心飾りがある8剣頭文軒平瓦である。瓦当面幅約15cm、厚さ約3cmある。115は土壙138から出土した剣頭文軒平瓦である。平瓦部凹面にヘラ記号がある。116は2区第1面掘下げ中に出土した「×」の中心飾りのある推定（6）剣頭文軒平瓦である。117は溝33から出土した三巴の中心飾りのある推定（6）剣頭文軒平瓦である。118・119は1区溝7から出土した唐草文軒平瓦であり、中心飾りは宝珠か。また周縁部の違う位置に印刻の途切れる隅丸長方形の中に「常九」の文字がある。

出土瓦の叩き・ヘラ記号・刻印（図版10・30・31、図34、表4）

特殊な叩きやヘラ記号のある瓦が土壙76・77を中心に出土した。

120～125は、土壙77からの出土である124を除き、土壙76から出土した。120は全長約26.5cm、広端面幅の推定20cm前後、狭端面幅約18cmある大振りの平瓦である。その凸面の狭端面側に「請國る」の文字の叩きが5単位ある。文字の2文字目は國のくずし字、3文字目は花押と考える。この叩きのある平瓦は土壙76から整理用コンテナで2箱・107点出土した。121は全長約24.5cm、広端面幅約21.6cm、狭端面幅約14.5cmある大振りの平瓦である。その凸面に斜格子叩きがある。この斜格子叩き平瓦は土壙76

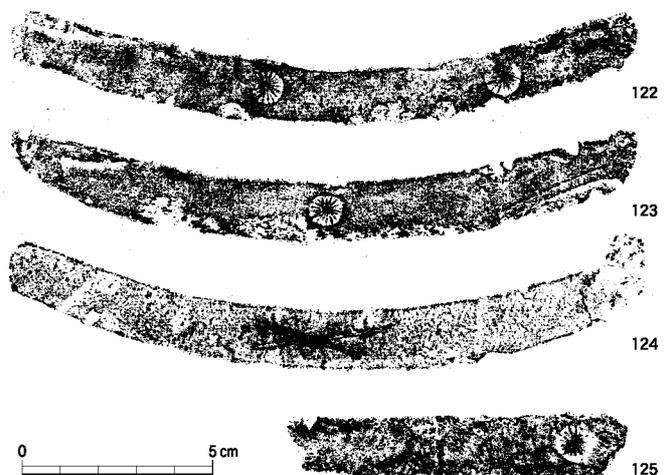


図34 瓦刻印とヘラ記号拓影（1：2）

表4 瓦ヘラ記号観察表

遺物番号	ヘラ記号 模式図	遺構	観察	遺物番号	ヘラ記号 模式図	遺構	観察
93		土壇 76	軒丸瓦凸面玉縁側にある。長さ約4cmと6cmの2本あり、2～2.5cm離れる。	131		土壇 77	丸瓦凸面玉縁側の中程にある。長さ約7cmの2本がV字状に約1cm広がる。直線が後引き。
97		土壇 76	軒平瓦凹面瓦当側にある。長さ7cmと6cmの2本あり、2～2.5cm離れる。	132		2区 掘下げ中	平瓦凹面の縦方向に引く。長さ約4cmの2本が左右で切れる。恐らくV字状のものであろう。
115		土壇 138	軒平瓦凹面瓦当側にある。長さ約4.5cmが2本あり、V字状に約1cm広がる。	133		溝 128	平瓦凸面の縦方向に引く。長さ約3cmの2本が交差し左が切れる。右上がり線が先に引く。
124		土壇 77	平瓦広端面の中心にある。長さ約3cmと3.5cmの2本が交差、長い方が先に引く線。	134		溝 33	平瓦凹面の縦方向に引く。長さ約5cmの2本の先端が交差しV字状に5mm開く。直線が先。
127		黒褐色焼土層	丸瓦凸面玉縁側の中程にある。長さ約5.5cmと4cmの2本が交差し、長い方が先に引く線。	135		2区 掘下げ中	平瓦凸面の横方向に引く。長さ約6cmの2本が平行し右が切れる。約1.5cm離れる。
128		土壇 77	軒丸瓦?凸面玉縁側の側面側にある。長さ約6cmの2本が交差し、斜め線が後に引く線。	136		溝 33	平瓦凸面の縦方向に引く。長さ約5cmの2本が交差し途中で切れる。直線が先に引く。
129		土壇 77	丸瓦凸面玉縁側のやや側面(下側)にある。左が切れ約5.5cmの2本が交差し、斜線が後引き。	137		黒褐色焼土層	剣頭文軒平瓦凹面にある。長さ約5cm・4cm・5cmの3本が交差し、線引き順は番号順である。
130		2区 掘下げ中	丸瓦凸面の中程にある。長さ約2cm・3cm・3cmの3本が交差し線を引く順は番号順である。	138		土壇 76	軒平瓦凹面瓦当側にある。長さ7cmと6cmの2本あり、1～1.5cm離れる。93・97と同系。

から整理用コンテナで4箱・64kg出土した。122は推定全長27cm、広端面幅の推定22cm前後、狭端面幅の推定20cm前後ある小振りの平瓦である。その凸面に不明瞭ながら121と比べて細く小さい斜格子叩きがある。広端面には18本の棒線と小さい中房からなる菊花状の刻印(図34)を2個押す。1点のみ出土した。125は16棒線菊花状刻印(図34)を側面に押す。1点のみ出土した。また全体に離れ砂が目立つ。123は平瓦広端面に18棒線菊花状刻印(図34)が1個あるものであり、このような菊花状刻印は、離れ砂の目立つ小振りの平瓦のうち、確認できた狭端面にはなく、おそらく広端面に押印すると思われる。さらにこの刻印は、16棒線刻印と18棒線刻印の2種類ある。これらの刻印平瓦は土壇76から整理用コンテナで1箱・43点出土した。各々の点数は、16棒線刻印瓦は9点、18棒線刻印瓦は23点、不明11点である。124は土壇77からの出土したヘラ記号(図34)のある平瓦である。1点のみ出土した。

126は溝33から出土した平瓦である。側面の垂直方向に約5mm幅の凸線が、凸面に約4cmの長さで少しずれた叩きがある。

127～138と93・97・115はヘラ記号のある瓦である。93は前出の複弁8葉蓮華文軒丸瓦の完形品である。釘穴がある玉縁に隣接する丸瓦部凸面にヘラ記号がある。99の完形複弁8葉蓮華文軒丸瓦にも同じ位置に同系のヘラ記号がある。さらに土壇76から出土した整理用コンテナ1箱分の玉縁が残る丸瓦の大部分にも同じ位置に同系のヘラ記号がある。97は前出の剣頭文(6個)軒平瓦であり、瓦当面に接する平瓦部凹面中央部にヘラ記号がある。93・99などのヘラ記号と同系である。138は剣頭文(6個)軒平瓦であり、布目継部分があり同系のヘラ記号があるため取り上げ

た。さらに土壙76から出土した整理用コンテナで1箱の同範の剣頭文(6個)軒平瓦の大部分にも、同じ位置に同系のヘラ記号がある。またヘラ記号の確認できなかった右左の瓦当端部である剣頭文軒平瓦は同範と考えられることから、この剣頭文(6個)軒平瓦にはすべてにヘラ記号がある可能性が高い。

なお、その他のものを含め、出土瓦ヘラ記号観察表(表4)を載せたので参照されたい。

3) 土製品(図版32-1、図35・36、表5)

土製品は土錘が42点出土した。土馬(図35)も1点出土した。以上のうち完形品および良好な15点を選んで図化(図36)した。

土錘は様々なものが出土している。その形状や重さで分類すると、一番小さい141・143の群、少し長めの145・147の群、小さく少し太めの142・148の群、太めの144・146・149の群、長めの139・140・150の群、そして大きく太い151・152の群に大別できる。それらを出土した遺構で分類すると、時代が下るにつれて形状が大きくなる傾向がみられる。特に大きなものは江戸時代の遺構から出土



図35 土馬

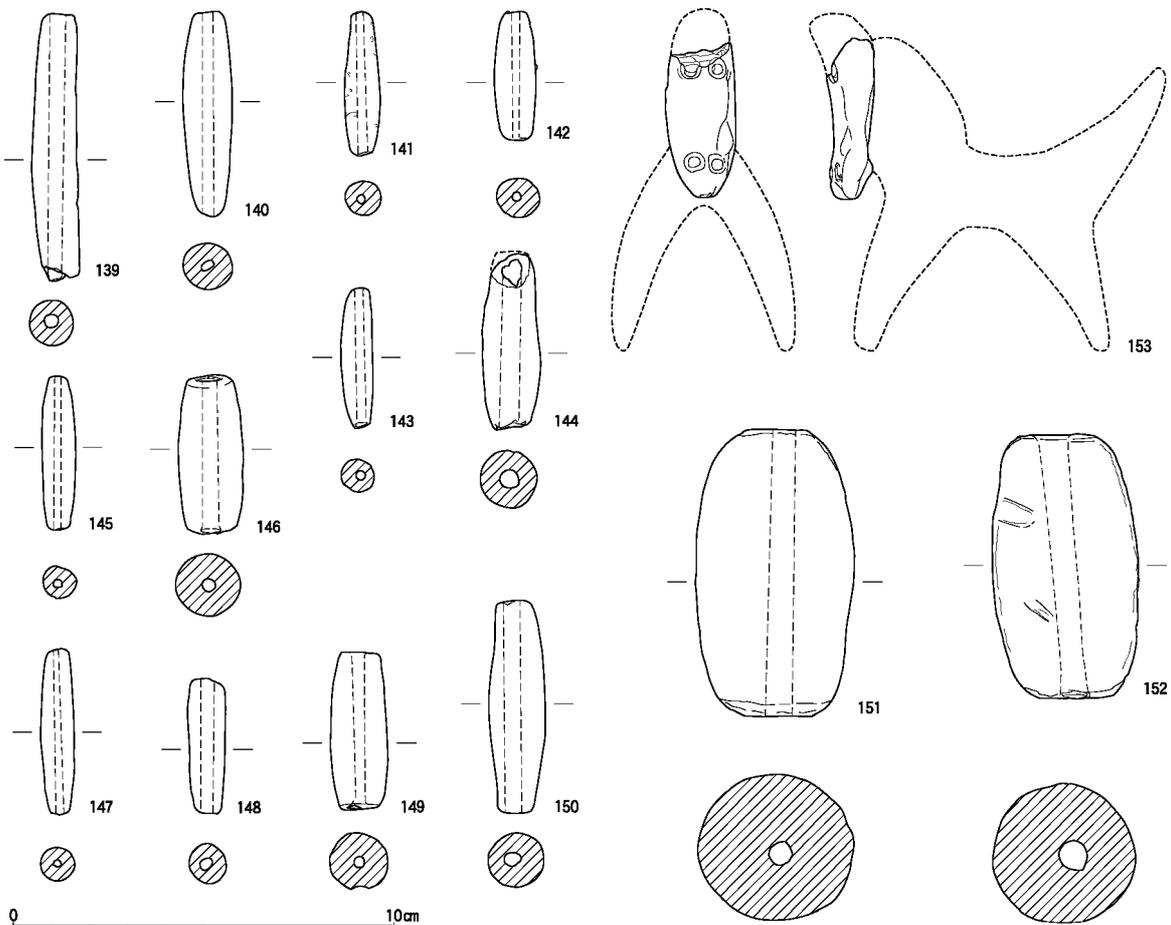


図36 土製品実測図(1:2)

表5 土製品一覧表

遺物番号	種類	遺構・面	長さ (cm)	最大径 (cm)	重さ (g)	遺物番号	種類	遺構・面	長さ (cm)	最大径 (cm)	重さ (g)
139	土錘	第1面掘下げ中	6.9	1.2	9.4	147	土錘	溝33下層	4.3	0.9	2.8
140	土錘	第2面清掃中	5.3	1.2	7.3	148	土錘	溝33中層	3.5	1.0	3.5
141	土錘	第1面掘下げ中	3.7	0.9	2.8	149	土錘	第1面遺構検出中	4.1	1.6	9.3
142	土錘	第2面検出中	3.3	1.1	4.0	150	土錘	攪乱	5.5	1.5	11.1
143	土錘	第1面掘下げ中	3.6	0.9	2.5	151	土錘	1区溝1	7.5	4.1	124.6
144	土錘	第2面遺構検出中	4.5	1.5	8.5	152	土錘	1区溝7	6.9	3.8	96.3
145	土錘	溝128検出中	4.0	0.9	2.8	153	土馬	第1面掘下げ中	上下4.0 横幅1.8 厚さ1.2		
146	土錘	第1面掘下げ中	4.1	1.6	11.8						

表6 金属製品一覧表

遺物番号	種類	遺構・面	長さ (cm)	径 (cm)	重量 (g)	遺物番号	種類	遺構・面	長さ (cm)	径 (cm)	重量 (g)
154	釘 完形	土壌76	「9.2」	頭部 1.2×0.9 断面 0.7×0.6	「10.9」	172	鎌	第2面 検出中	刃 6.5 茎 7.5	刃 3.1×0.5 茎 1.5×0.5	82.0
155	釘	土壌76	7.8	頭部 1.1×0.5 断面 0.6×0.4	6.2	173	鎌・雁股	第2面 検出中	6.8	先端 1.1×0.5 末端 0.6×0.4	20.0
156	釘 完形	土壌76	「9.9」	頭部 1.3×0.9 断面 0.6×0.4	「7.0」	174	刀子 完形	土壌139	刃「18.6」 茎「4.3」	刃 2.6×0.4 茎 1.7×0.4	「98.3」
157	釘	土壌76	4.6	頭部 0.9×0.7 断面 0.6×0.5	5.4	175	煙管	遺構 検出中	5.3	先端 0.6×0.6 断面 1.1×1.0	4.4
158	釘	土壌76	4.4	頭部 0.6×0.5 断面 0.4×0.3	2.2	176	筭 完形	土壌146	「17.0」	先端 0.2×0.1 最大 1.1×0.2	「15.7」
159	釘	土壌76	5.1	頭部 0.8×0.6 断面 0.6×0.5	2.4	177	釘	溝33	6.7	頭部 1.4×1.0 断面 0.8×0.6	13.9
160	釘	土壌76	3.4	頭部 0.8×0.3 断面 0.4×0.3	1.3	178	釘	溝33	5.1	頭部 0.8×0.6 断面 0.6×0.5	4.0
161	釘	土壌76	3.6	頭部 0.5×0.4 断面 0.3×0.2	0.8	179	釘	溝33	4.9	頭部 1.5×1.1 断面 0.9×0.5	7.5
162	釘	土壌76	2.7	頭部 0.5×0.3 断面 0.4×0.3	1.1	180	釘	溝33	4.1	頭部 0.8×0.4 断面 0.6×0.5	3.3
163	釘	土壌76	3.2	断面 0.4×0.3	0.8	181	釘	溝33	4.4	断面 0.5×0.5	3.4
164	釘	土壌76	2.8	断面 0.3×0.3	0.9	182	湯釜	溝33	横 5.3 縦 5.4	厚さ 0.2~0.8	65.8
165	釘	土壌76	3.8	断面 0.2×0.2	0.6	183	湯釜	溝33	横 4.7 縦 3.4	厚さ 0.7~0.8	47.0
166	釘	土壌76	3.2	断面 0.3×0.2	0.6	184	不明	溝33	横 2.1 縦 1.0	厚さ約 0.01	0.3
167	釘	土壌76	3.3	断面 0.2×0.2	0.6	185	不明 完形	第1面 掘下げ中	長「2.5」 短「2.1」	断面 0.2×0.2	「1.1」
168	釘 完形	土壌76	「5.0」	頭部 0.4×0.2 断面 0.3×0.2	「1.3」	186	簪 完形	1区 清掃中	「12.6」 球「0.8」	球 0.9×0.9 断面 0.4×0.3	「3.5」
169	不明	黒褐色焼 土層	0.5	0.5×0.4 厚さ 0.2	0.2	187	簪 完形	1区 溝1	「10.6」 球「0.8」	球 0.6×0.5 断面 0.2×0.1	「2.1」
170	釘	黒褐色焼 土層	2.9	断面 0.6×0.5	3.7	188	簪 完形	1区 土壌6	「14.3」	断面 0.3×0.2	「4.0」
171	不明	黒褐色焼 土層	6.8	断面 1.3×0.5	11.5	189	釣り針 完形	1区 清掃中	「2.3」	0.3~0.1	「0.5」

※ 「 」は完形の数値である。

している。

153は土馬の頭部である。第1面掘下げ中に出土したが平安時代のもと考えられる。

4) 金属製品 (図版11・32 - 2・33、
図37、表6)

200点前後出土した。その内の土壌76と溝33からの出土品を中心に36点について述べる。

154~168は瓦が大量に出土した土壌76出土の釘類である。154~157はほぼ3寸の釘である。断面は四角く、頭は打たれて折れ曲がる。

154・156は完形、155は先端が欠損する。157はその太さと形状から154などと同類の釘でありその上半分が残る。158~162は小さめの釘であり断面が四角く上部分が残るものである。163~167は小さめの釘であり断面が四角く下部分が残るものである。168は完形釘である。小さく長さ約5cm、断面は四角く頭は折れ曲がる。

169~173は遺構以外の掘下げ中などから出土した。169は金箔が残る小片である。170は釘の先端部であり、断面は四角い。その形状からおそらく154と同類のものであろう。171は器種不明である。断面は平たく、折り曲げて2枚重ねている。172は両刃の鎌であろう。下部分の先端が鍵状になる。おそらくその部分で把手を固定したと考えられる。173は断面が四角く、先が平たく二股に約4cm広がる。その形状から矢の鎌・雁股であろう。

174は埋納遺構である土壌139から出土した刃と^{なかご}茎のある完形の刀子である。全長約23cmある。

175は遺構検出中に出土した銅製と思われる煙管である。火皿部分はなく雁首部分が残る。176は室町時代後期と考える土壌146から出土した^{こうがい}斧であろう。平たく先端部が細くなる。頭部は針状になり先が折れ曲がる。胴体の上半分に幅約0.4cm、長さ約5cm、陽刻があり、その中に長さ約4.4cmの線刻がある。

177~184は溝33からの出土である。177は断面が四角く頭部が残るかなり大きい釘である。178~181は154などの3寸釘と太さ形状が類似する。178~180は頭部の残る上部分、181は先端部が残る下部分である。182・183は鑄鉄の破片であり、その形状と断面から湯釜の体部の可能性が考えられる。184は貝殻文様があり銅製と思われる。飾り金具の可能性もある。

185は途中で途切れる環状のもので銅製と思われ、

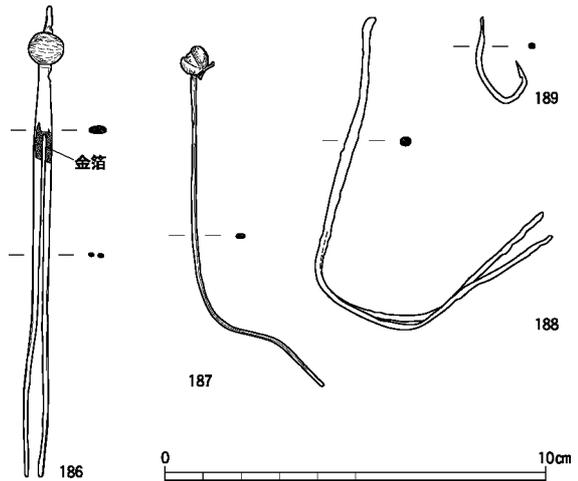


図37 1区出土金属製品実測図(1:2)

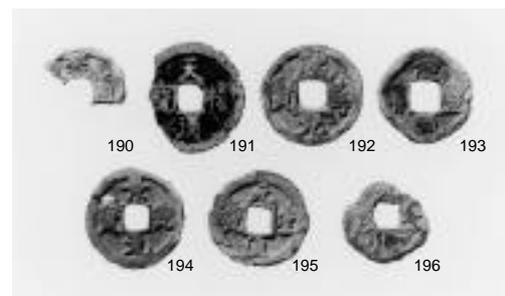


図38 錢貨

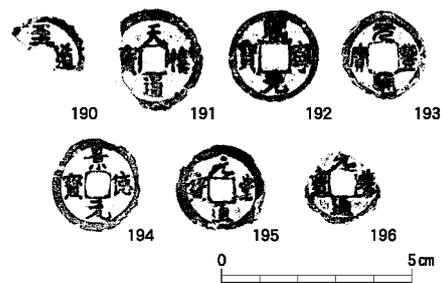


図39 錢貨拓影(1:2)

表7 銭貨一覧表

遺物番号	遺構・面 (2区中央部出土)	銭文	直径 (cm)	重量 (g)
190	第2面 遺構検出中	至道元寶	推定 2.2	0.8
191	第1面 掘下げ中	天禧通寶	2.7	1.9
192	第1面 柱穴群北西部	熙寧元寶	2.4	2.6
193	第1面 遺構検出中	元豊通寶	2.3	2.0
194	第2面 柱穴群南西部	景德元寶	2.4	1.8
195	第1面 遺構検出中	元豊通寶	2.4	2.0
196	第2面 遺構検出中	元豊通寶	推定 2.3	1.5

内側の所々に金箔が残る。

186～189(図37)は1区から出土した江戸時代末期から近代のものである。186は簪である。銅製二股の胴体に金箔がわずか残る。頭部は球体である。187は銅製一本の簪である。頭部は球体で果実に類似する。188も銅製の簪であろう。胴体が二股である。189は「かえし」が残る釣り針である。

5) その他の遺物

銭貨(図38・39、表6)

すべて2区中央部より7点出土した。宋銭あるいは模倣銭である。名称の古い順に遺物番号を付けたが出土地点の古い順に並べると194、190、196、191、192、195、193となる。

石製品(図40～42)

石錘、砥石などが出土した。

197は縄文時代の石錘である。土壌61の底から出土した。長径6.2cm、短径3.7cm、厚さ2.2cm、重さは69.3gあり、長径の両端に切り込みがある。

198・199は砥石である。198は土壌77から出土した砥石であり、長径11.2cm、短径4.5cm、厚さ1～2cmある。研ぎ

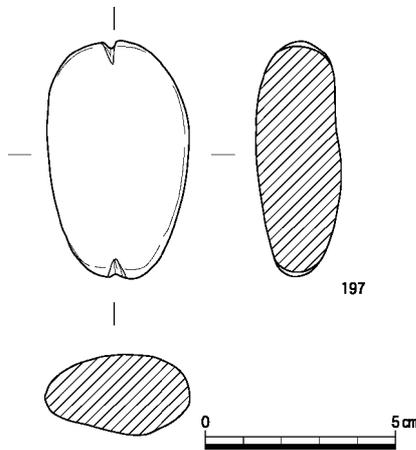


図40 石錘実測図(1:2)

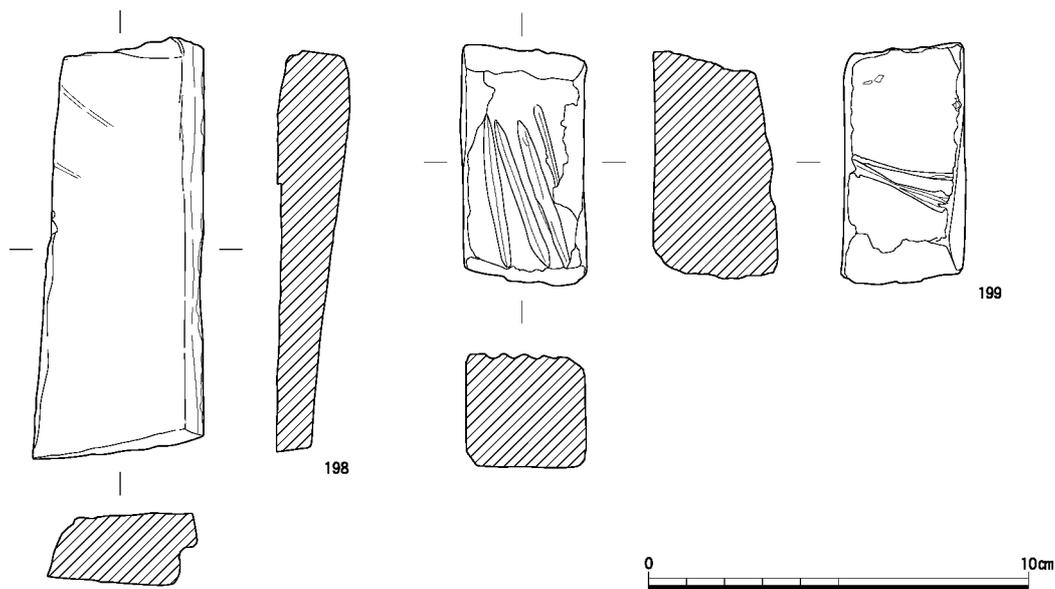


図41 砥石実測図(1:2)



図42 石製品

面は1面あり、側面は、半分の約1cm幅を使った痕跡があり、段をつくる。199は土壌76から出土した長方体の砥石であり、長径6.3cm、短径3.3cm、厚さ2.7～3.3cmの長方体である。4面全てが滑らかで、研ぎの痕跡は3面にある。2面は面の中ほどを横切る線状の幅0.5cm前後、深さの浅い1mmほどの研ぎ痕がある。さらにもう1面では、縦長に約4cm、幅0.3cm前後、深さ2mmほどの4本の線条の研ぎ痕がある。

壁土（図版34、図43）

大量に瓦や土器が出土した土壌76から焼土塊が整理コンテナで1箱（約13.5kg）出土した。破片の大きさは径数cm～10cmあり、火を受けて焼け締まっている。焼土塊は径5～10cm前後の大きなもの、平坦に整えられる面と凹状の圧痕があるもの、径数cm前後の小破片があるなかで平坦面に仕上げられ、木舞の痕跡やスサの混入がみられるものは、壁土と考えられる。つまり焼土塊の平坦面は壁土表面、凹状の圧痕は壁土下地の木舞の痕跡と考えられ、壁土のひび割れ防止用のスサが焼土塊に混じる。他の大きな焼土塊は大量に瓦が出土していること、木舞の痕跡や平坦な面がみられないことから瓦の葺土（図版34 - 200）の可能性が高い。小破片は両者の破片と考えられる。

出土した壁土の遺存状態の良好な3点（201～203）を観察した。201は大きさが長辺約9cm、短辺約5.5cm、厚さ約3.5cmあり、木舞の痕跡が良好にみられる。その表面は平坦でありさらに平らな面が側面に2面ある。土質は粘土質で径0.1～1cmの砂粒や小礫が多く混じる。裏側の木舞の痕跡は、長さ5.5cm、幅約3cm、深さ約1cmあり、側面と平行に伸び、さらにこの痕跡に直交する長さ約5cm、幅約3.5cm、深さ約0.5cmの痕跡がある。木舞の痕跡には木目と考えられる縦の細かい筋がみられる。202は大きさが長径約5cm、短径約2cm、厚さ約5cmあり、木舞の痕跡の断面がみられる。木舞の痕跡は壁土の断面に厚さ1.3cm前後、幅1.5cmあり、木目の縦の細かい筋がみられる。203は大きさが長辺約5.5cm、短辺約3.5cm、厚さ約2.3cmあり、壁土の側面が2面みられる。203にはスサが「L」字状になって入り、スサの痕跡もみられる。

出土した壁土の木舞の痕跡が平行あるいは垂直の方向になる平らな壁土側面は建築部材に接する面と考えられる。木舞はその痕跡から幅約3cm、厚さ約1cmと幅約2cm、厚さ約1.5cmの2種類があり細長い木の小割材（201・202・204・205）と考えられる。なお木舞を固定した縄などの

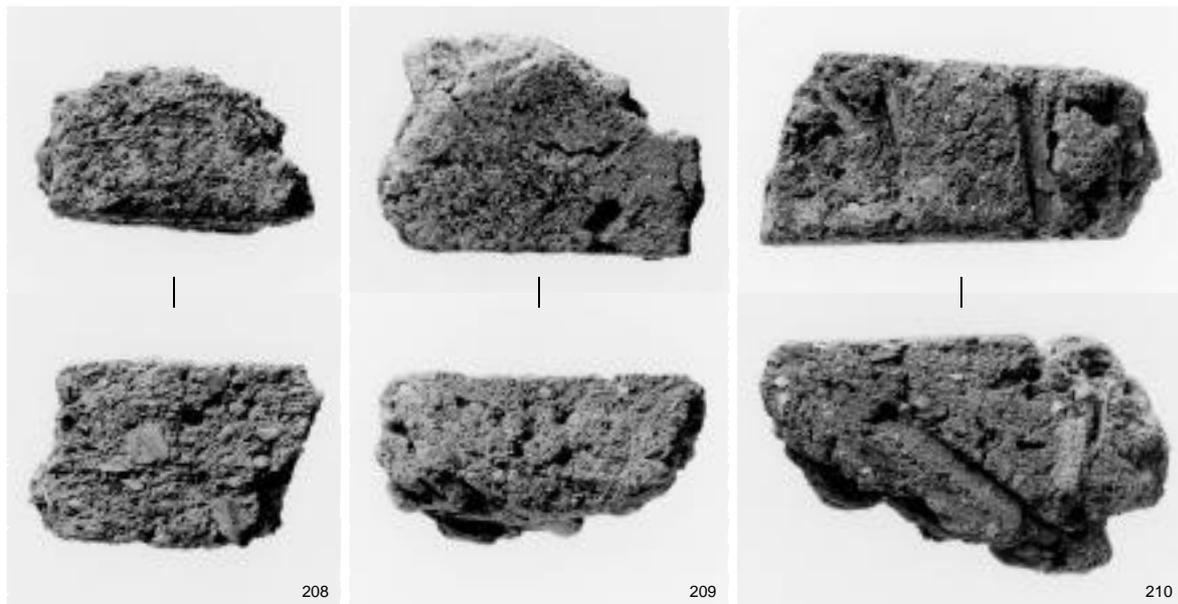


図43 壁土の断面（上段：表面、下段：断面）

跡は認められなかった。

スサは壁土表面近くまで入り、その形状と痕跡から藁と考えられる。

壁土は礫やスサが多く入る荒土と砂が多く混じる厚さ3～5mmほどの層に分かれ、その表面は平坦に整えられる。さらにその2層の表層に薄い灰白色の層がみられる壁土（206・207）がある。これらのことから壁土は、下塗り層と中塗り層があり、さらに灰白色の上塗り層があったと考えられる（図43 - 208～210）。

上塗りはこれまでの出土例で白い粘土・漆喰・火山灰が確認されている。今回の上塗りは顕微鏡で火山灰が確認できず、希塩酸の反応もない。したがって白い粘土を使用している可能性が高い。なお壁の片側の厚さは痕跡が明瞭な201から復元すると木舞の芯から3.3cm前後と考えられる。

5.まとめ

今回の調査では古期と新期、2時期の顕著な遺構を検出した。古期は鎌倉時代後期の大規模な掘込み地業である。新期は室町時代前期の土壇や柵などの遺構である。これらの遺構について古絵図などから検討を加えたい。

古絵図の検討

調査地周辺の古絵図に鎌倉時代後期の亀山殿を中心とした景観を描いた「山城国嵯峨亀山殿近辺屋敷地指図」²⁰⁾（図48、以下「亀山殿指図」）がある。また天龍寺・臨川寺を中心とした室町時代前期にあたる「山城国臨川寺領大井郷界畔絵図」²¹⁾（図46、以下「大井郷絵図」）がある。さらに「天龍寺境内絵図」²²⁾元禄五年（1692）（図45）がある。そして現況の道筋をあらわした図（図44、以下「現況図」）を作成し、それらを比較検討した。

「現況図」と「天龍寺境内絵図」を比較した。その位置が符合していると思われるものに、「大

井神社」と「大橋明神」、「臨川寺三會院」、瀬戸川（旧芹川）のKとJ地点がある。

「天龍寺境内絵図」と「大井郷絵図」を比較した。同位置と思われるものに「大橋明神」と出釈迦大路南端の「鳥居」、「臨川寺」、そして旧芹川、KとJ地点がある。また「現況図」と「大井郷絵図」を比較すると、同位置と思われるものにD地点、「毘沙門天」と「毗沙門堂」がある。

「大井郷絵図」と「亀山殿指図」を比較した。同位置と思われるものに「鳥居」と朱雀大路南側の「社」、旧芹川とK地点がある。

これらの絵図の比較から大橋神社、大橋明神、「鳥居」、「社」は同位置と考えられる。またD地点、毘沙門天と毗沙門堂も同位置と考えられる。さらに臨川寺についても天龍寺文書に「西郊川端別業、改成禅院」とあるように、亀山殿のうちの川端殿跡地に建立されたことから同位置であると考えられる。以上のことから、A地点のある天龍寺門前南北通り（府道宇多野嵐山樫原線、以下A通り）は「出釈迦大路、朱雀大路」と、F地点のある天龍寺門前東西通り（府道嵯峨停車場線、以下F通り）は「作路、造路」（現在も「造路町」の地名が近辺に残る）とほぼ同位置²³に重なると考えられる。

A通りとF通りを基準に各絵図をさらに検討していくと、野宮神社、野宮、野宮・鳥居は同位置と考えられる。そして「亀山殿指図」には野宮はみえないが、「野宮大路」とみえることからC地点は同位置と考えられる。またE地点はC地点の延長にあり、A通りとほぼ平行である。さらにF通りの道が二股になるL地点も同位置と考えられる。

C-E道とA通りをつなぐ東西の通りがある。この通りの中程に屈曲点があり、「天龍寺境内絵図」と「大井郷絵図」にも屈曲点がみられる。「大井郷絵図」ではC～屈曲点は短く描かれているが、屈曲点北隣の「西禅寺」と南西の「金剛院・浄金剛院」は「亀山殿指図」にもみえることから、「大井郷絵図」の金剛院門前道は「亀山殿指図」の「惣門前道」と同じ道と考えられる。

また「亀山殿指図」には敷地の距離が記されている部分がある。屈曲点と朱雀大路までは29丈7尺と読み、約90mになる。この数値はA通りから屈曲点までの距離とほぼ一致する。これらのことから各々のB地点は同じ屈曲点であると考えられる。以上のことを踏まえ、「亀山殿指図」の朱雀大路と平行に描かれている「惣門前道」南端あたりをA通りと平行に、「現況図」のB地点から南へ延長したものが「B延長ライン」（「現況図」、後述する図50「復元図」）である。調査地はこのラインより西に位置し、「惣門前道」を道幅「大路8丈」としても、調査地は亀山殿の南西部にあたと推定できる。また「亀山殿指図」に記されている芹川殿西端から朱雀大路までの丈数約52丈（約157m）と、前述したA通りからB地点の距離約90mとは開きがあることから、「惣門前道」と「朱雀大路」が「亀山殿指図」に描かれているように平行しないとしても、調査地は亀山殿の南西部におさまる。いずれにしても、調査地は亀山殿の南西部にあたることは明らかである。

亀山殿内の棧敷殿

亀山殿は、後嵯峨上皇により建長七年（1255）に造営され、移徙した時に始まる。亀山殿は、暦応二年（1339）に後醍醐天皇の菩提を弔うため、足利尊氏により夢窓国師を開山として天龍寺を

造営した際、天龍寺に引き継がれた。

その所在地は『増鏡』(おりゐる雲、室町時代前期成立)に「・・・又さかの亀山のふもと。大井川の北の岸にあたりて。ゆゝしき院をぞつくらせ給へる。・・・河にのぞみてさじき殿つくらる。・・・」とある。当研究所川上貢所長の研究、「亀山殿の考察」²⁴⁾においても『夢窓国師語録』の光厳上皇の御幸を迎えての国師の法語の中から「天龍寺創建当初の法堂が亀山殿・如来寿量院(図46)の旧跡上に造立され・・・この如来寿量院は『五代帝王物語』および『増鏡』に寝殿の乾角東方に所在していた・・・厳密に言えば寝殿を中心とする御所施設は法堂を基点とする天龍寺伽藍の中心軸線(東西方向)より南方に位置していた・・・」と天龍寺の敷地と伽藍から亀山殿の寝殿位置を推定されている。また前述の『増鏡』と『五代帝王物語』(後深草)の「・・・さて院は、西郊亀山の麓に御所を立て、亀山殿と名付、常にわたらせ給ふ。大井河嵐の山に向て棧敷を造りて・・・」から「棧敷殿は・・・南辺の大井川の流に臨んで設けられ・・・対岸の嵐山の桜花をこの棧敷殿で鑑賞することを目的に設けられた殿舎であったようである。」²⁵⁾とし、「・・・棧敷殿の立地条件や用法を考えると、それは風光や自然美の鑑賞、遊興娯楽の会合、休息などをその主要な機能としたところの施設であった・・・」「亀山殿の棧敷殿も同様に施設として寝殿に等しい形式をもつもので・・・」とされている。さらに『門葉記』巻第一百五十八の「河臨事」、「・・・法輪寺上一町許。以棧敷殿前為第一瀬。・・・」から「・・・法輪寺の上一町のところに棧敷殿が川辺に所在していたことが知られる。法輪寺は現在の渡月橋の南に所在している寺院であり・・・即ち、大井川の北岸、小倉山の東裾、大井川に臨んだところを推定できよう。」と棧敷殿の位置を推定されている。

実際に調査地は、大堰川の北岸、西が亀山の東麓、大きくみれば小倉山の麓、南は大堰川を隔てて法輪寺があり、前述史料「亀山殿」の記述と一致する。また調査地は、法輪寺真北の大堰川北岸から約130m上流に位置しているが、鎌倉時代後期の地業は調査地のさらに東に続くことから、調査地に「棧敷殿」の推定が可能となる。

検出した地業は、鎌倉時代後期の大規模な遺構であることや、絵図の比較および史料などからも、亀山殿の南西部にあり、棧敷殿の殿舎に関連する遺構と推定できる。

霊庇廟

調査地の位置を絵図から推定してみる。「天龍寺境内絵図」(図45)では絵図みえる大井川の柵^{しがらみ}や中島の位置から調査地のおおよその位置を推定できる。「大井郷絵図」(図46)では大井川右岸の鳥居が現在の櫛谷神社とすれば、この絵図でも調査地のおおよその位置を推定できる。そしてこれらの絵図のなかのおおよその調査地位置に隣接して「霊庇廟」や鳥居がみえる。霊庇廟は『夢窓国師の言葉と生涯』²⁶⁾に『康永三年(1344)正月、霊庇廟を建てた。事の始まりは、国師の見た夢に、亀山旧跡に「新廟壮麗」が在り、その傍らに一人の「非常者」が有り、「作禮而云」う。「私のために新廟を起こしてくれて和尚に礼を述べます。」・・・神霊の庇・御加護はますます頼りになり、このことを以て「霊庇」と号した。』とある。

ところで前記の二枚の絵図には、「朱雀大路」を踏襲している「出釈迦大路(A通り)」と、東

西に造営されたとされる天龍寺の中心伽藍が直交する方位で描かれており、正確な方位で描かれたものでないことが分かる。ここに「天龍寺参道付近指図」²⁷⁾(図49、以下「参道指図」)がある。この「参道指図」には方位と距離が記されている。距離については「・・間半」「・・間六尺」という寸法が使用されていることから、1間は6.5尺と考えられる。また1尺を約0.3mとして現代の地図で池や門前を測ると(図50の太線部分)、これらはほぼ一致した。この数値と「参道指図」の位置関係を現代の地図に重ね合わせ、基点1および基点2を求め、それらを基準に霊庇廟の参道などを復元した。(図50)

参道復元図と「天龍寺境内絵図」を比較すると、基点1および基点2は「天龍寺境内絵図」にもみえ、同位置と考えられる。地点3と霊庇廟の社前に鳥居があるが、これらも同位置の可能性があり、参道もおおよその「曲がり」が窺える。これらのことから調査地は霊庇廟境内に位置することがわかる。

参道復元図と「大井郷絵図」「亀山殿指図」を比較した。基点1から地点4の道と地図にみえる南北の溝は、ほぼA通りと平行であり、さらに「惣門前道」と推定する「B延長ライン」と極めて近い位置にあることが分かる。このことから基点1 - 地点4の道と「大井郷絵図」のH地点とその北にみえる門をつなぐ道は、「亀山殿指図」の「惣門前道」を踏襲したものと考えられる。地点4は、溝が東へ続くことから道が存在した可能性があり、大井神社との位置関係からG地点である可能性がある。「大井郷絵図」では、H地点から柵まではかなり広く描かれているが、B延長ラインと霊庇廟境内東限まで距離を現しているのであろうか。さらに大井川南岸にみえる鳥居が現在の「櫛谷宗像神社」の鳥居位置と同じとすれば、I地点の橋は「現況図」²⁸⁾(図44)点線位置付近と考えられる。

霊庇廟の位置について考えてみたい。「天龍寺境内絵図」に霊庇廟の上に「多寶院」がみえる。「参道指図」には霊庇廟の右上に「多宝門」がみえる。「大井郷絵図」にも霊庇廟の右うえに「多寶院」がみえる。これらの「多寶院」と「霊庇廟」の位置関係から霊庇廟の位置は江戸時代までほぼ踏襲されていたと考えられる。

以上のことから調査地は霊庇廟内に位置すると考えられる。

以上のように、検出した室町時代前期の遺構は古絵図の比較検討から、天龍寺の「鎮守」である霊庇廟に関連するものと考えられる。そして今回検出した遺構は、「大井郷絵図」にみえる霊庇廟の鳥居が柱穴137、柵が南北柵Dにあたるものとみられ、溝128はそれらを区画する東限の溝と考えられる。土壇は基壇の可能性もあり、霊庇廟本体がこの近辺にあった可能性もある。

棧敷殿から霊庇廟

棧敷殿から霊庇廟の変遷について述べる。棧敷殿の廃棄年代は土壇76の出土遺物から13世紀末～14世紀初頭と考えられる。検出した地業は大規模なものであり、何れかに基壇を伴う建物があったと考えられる。しかし、それらを全く検出し得なかったということは、後世に削平されたのち整備・整地されものと考えられる。これは室町時代前期に足利氏がその権力と財力を費やした天龍寺造営の際に、その旧境内に位置する調査地においても整備が行われたと考えるのが妥当で

あろう。また霊庇廟造営は天龍寺造営と一体のものであり、整地を伴う霊庇廟造営は、天龍寺造営時に行われた整備の上に時を置かずして行われたと考えられる。

霊庇廟については、6.付章「旧天龍寺境内より発見の霊庇廟址について」と題して、賀茂御祖神社禰宜 嵯峨井 建氏の玉稿をいただいたので参照されたい。

遺構の方位の違い

東西に造営されたといわれる天龍寺中心伽藍は幾度かの火災により、創建当時の建物は残っていない。しかしその位置を踏襲したと考えられる現在の伽藍（方丈前の階段 - 選仏場 - 池の中橋の中心をつなぐライン）を測ると、その方位は東に向かって0.16度北偏するものの、ほぼ東西方向である。検出した室町時代前期の溝と柵はほぼ南北であり、土壌もほとんどが東西あるいは南北に位置する。このことは天龍寺の創建された方位に合わせて地割が施されたと考えられる。しかし「復元図」(図50)でもみられたように、亀山殿の方位を踏襲した部分も一部残る。

前述したように「朱雀大路・出釈迦大路」を踏襲したと考えられるA通りの方位は、測り方によっては多少違ってくるが、北に向かって約15度西偏する。地業に伴う石列の検出例²⁹⁾を鳥羽離宮跡でみると、建物の方位と石列はほぼ同方位であったことが確認されている。このことから、検出した鎌倉時代後期の掘込み地業に伴う建物もほぼ同方向であったと推定でき、天龍寺とは異なる地割によって造営されていたと考えられる。そしてこの方位の違いは遺構年代の違いを示している

土壌76出土遺物

調査区南側で検出したこの遺構からは、多くの土師器などの土器、釘類、壁土、瓦類などが出土した。それらは棧敷殿殿舎やそれらに伴う施設に使用されたものと考えられ、火を受けた痕跡がある。このことは棧敷殿が火災にあったことを示す。

出土した土師器は棧敷殿での行事などで使用されたものであろう。輸入白磁碗もこの時使用されたものかもしれない。

釘類は15点出土しており、建物に使用されていたものと考えられる。

壁土には、木舞の痕跡が明瞭に残り白い上塗りの痕跡が認められる。

瓦類は多量に出土した。これらは大小に大別できる。軒瓦も同様に大小に大別でき、その胎土・焼成などから、組合せは大振りの三巴軒丸瓦（珠文20）と連珠文軒平瓦、小振りの複弁8葉蓮華文（珠文16）軒丸瓦と6剣頭文軒平瓦とみられる。

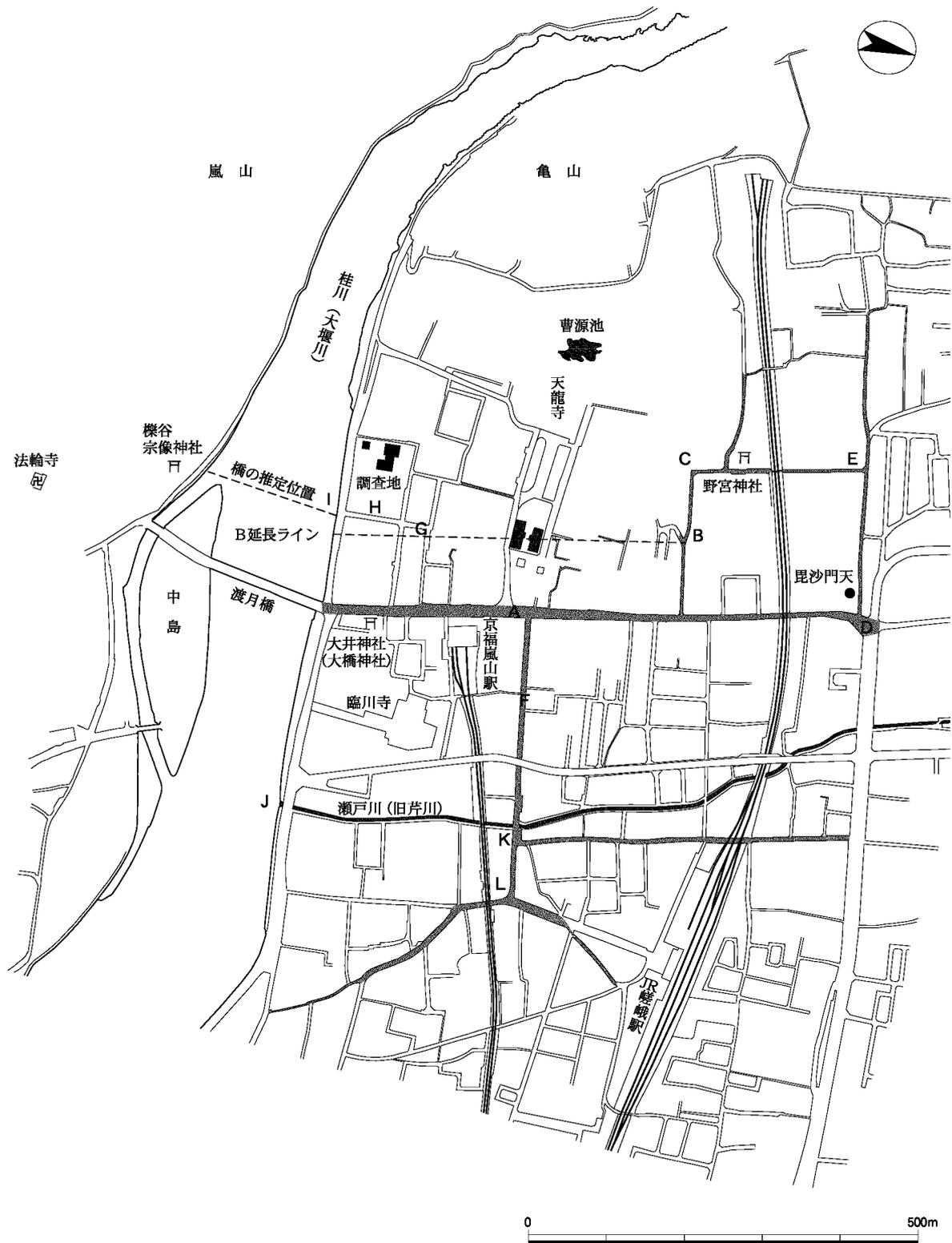
小振りの瓦は、前述したように葺きあげ状態を復元した。その奥行きからこれらが葺かれた構築物³⁰⁾は塀である可能性が高い。

なお、渡月橋から大堰川にそって西に遡る北岸は江戸時代から遊覧地であり、そこには三軒家³¹⁾または三軒茶屋と呼ばれる遊覧の建物があつた。1区の遺構はその一部と考えられる。この遺構は、埋土に焼土が多量に混入し焼けて堅く締まる土層などを検出したことと、出土遺物から元治元年（1864）天龍寺焼失の際に類焼³²⁾したと考えられる。

註

- 1) 木下保明「史跡名勝嵐山」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1993年
- 2) 久世康博「史跡名勝嵐山」『平成4年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 3) 内田好昭『史跡・名勝 嵐山』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2004-7 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2004年
- 4) 小檜山一良「嵯峨・嵐山地域の遺構分布」『京都嵯峨野の遺跡 - 広域立会調査による遺跡調査報告 - 』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1997年
- 5) 牛川喜幸「臨川寺庭園の調査」『奈良国立文化財研究所年報』奈良国立文化財研究所 1970年
- 6) 江谷 寛ほか「臨川寺庭園遺跡発掘調査概要」臨川寺庭園遺跡発掘調査団 1975年
- 7) 江谷 寛「臨川寺旧境内」『佛教芸術115号』毎日新聞社 1977年
- 8) 註7に同じ
- 9) 吉川義彦ほか『臨川寺旧境内遺跡発掘調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1979年
- 10) 磯部 勝「鳥羽離宮 殿・堂の基礎工事」『つちの中の京都 31』(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館 1996年、前田義明ほか『鳥羽離宮跡 金剛心院跡の調査』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第20冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2002年、中村 敦ほか「第110次調査」『鳥羽離宮跡発掘調査概報』昭和60年度 京都市文化観光局 1986年など
- 11) 吉村正親「法金剛院境内(99UZ369)」『京都市内遺跡立会調査概要』平成12年度 京都市文化市民局 2001年の調査例では石列が地業を区画し、さらに地業単位毎に石列が並ぶ。今回の地業と類似する。
- 12) 10)に同じ
- 13) 前田義明・会下和宏「鳥羽離宮跡138次調査」『平成4年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 14) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 15) 加納敬二「乙訓の土師器皿」『つちの中の京都 No.174』(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館 2003年を参考にすると、遺物番号33~38が乙訓地域で出土する土師器皿の影響がみられる。
- 16) 鈴木廣司ほか『常盤仲ノ町集落跡発掘調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告- (財)京都市埋蔵文化財研究所 1978年 に掲載の瓦遺物番号4の剣頭文軒平瓦と同范の可能性がある。
- 17) これら瓦の葺きあげの痕跡と横割の平瓦から復元した葺きあげ状態については、浅田瓦工場の浅田 晶久氏にご教示を受けた。
- 18) 吉川義彦ほか『臨川寺旧境内遺跡発掘調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1979年 に掲載の遺物番号T13と笠キズ、珠文の形などが一致するが中房の文が違う。
- 19) 鈴木廣司ほか『常盤仲ノ町集落跡発掘調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告- (財)京都市埋蔵文化財研究所 1978年 に掲載の瓦遺物番号3の複弁8葉蓮華文軒丸瓦と同文である。

- 20) 「山城国嵯峨龜山殿近辺屋敷地指図」 東京大学史料編纂所編『日本荘園絵図聚影 二 近畿 一』
財団法人東京大学出版会 1992年
- 21) 「山城国臨川寺領大井郷界畔絵図」 東京大学史料編纂所編『日本荘園絵図聚影 二 近畿 一』
財団法人東京大学出版会 1992年
- 22) 「天龍寺境内絵図」 京都府立総合資料館『天龍寺文書』1368
- 23) 足利健亮編「遊獵空間としての野」『京都歴史アトラス』 中央公論 1994年、山田邦和「中世都市
嵯峨の変遷」『平成14～16年度科学研究費補助金基礎研究(A)(1)研究成果報告書 2005年、原田
正俊「中世の嵯峨と天龍寺」『講座蓮如第四巻』 平凡社 1997年、などで記述されているように、
天龍寺門前南北通り（府道宇多野嵐山榎原線）は朱雀大路と出釈迦大路を、天龍寺門前東西通り
（府道嵯峨停車場線）は作路と造路を踏襲しているとされる。
- 24) 川上 貢「龜山殿の考察」『日本中世住宅の研究 [新訂]』 中央公論美術出版 2002年
- 25) 同上「附 龜山殿の棧敷殿について」
- 26) 佐々木容道『夢窓国師の言葉と生涯』 天龍寺遠諱局 2000年
の記述はないが、「この霊庇廟は後醍醐天皇を祀っている」という説もあり、後世の記録や絵図には
「後醍醐天皇」の記述が現れる。
- 27) 「天龍寺参道付近指図」 京都府立総合資料館『天龍寺文書』1411
- 28) 「渡月橋」の項『京都の地名』 平凡社 1987年によれば、昔の橋は現在の渡月橋より約100mほど
上流にあったされ、江戸時代初期の慶長11年（1606）に角倉了以によって架け替えられた。
- 29) 註10に同じ
- 30) この復元した葺きあげ状態の建物の種別は、塀である可能性を前述の浅田瓦工場の浅田晶久氏より
ご教示を受けた。またこの復元に類似するものとして、上原真人「 章考察 - 2 瓦類」『史跡大覚寺
御所跡発掘調査報告』 大覚寺 1994 に第 期瓦群（13世紀後半～14世紀初頭）によるものがあ
る「PL.42」。ここでは葺かれた建物を、総瓦葺屋根の築地塀としている。
- 31) 大塚隆編 柏書房 慶長昭和京都地図集成元禄14年（1701）實測大絵図に「三軒家」がみえる。
- 32) 当時の天龍寺塔頭寿寧院住職月航和尚の日記に天龍寺焼失と三軒屋への類焼の記録がある。



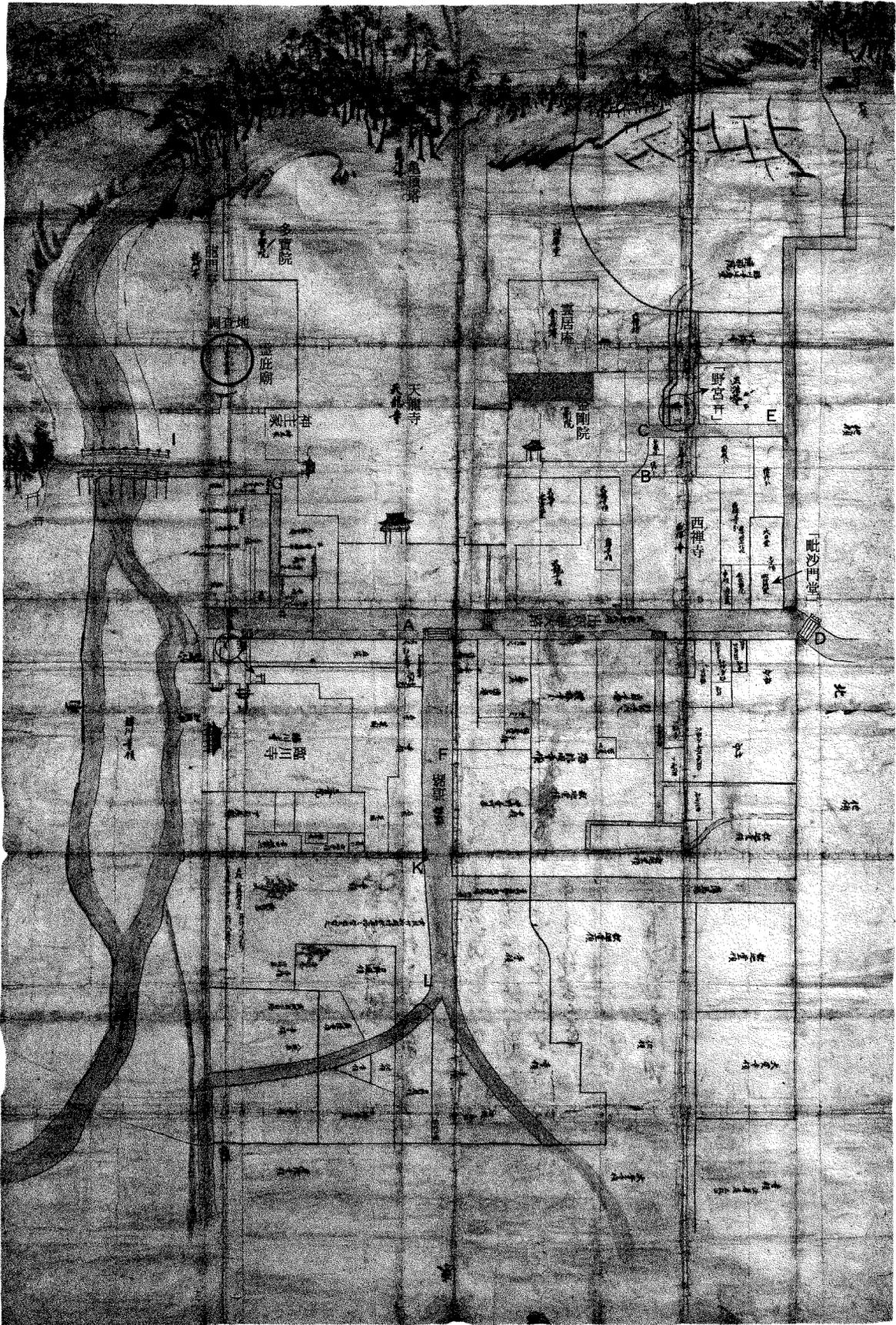
※ 現代の道筋と古絵図の道筋を対比し、各々絵図と同地点と思われる場所に英字を記入した。
 また、古い道の影響の残る道筋はグレートーン■をかけた

図44 嵐山道筋現況図



※ 主な文字の清書を加筆した。また現代の道筋と古絵図の道筋を対比し、各々絵図と同地点と思われる場所に英字を記入した。

図45 「天龍寺境内絵図」 元禄五年 天龍寺所蔵
京都府立総合資料館『天龍寺文書』1368に加筆した。



※ 主な文字の清書を加筆した。また現代の道筋と古絵図の道筋を対比し、
各々絵図と同地点と思われる場所に英字を記入した。

図46 「山城国臨川寺領大井郷界畔絵図」 南北朝時代 貞和三年仲冬 天龍寺所蔵
東京大学史料編纂所編『日本荘園絵図聚影 二』より抜粋、加筆し転載した。

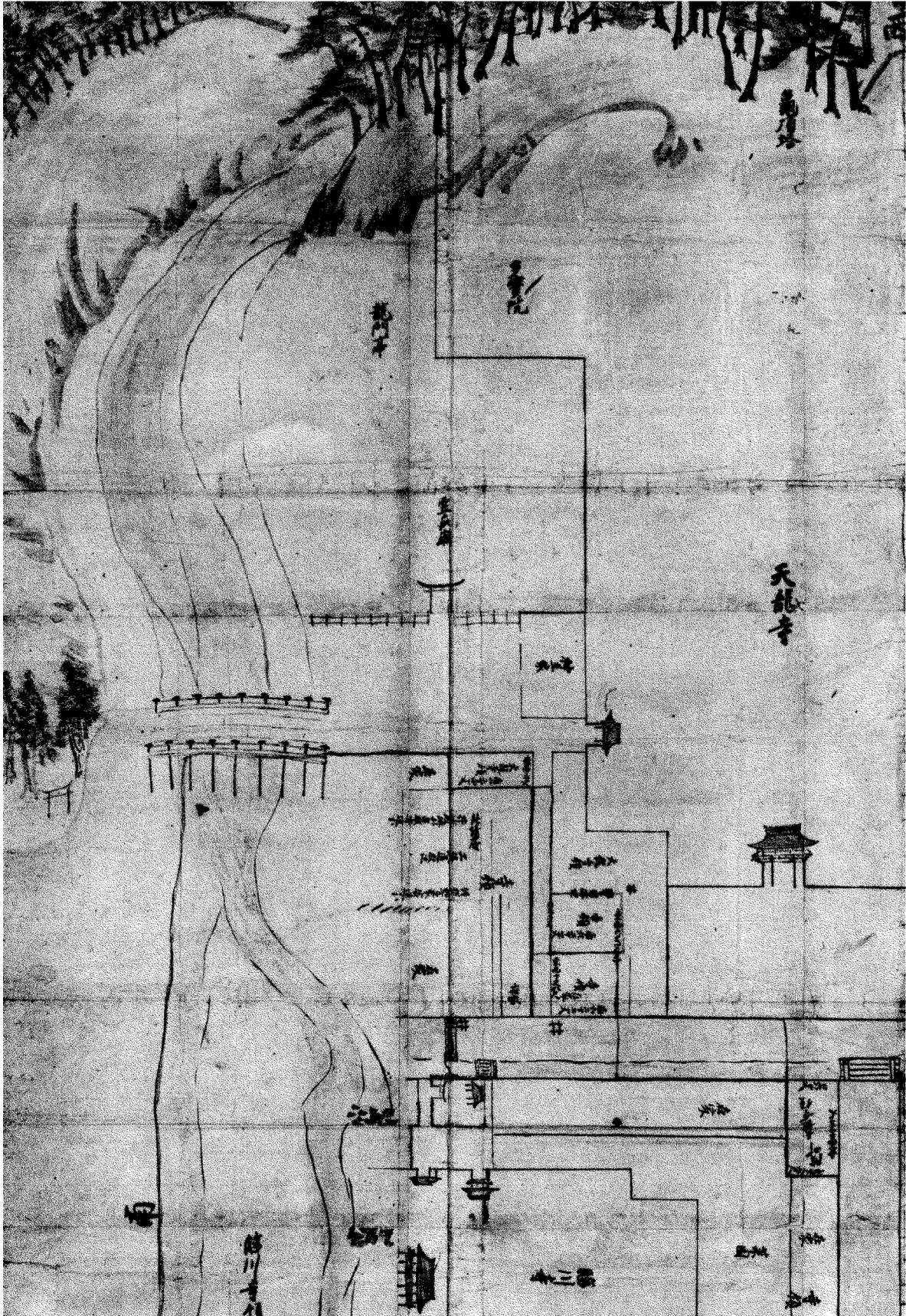
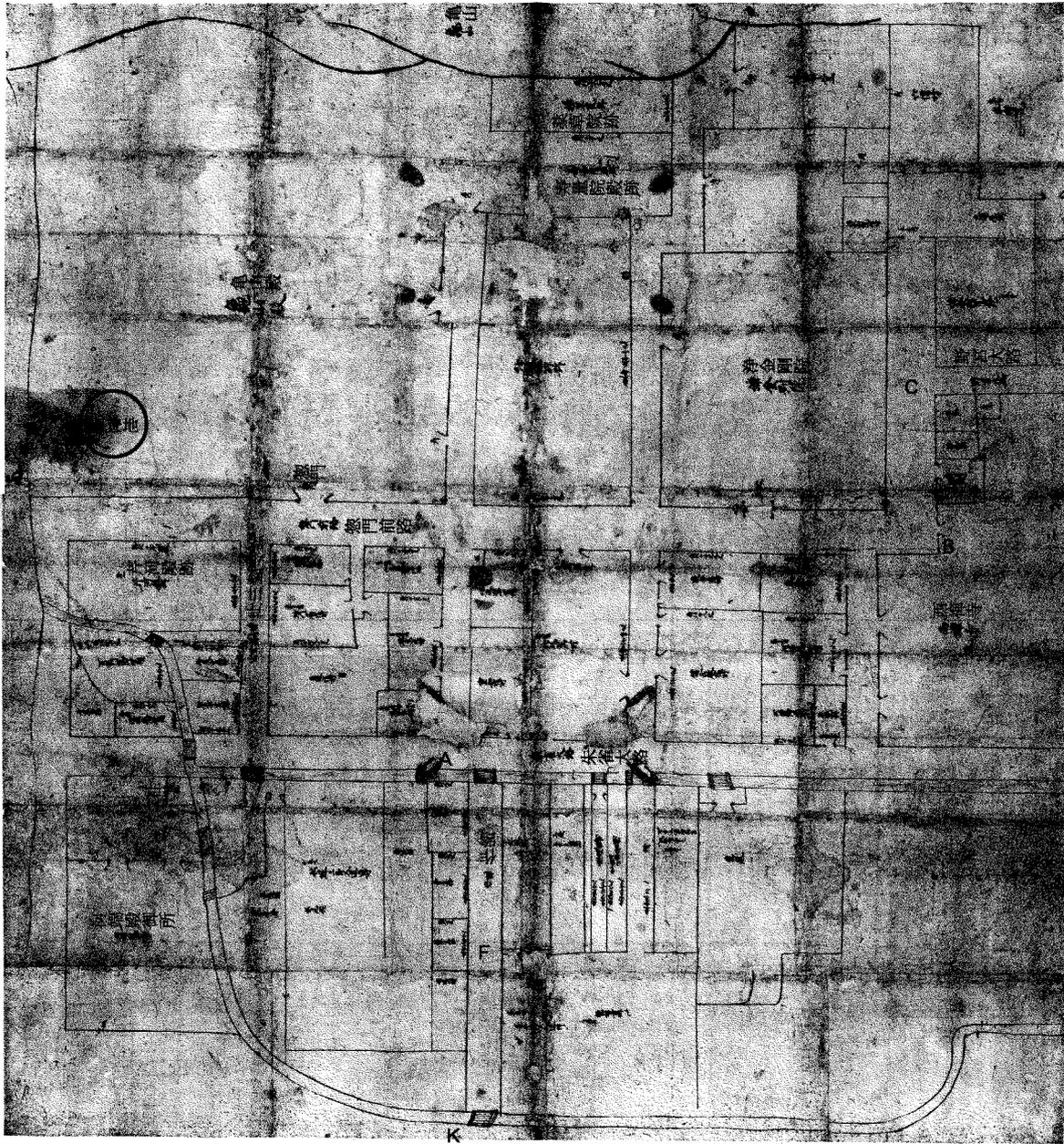
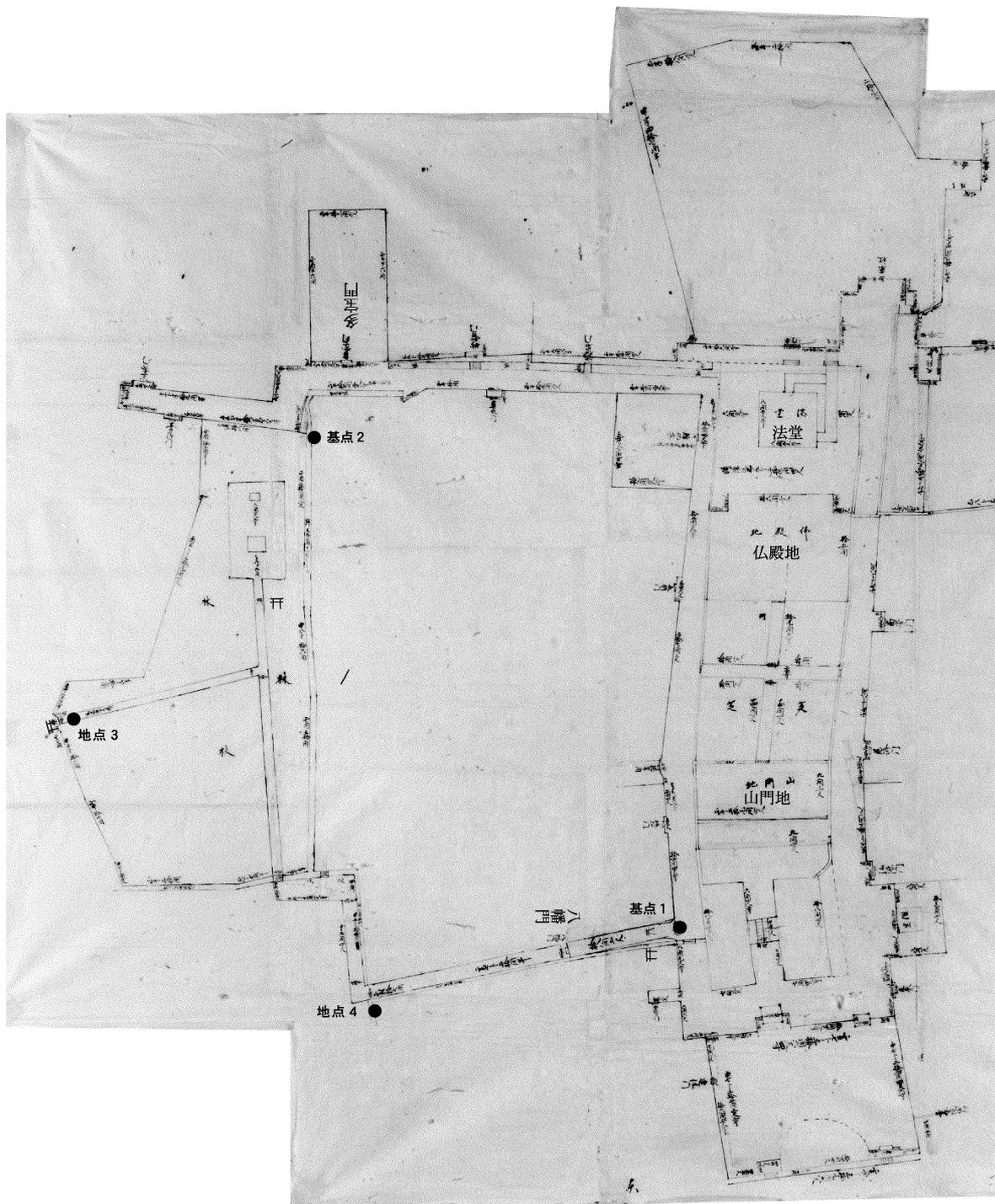


図47 「山城国臨川寺領大井郷界畔絵図」(図46)の霊庇廟付近拡大図
 明神鳥居と柵で示された霊庇廟。「霊庇廟」の文字の上あたりが本殿の位置か。入口に「神主家」が見える。



※ 主な文字の清書を加筆した。また現代の道筋と古絵図の道筋を対比し、各々絵図と同地点と思われる場所に英字を記入した。

図48 「山城国嵯峨龜山殿近辺屋敷地指図」 南北朝時代 天龍寺所蔵
 東京大学史料編纂所編『日本荘園絵図聚影 二』より抜粋、加筆し転載した。



※ 主な文字の清書と地点を加筆した。

図49 「天龍寺参道付近指図」 天龍寺所蔵
 京都府立総合資料館『天龍寺文書』1411に加筆した。

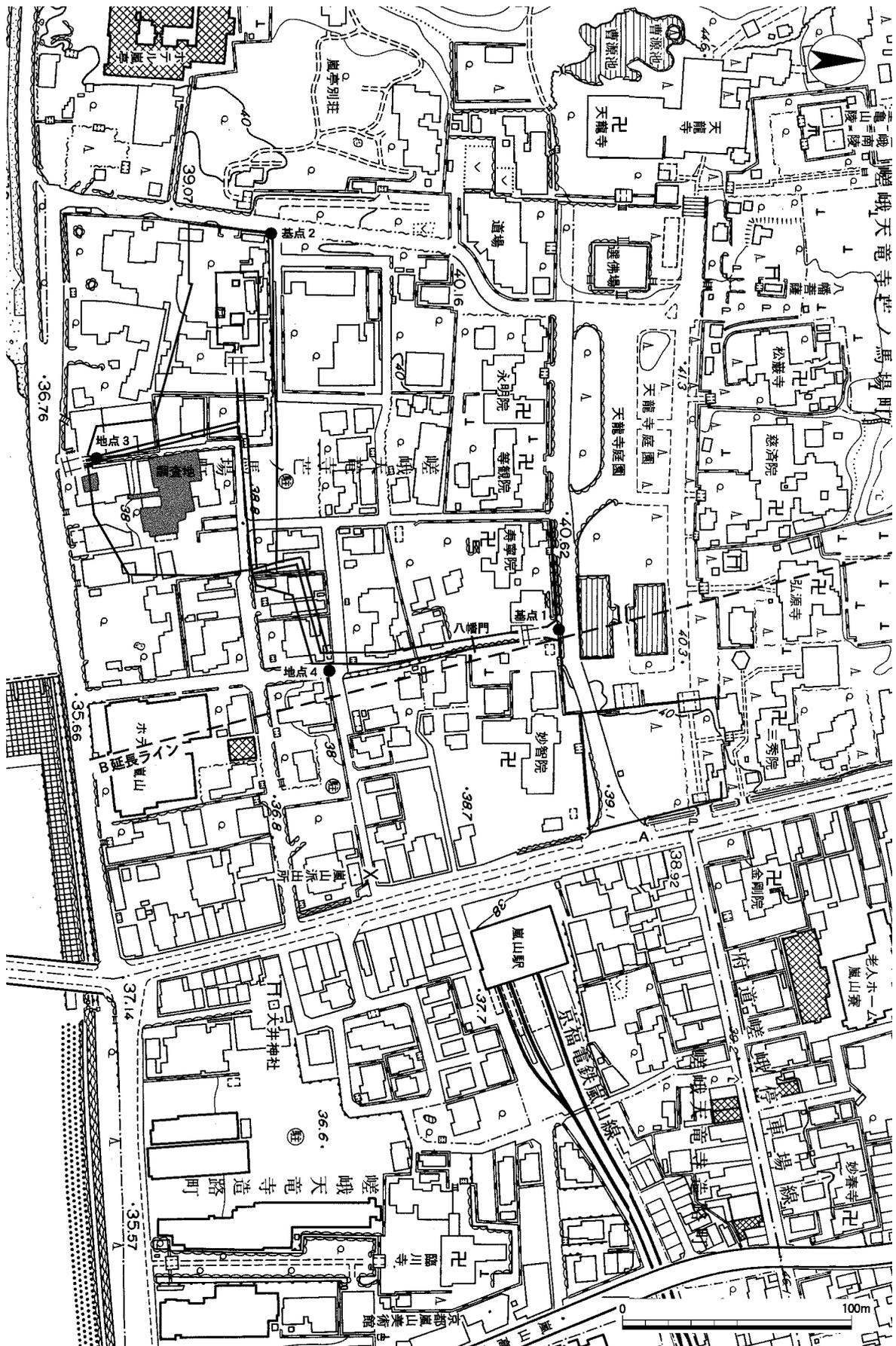


図50 参道復元図 (1 : 2,500) 「天龍寺参道付近指図」(図49)から復元した参道と地図を合成した。

6 . 付章 旧天龍寺境内より発見の靈庇廟址について

嵯峨井 建

(1) はじめに

天龍寺は足利尊氏が後醍醐天皇の菩提を弔うため夢窓国師を開山として創建した寺である。同寺はその当初から神をまつる鎮守社・靈庇廟が祀られていた。禅宗系の寺院でいえば、東福寺の成就宮、南禅寺の綾戸廟、建仁寺の楽神廟、相国寺の護国廟、妙心寺の齋宮社などがある。これらは禅宗もまた神祇を祀り、神仏習合を認める仏教教団であったことを示すものである。靈庇廟という禅宗特有のやや特異な廟名（神社名）であり、近世の地誌『山州名跡誌』『山城名勝志』に簡単ながら記され、それなりに知られた存在といえよう。とくに「天龍寺十境」の一つにあげられている¹⁾。しかしながら天龍寺伽藍の付属施設として近接するため創建当初から繰り返し被災することが多く、近くは元治元年（1864）蛤御門の変に際し兵火に罹り焼失している。しかし夢窓国師疎石に関わる史蹟として認識され、そのつど再建されて今も天龍寺境内に現存する。だが夢窓疎石の夢託による創建として言及されてはいるものの、これまで充分に取り上げられなかった問題である。今回、発掘によって所在が確認され、その一角が明らかとなったので、あらためて靈庇廟について検討をくわえたい。

(2) 発掘調査による所見



図51 鳥居の柱穴と南へ続く6ヶ所の柵
右側が社殿域、柵の奥は保津川

平成16年11月に京都市埋蔵文化財研究所の発掘調査によって検出された旧天龍寺境内の遺構について、明らかとなった靈庇廟に関する諸点は次の通りまとめられる。

天龍寺創建時に近い絵図史料の示す靈庇廟の位置と、検出した鳥居遺構の場所が一致し、室町時代前期の同廟遺構の一部であることが明らかとなった。その場所は天龍寺境内に祀られている現靈庇廟から、東南約300メートルの地点である。

鳥居の右柱（向かって左）と、これに連結する南北方向の柵の穴6ヶ所を検出した。柵の間隔が平均1.5mであり、この間約9mあり、鳥居間を仮に5mとすると、5m + 9m + 9mで鳥居と柵のラインは少なくとも約23mになる。ここから推定される神域の全体規模は500㎡以上となる。寺院鎮守社に多い小社ではなく十分に独立した中規模の神社で

あり、宗祖創建に関わる神社（摂社クラス以上²⁾）であることを示している。

鳥居の向きから、霊庇廟は天龍寺伽藍と並び、東面していたらしい。一般に社寺共に南面するのが通常である。しかし鳥居および霊庇廟は東面していたらしい。それは亀山を背景とした立地上からの東面とみられ、ちょうど大井川を挟んだ対岸の松尾社も松尾山を背にするため東面するのと同様、地形上の理由からであろう。

鳥居址を東西軸で参入するとほぼ正面に基壇状となっていて、霊庇廟があったと推定されるが、本殿基壇であるか拝殿基壇であるか未確認である。（この点は後述する）さらに鳥居と廟の間の参道とおもわれる辺りから、微量ながら白砂が認められ、参道にふさわしい。鳥居柱穴に続く柵のうち三本目の西側3mあたりの土抗に刀子が埋納されていた。地鎮遺構も検出している。

以上の諸点から、これらの遺構は天龍寺創建と同時期のものであり、霊庇廟址が確認された意義は大きい。

（3）霊庇廟創建とその周辺

天龍寺の一带は後嵯峨上皇の御所・亀山殿のあったところで、後醍醐天皇が幼少期を過ごしたところであった。今回の発掘地点の古期の層から、鎌倉時代後期の亀山殿内の棧敷殿址³⁾を検出している。

暦応2年（1339）8月16日、後醍醐天皇が吉野の地にて無念の内に崩御された。『太平記』は「其神霊御憤深シテ、国土ニ災ヲ下シ、禍ヲ成サレ候ト存候（略）哀然ベク伽藍一所御建立候テ、彼御菩提ヲ弔ヒ候ハズ、天下ナドカ静ラデ候ベキ（略）仙客ヲ帝都ニ遷進ラレシカバ、怨霊皆静テ、却テ鎮護ノ神ト成セ給候」とする。あきらかに怨霊思想に基づく天龍寺創建の動機を述べている。それからわずか2ヶ月の間に光厳上皇の院宣により後醍醐天皇追福のため暦応資聖禅寺造立の儀がおこる。これは尊氏・直義の罪業の念による冥福を祈るためのものであった⁴⁾。翌3年（1340）4月21日には早速に仏殿などの木作始が行われ、造立の槌音が亀山殿の一带に響きわたった。『暦応資聖禅寺造営記』にはこの時の儀式のくわしい様子がしるされている。このとき木作始が行われ着手されたのは、まず仏殿・僧堂・庫裏・法堂・山門であった。それでは当初の天龍寺の形態はどの様なものであったろうか。基本的には禅宗の伽藍配置であったことはもちろんだが、天龍寺は繰り返しかえし火災にあっており、そのため仏殿の礎石、古図など存在するものの復原は困難という。太田博太郎によれば宋風を模したもので、総門・三門・仏殿・法堂が伽藍の中軸線上にあり、浴室・東司・庫院は左右対称に建ち、方丈は法堂の後ろにあり、三門前には蓮池を設けたという基本プランを提示し、また堂塔のくわしい考証がなされている⁵⁾。ほぼ6年の歳月をかけて康永4年（1345）4月、ようやく天龍寺は完成した。

霊庇廟が創建されたのは天龍寺完成の前年、康永3年（1344）正月であった。『夢窓国師塔銘』によれば、疎石は「(康永)三年正月初二日夜。夢 八幡大菩薩來衛法亀山。乃建祠于寺左」と簡略にその動機をしるす。『夢窓国師碑銘』にも「(康永)三年。建八幡菩薩霊廟於寺側」とする。すなわち、康永三年（一三四四）正月二日の夜、夢につまり初夢で八幡大菩薩が現れ、建設中の

法亀山⁶⁾(天龍寺)を守ると託宣した。そこで寺の(向かって)左に「祠」を建てたというのである。『夢窓国師塔銘』は文和三年(一三五四)に建立された塔の碑文で、創建十年後の銘文である。

疎石の弟子妙葩が編纂した『天龍開山夢窓正覚心宗普濟国師年譜』は、康永3年の事跡として、疎石のみた夢の内容と廟名の由来を次のようにしるす。

春正月朔建靈庇廟。始師夢見新廟壯麗在亀山旧舊趾。傍有一人非常者作禮而云。謝和尚與吾起此新廟也。覺而謂神求。故乃經始新廟。且以佛光祖翁來化本國亦頼茲神靈乃庇故。以靈庇為号焉

つまり疎石が夢でみたものは、亀山殿の旧跡にあらわれた壮麗なあたらしい廟であった。また傍らに一人の尋常ならざる者(後醍醐天皇であろう)が立ち、礼をして云う。和尚がわがためにこの新廟を起こしたことを感謝する。夢から覚めて、それが神の求めとおもった。これは仏光禅師が来朝して我国を教化したことも「神霊の庇」を頼むもので、これにちなんで靈庇をもって号としたとしるす。

仏光禅師とは、鎌倉の円覚寺の開祖・無学祖元の謚号である。弘安2年(1279)執権北条時宗の招請により、南宋から渡来した。『元亨釈書』によれば、来朝前に鴿(鳩=八幡神の神使)が膝上に飛来するなど奇瑞があった。そして来朝すると八幡神が祀られており参詣したといい、これら神異譚が、八幡神の神縁、すなわち靈庇を示しているのである。

なお新廟創建は神の求めとあり、八幡神自身の求めによるもので、したがって尋常ならざる者は後醍醐天皇であり、その託宣とよみとれよう。後醍醐天皇は自らの近くに八幡神を祀ることをこいねがった。そして「神霊の庇」とあるように神霊は靈庇廟祭神としての八幡大菩薩であり、先にあげた二つの銘文によって八幡大菩薩が天龍寺を守るためまつられたことから明らかである。やはり尋常ならざる者とは後醍醐天皇とみるべきだろう。無念の内に崩御した同天皇を鎮魂慰霊するための天龍寺、そしてその傍らで同天皇の祖神であり、信仰してやまなかった八幡神をまつる靈庇廟、社寺一体の慰霊鎮魂の装置として創建されたのである。靈庇廟の名称は八幡大菩薩の神霊の加護をこうむる意であった。

靈庇廟を具体的にしるす貞和3年(1347)の夢窓国師自筆の『臨川寺領大井郷界畔絵図』(図46)を検討しよう。本図は土地境界図の性格上、施設・建物を描かないため利用価値は半減するものの、逆に神域の位置を把握するには正確といえよう。この手法は後述する『応永鈞命図』にも継承されている。まず大井川を背に松林を主体とする樹林の繁茂する亀山があって、その東麓に天龍寺の主要伽藍を配した。空白で建物は一切不明だが入口の総門が規模を暗示している。東西軸で入口の総門・山門・仏殿・法堂を配置し、その延長線上に樹々を背景に亀頂塔が立つ。そして山麓の南隣に後醍醐天皇を祀る多宝院があって、北隣一帯には法華堂・雲居庵・金剛院などの塔頭がならんでいた。以上を中心伽藍としておそらく堀で周囲を囲繞していた。その南隣が靈庇廟の神域で入口に明神鳥居が立ち、南側の大井川の際まで柵が伸び、本図では9本が、北側には5本の柵を描く。今回の発掘で、まさに鳥居の柱址および付属の柵が検出され、その柱穴から

柱の径が90cm前後、これに付属する柵の間隔が約1.5mあり既述のとおり6本が確認され、ここから推定される神域の規模は摂社クラス以上であり、そしてこれを本図と対照する時、位置関係から双方が一致し、本図が霊庇廟創建から3年後の制作にかかるものであるから、今回の発掘域はその当初の遺構の一部とみて差し支えないのである。

なお本図では大井川に架かる渡月橋は中島より上流に位置し、南岸の櫛谷社の前に位置しており、現渡月橋は下流に移動していることがわかる。天龍寺の寺域は総門があり、これより伽藍の中心域に参入、脇の南門を出ると霊庇廟があり、その前を南行すると大井川を渡月橋で渡り櫛谷社、法輪寺、松尾社に至る。この霊庇廟の鳥居前の門前で注目されるのは、南門を出てすぐ右脇にある「神主家」の存在である。今回の発掘に際しその推定地域から一段高い邸宅跡が検出されているが、これは霊庇廟の神主宅とみていいのだろうか。今のところ他に例証をみないので何ともいえない。あるいは、その正面にある大井川の渡月橋を渡れば指呼の距離にある櫛谷社の神主家、あるいは臨川寺前の大井川神社の神主家と見ることもできよう。しかし櫛谷社は松尾社の所属に係り、ましてや大井川を挟んで天龍寺と境界争論もあったことから、可能性は薄い。しかし松尾社は『古事記』にもしるされた古社であり、天龍寺あるいは臨川寺より遙か以前に存在しており、その意味から可能性は無くもないが飛地の形で櫛谷社あるいは松尾社の神主家がこの時代に存在したとは考えにくい。霊庇廟の門前という位置からもみても新設霊庇廟の神主家とみた方が素直だろう。しかし繰り返しになるが神主家の例証は絵図以外に今のところ見当たらない。

そこで霊庇廟の神主家とすれば、祭祀をつとめる専任神職が存在したことになる。しかし後述するが応安4年(1371)の正遷宮に平野社の卜部家が奉仕しており、霊庇廟専任の神職の痕跡がなく、いずれにしてもいいようがない。

なおこの年、光厳上皇が天龍寺に御幸されたが『園太暦』貞和3年2月30日条によれば、真新しい山門に下御、仏殿での焼香、法塔から客殿と巡拝し、疎石は東堂塔頭に伺候し迎えた。さらには山門上にも昇られ観音殿を参拝され、この間大井川東岸に設けられた「店」に幸されるが、霊庇廟のことはでてこない。大井川の対岸に嵐山がみえるところから霊庇廟からほど近い場所に「店」がもうけられたと推定されるが参拝の記述はない。史料の残存が少なく軽々にはいえないものの、この後の史料にも全くみえない。このことは、霊庇廟は存在するものの、行幸・御幸・將軍の社参など公的参拝を受けるほどの位置にはなかったといえよう。疎石による創建の宗教的意義に関わる礼拝施設でありながら、対外的には現れない、寺内の補完的位置にとどまるものであったといえよう。

ついで絵図史料として挙げられるのは『応永鈞命図』であるが、本図も天龍寺とその一帯を描くが寺域の門構えのみを描き、建物は省略する手法をとっているため形態などは不明である。康永三年に霊庇廟は鎮座し、『応永鈞命図』はその53年後の絵図であり、当初の姿とは言い難い。鳥居と瑞垣はほぼ同様に描くが、鳥居前の神主宅は見当たらない。

事実、翌4年(1345)4月に天龍寺は開山するが、13年後の延文3年(1358)正月に、天龍寺は全焼する。しかしさいわい雲居塔・後醍醐天皇を祀った多宝院・龜頂塔・そして霊庇廟だけ

まぬがれた。

そして次に記録であられるのは応安4年(1371)8月の霊庇廟の正遷宮記事である。正遷宮は、仮殿から元の本殿に御神体を返す遷座祭である。したがって、これに先立ち仮遷宮が行われたはずである。こうした遷宮は火災等による被災、耐用年数による造替などであるが、その理由は不明である。『吉田家日次記』は次のようにする。

應安四年八月四日甲申、伝聞、天龍寺鎮守霊庇廟八幡今日正遷宮也、兼遠宿禰奉行、神宝五種、御剣、御鉾、御弓、御矢之料足十一貫文、自武家下行御装束神供以下之総用二千匹、此外御簾自寺家直下行三百匹彼二千匹自寺家同致其沙汰、兼遠束帯詔戸役、行持衣冠勤御體役、是兼行繁著布衣候所役、午刻向西郡宿坊自家 自彼所出立、吉時亥子時云々、神供三前納長櫃持参云々、神馬一匹云々、

吉田ト部には吉田社系と平野社系の二流⁸⁾があった。この『吉田家日次記』は吉田社ト部の日記であって、平野社ト部に関する情報であったため「伝聞」とするすのである。まず正遷宮とあるので、一般論として仮遷宮(外遷宮)が数ヶ月前にあったはずだが不明である。この時奉仕した平野社ト部氏は兼遠宿禰を筆頭に、行持、兼行(行繁か)の3名であった。この正遷宮で注目されるのは神宝類を伴った遷御であって「神宝五種、御剣、御鉾、御弓、御矢」とするす。武具を中心としたもので、ここでいう神宝五種の内容は不明だが御剣以下を含まないものと思われる。神宝5種としては通常考えられるのは、すでに武具があげられているから御幣、鏡、笏、桧扇、神服などであろうか。これら神宝のみならず、装束、神供料足は武家すなわち將軍家が下行した。武家の棟梁として足利の氏神・八幡神であること、さらに尊氏に霊庇廟に対する思い入れからみて当然であろう。寺家側は社殿内に掛け荘厳する御簾など下行した。將軍家、天龍寺双方が2000匹づつ負担をした。ここで注意されるのは、これら神宝類は遷宮祭を荘厳する単なる行列用の威儀具ではなく、神体と共に新社殿まで行列し、そのまま殿内に神宝として納めたとみるべきだ。神宝類は少なくとも9品目以上と考えられ、その品目数と内容からみて、これを奉安する内陣空間は「祠」ではなく、「神供三前」とあるように、おそらく八幡三神を分って奉斎するものとみて中規模の三間社(おそらく流れ造)もしくは石清水八幡宮に習った八幡造であろう。

そして経過は不明ながら、遷座祭の祭儀奉仕の依頼を受けた平野社のトップである兼遠は束帯に身を包み祝詞(詔戸)を奏上、衣冠姿の行持をして御神体(御体)を捧持せしめ行繁は布衣を著けて奉仕をした。盛儀のほどがしのばれる。

(4) 後醍醐天皇・夢窓国師・足利尊氏と霊庇廟

霊庇廟創建の発端は疎石の夢託によるものである。疎石は、臨川寺・西方寺・天龍寺などの禅林を開山したが、一体その神祇観はいかなるものであったろうか。仏門に入ってまず学んだのは真言密教であった。また天台にも学んだが、師事した天台僧の臨終場面に立会い、その際見苦し

いなり様を目撃した。往生の姿に失望した疎石は、そこで密教道場を結界して行に入ったところ達磨の頂相を得る。そして決然として禅宗へ改宗する。いずれにしる真言宗をひらいた空海は丹生・高野の両明神を、一方天台宗をひらいた最澄も日吉山王社を祀っていた。はじめ疎石の結縁した教団の二人の宗祖たちは、日本の神を護法神・鎮守神として祀り、したがって疎石にとって神祇への崇敬は宗教的素地として備わっていたといえる。さらに当時の禅寺の大半が神祇を奉祀していたことも禅宗の一般的状況として認められ、霊庇廟創建が異例ではないことを物語っている。

しかし、その神はなぜ八幡神であったのか、次に問題となる。疎石の初夢に現れた神は八幡大菩薩であった理由は何か。まず武家の総領として尊氏が崇敬したのは八幡神であり、彼が元弘3年(1333)四月挙兵したのは篠村の八幡宮であった。一方、後醍醐天皇は神仏を単に拝むということとどまらず自ら祈祷する異形の天皇でもあったことは知られている。法服を身にまとい天冠をいただき手に密教法具を握る天皇の頭上には皇祖天照大神と共に八幡大菩薩の神名がしるされている。八幡神を深く信仰するところのあったのはいうまでもない。追われる後醍醐天皇と追う尊氏と、敵対する立場に立った両者に共通するのは、ほかならぬ八幡大菩薩だったのである。その意味で師家として、両者を何よりも深く理解する疎石が苦悩の中で後醍醐天皇の御霊を鎮めるため建立した天龍寺の建設のさ中に、夢枕に八幡神が現れたことは当然ともいえよう。関係史料に八幡神であることの説明は見当たらないが、うなずけるところである。何よりも6カ年に及ぶ建設のさ中に立ち現れたことの宗教的意義は注目される。疎石自身、生死を分かった両者の間に立って、苦しみの中で天龍寺を創建し、その境域に後醍醐天皇を祀る多宝院を、そして守護神として八幡を併せまつることによって安心立命の境地に立ったのは、尊氏はもちろん、ほかならぬ疎石自身であったといえよう。鎮魂慰霊のために創建された天龍寺にとって霊庇廟は欠くべからざるものであり、八幡神を廟として相添えることによって宗教的機能を果したのである。

かくて康永3年に創建された霊庇廟は天龍寺と興亡を共にし今日におよんで⁹⁾いる。



図52 現在の霊庇廟 天龍寺参道脇に鎮座する

天龍寺（靈庇廟）関係年表

建治元年（1275）夢窓礎石誕生。

正中2年（1325）8月、疎石、後醍醐天皇の勅により南禅寺入寺。この年、正中の変。

嘉暦元年（1326）8月、伊勢神宮に参詣

元弘3年（1333）5月、鎌倉幕府滅亡。

建武元年（1334）建武中興成る。尊氏、征夷大將軍となる。

建武3年（1336）正月、中興の業やぶれる。

暦応2年（1339）4月、疎石、西芳寺を中興開山。

8月、吉野において朝敵討伐・京都奪回を遺言し、後醍醐天皇崩御。

10月、勅により後醍醐天皇追福のため天龍資聖寺造立の儀おこる。

暦応3年（1340）4月、仏殿・僧堂・庫裏・法堂・山門木作始_多宝院仏事始

暦応4年（1341）4月、備後国三谷を造営料所として寄進_多宝院仏事始

7月、曳地行う

12月、元に天龍寺船を派遣。

康永元年（1342）3月、天龍寺礎始

7月、天龍寺木引

8月、天龍寺立柱

12月、天龍寺上棟

康永3年（1344）正月、靈庇廟創建。

10月、『夢中問答集』刊行。

康永4年（1345）4月、天龍寺法堂を開き、尊氏・直義が臨席の中、夢窓が上堂説法。

8月、後醍醐天皇7回忌並開堂法会、尊氏・直義参詣

同月、光厳上皇、臨幸。

貞和3年（1347）松尾社との境界争論で国師自筆の『臨川寺領大井郷界畔絵図』作成

延文3年（1358）正月、天龍寺全焼。雲居塔・多宝院・亀頂塔・靈庇廟のみ免れる。

足利尊氏死去。

貞治6年（1367）天龍寺火災

応安4年（1371）8月、靈庇廟正遷宮

応安6年（1373）天龍寺火災

康暦2年（1380）天龍寺火災

応永33年（1426）『応永鈞命図』制作

文安4年（1447）天龍寺火災

応仁2年（1468）天龍寺火災

註

- 1) 疎石は亀山十境を定め、霊庇廟ほか普明閣、絶唱溪、曹源池、拈華嶺、渡月橋、三級巖、萬松洞、龍門亭、亀頂塔を選んでいる。
- 2) 撰社は本社祭神と特別の由緒ある社、それ以外を末社という。それは社殿規模で明らかで本社に次ぐものが撰社、一見して明らかな小社が末社である。
- 3) 川上貢『日本中世住宅の研究』1967・墨水書房
- 4) 後醍醐天皇崩御の報を受けるや「諸人周章、柳嘗武衛両將軍哀傷恐怖甚深也、仍七々御忌慙歎也、且為報恩謝徳、且為怨靈納受也」(『天龍寺造営記録』)とするす。
- 5) 太田博太郎『日本建築史論集、社寺建築の研究』所収、「五山の建築」1986・岩波書店刊
- 6) 当初、「法亀山」と称したが、暦応3年7月22日の光厳院の院宣により「霊亀山天龍資聖禪寺」と改めている。
- 7) たとえば夢窓自筆とされる『山城国臨川寺領大井郷界畔絵図』に、天龍寺の門前を北行する「出釈迦大路」(朱雀大路・現在の府道宇多野嵐山榎原線)に面して西禅寺の前に「松尾神領、号車大路」が存在する。
- 8) 『卜部家系譜』(神道大系論説編八・卜部神道上_西田長男校注)は平野系卜部を次のようにしるす。
(傍注はカッコ内にまとめる)
平野系 - 兼國(平野社預/隱岐國務/從五位上/神祇大副)... (この間10代省略・全て平野社預) - 兼前(平野社預/正四位上/内蔵権頭/神祇權大副/頓滅) - 兼遠(平野社預/正四位上/治部卿/神祇大副) - 兼内(平野社預/四位/神祇) - 兼右(平野社預/宮内少輔/神祇權大副/兼内弟) -
- 9) 天龍寺文書によって、近世も奉祀されてきたことが確かめられた。精査した訳ではないが目についたものを列挙しておく。
 - ・貞享4年(1687)修造に際し丹と竹釘が用いられ、よって屋根は桧皮葺、社殿は朱の彩色が施されていた。
 - ・正徳四年(1714)霊庇廟石燈籠を造立。
 - ・享保2年(1727)霊庇廟屋根を葺く。
 - ・延享5年(1748)門外の華表(鳥居)造立
 - ・寛延3年(1750)遷宮
 - ・天明9年(1789)鎮守八幡社として表門、鳥居、拜殿、本社をしるす。本社は三間社流造、板葺き。(『天龍寺臨川寺惣建物箱絵図目録』)
 - ・寛政3年(1791)鎮守として、やはり本社は三間社流造、板葺き。
 - ・文政9年(1826)八幡社の社守宅建立。

圖 版

報 告 書 抄 録

ふりがな	しせき・めいしょう あらしやま							
書名	史跡・名勝 嵐山							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報							
シリーズ番号	2004-11							
編著者名	布川豊治・本 弥八郎							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2005年1月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しせき・めいしょう 史跡・名勝 あらしやま 嵐山	きょうとしうきようく 京都市右京区 さがてんりゅうじ 嵯峨天龍寺 すすきのばばちよう 芒ノ馬場町7	26100	A809	35度 00分 38秒	135度 40分 42秒	試掘調査 2004年7月 1日～2004 年7月16日 発掘調査 2004年8月 12日～2004 年11月12日	253㎡ 700㎡	旅亭新築 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
史跡・名勝 嵐山	史跡・ 名勝	縄文時代			縄文土器・石錘			
		平安時代			軒平瓦・土馬			
		鎌倉時代後期	掘込み地業・溝・ 土壇・整地層		土師器・瓦器・輸入磁 器・瓦類・金属製品釘 類・壁土・砥石		掘込み地業は、亀 山殿内の棧敷殿に 伴うものと推定す る。	
		室町時代前期	土壇・溝・柵列・ 柱穴群・土壇・整 地層		土師器・瓦類・金属製 品・土錘		検出した遺構は、 天龍寺霊庇廟に関 連する遺構と推定 する。	
		室町時代後期	溝・土壇・柱穴群		土師器・瓦器・金属製 品・土錘・銭貨			
	江戸時代	溝・土壇・焼土層 ・砥石		土師器・磁器・瓦類・ 金属製品・土錘				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-11

史跡・名勝 嵐山

発行日 2005年1月31日

編集発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 075-256-0961